IS～強制の適合者～

ほのか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ～強制の適合者～

【Ｎコード】
Ｎ７０８７Ｖ

【作者名】
ほのか

【あらすじ】
ＩＳを動かせる男「織斑　一夏」
そんな彼とは同じくＩＳを動かせる男が現れた！
しかし、彼はイレギュラーな存在で・・・

オリ主人公設定

オリ主人公設定
黒時（クロトキ）　刹那（セツナ）

年齢　不詳（過去の事をあまり覚えていない為）

性別　男

性格　面倒事には関わりたくない怠け者
＜しかし事の重要度によって行動的になる＞
本人曰く才能が無い駄目人間…らしいがＩＳ操縦技術や
その他の色々な面で（無駄な所まで）高いスキルを持つ
《結局、面倒臭いの一言で大半を済ませてしまう・・・》

見た目　まぁ・・・女装が可能な位に顔立ちは良い
　目の色が蒼
ＩＳの適合者？なのだが、一夏とは違って昔、軍事力増強の為に何処かの国が
身体を改造（国際法違反であり原因不明の適合）をしているのでＩＳを動かせる
病弱ではないが時々、心臓に原因不明の痛みが走る

専用ＩＳ『鐵（クロガネ）』

機体は『銀の福音（シルバリオ・ゴスペル）』の漆黒色ｖｅｒに2対の翼

「黒月（クロヅキ）」太刀
絶対防御無効化能力（但し、雪片・雪片弐型よりも威力は遥

かに弱い）

ついでにエネルギー消費が無い武装

オリ主人公設定（後書き）

変じゃ…なかったですか？
初投稿なので大目に見てください
m（＿＿）m

始まり

ここはＩＳ学園
ＩＳ適正者の育成を行う教育機関だ
そして、そのＩＳ学園に輝かしい新たな春の到来が来た。のだが・・
・

「ぜ、全員揃ってますね～…それじゃＳＨＲ始めますよ～…」
うろたえてるというか、困ってる？というか…
副担任の「山田（ヤマダ）　真耶（マヤ）」先生が――
先生なのか疑わしい学生みたいな身長で出るとこ出てる目の前の人
さっき空間投影ディスプレイに映し出して自己紹介をしていた――

「これから一年間皆さん仲良くして行きましょうね～…」
・・・・・・・・シーン
新入生だから緊張をしているのかといえばそうではない
「ＩＳは女性にしか扱えない」なので此処にいるのは女性だけかと
言うと　違う

その定義をブッ壊してＩＳ学園にいる男子生徒（・・・）が２名、いる。いちゃってる
クラスの女子全てが２人の男子生徒を凝視している
そんな異常な光景を前に山田先生は口を開いていく
「じゃ、じゃあ自己紹介をお願いしますねー出席番号順で始めてください」

そうして不思議な空気感が漂う教室で自己紹介が始まって行った・・
・

一夏ｓｉｄｅ

「（こ、これは想像してたよりキツイな。絶対に俺と後ろの《黒時(クロト)
　刹那(キセツナ)》だっけ？
に注目してるよなぁ。後で話しかけてみないと俺、この場所で過ごして行く自信が無いぞっ…！）」

この席順にだけは内心、感謝している一夏だった

刹那ｓｉｄｅ

「（あぁ・・・面倒だ。何故か知らんが女子達がメッチャ見てくるんだが？
ゑ？俺なんか悪い事したかなぁ？まぁ前の席に男子がいるのは良かったな。
後で話しかけてみるか・・・）」

だいたい同じような事を考えている2人の内、一夏の方に山田先生が声をかけた

「…ん。…らくん。織斑君っ」

「は、はいぃ！？」

急に呼ばれ驚いたのか一夏は裏返った声が出てしまっていた

クスクスと辺りから笑い声が聞こえて落ちつかない一夏

「あ、あの大声出しちゃってゴメンね？ゴメンね？い、今＜あ＞～始まって
＜お＞の織斑君なんだよねっ！じ、自己紹介してくれるかな？」

イレギュラー男子2人は本当に先生だろうかと疑わしくなった瞬間だった

「えっと・・・やりますから、自己紹介しますから謝らないでください」

「ホントですか!?本当ですね?じゃぁお願いします」
自己紹介をする前に一夏はチラリと窓際の幼馴染
「篠ノ之（シノノノ）箒（ホウキ）」を見たが視線を外されたのでショックを受けながら
後ろを振り向く

「えっとー…お、織斑　一夏です。よろしくお願いします」
礼儀正しく斜め４５度に体を折り挨拶を終えた一夏
正直言って自己紹介なんだから、もっと聞かせてよ（キラキラの目
で見る女子一同）
の空気が漂っているので一夏は再度幼馴染を見るが目を逸らされる

一夏ｓｉｄｅ
「（…っく!マズイ!このままだと暗い奴って思われちまう…こう
なったら）」
刹那ｓｉｄｅ
「（お?この空気でまだ発言出来んのか。やるねぇー俺は耐えられ
んぞ…）」
関心したのも束の間

「以上です!」
ガタタッ。半数の女子と刹那は軽くずっこけていたが一夏にはこれ
以上
どうする事も出来ないようだ
数人がずっこけて、それを見ていた一夏の後ろから何かが振り下ろ
されるのを

刹那は見た
――パアンッ!!!一夏の頭に激痛が走る
すかさず振り向くと、そこには誰もが知っている女性がいた
それは――

始まり（後書き）

ストーリーの構成に自信が全く無いねっ☆

・・・Ｍｅ頑張るよ

出逢い

一夏の後ろに現れた――――
「げっ、関羽！？」
パアンッ！
再び四角い何かで――もとい、出席簿アタックを喰らう

「誰が三国志の英雄か馬鹿者」
そう言って教卓に向かう人物は「織斑（オリムラ）　千冬（チフユ）」ＩＳ世界大会大１回優勝者だ。このＩＳ学園に通う者が知らぬ訳が無い
「山田先生、クラスへの挨拶を押しつけて済まなかったな」

「い、いえ副担任としてコレくらいは・・・」
頬を染めながら話す山田先生。はにかんでるなー
「諸君、私が織斑　千冬だ。君達新人を１年で使い物になる操縦者に育てることが
仕事だ。逆らってもいいが私の言う事は聞け。いいな」

この台詞だけを聞いたらただの傍若無人にも程がある
普通の人ならドン引きｏｒブチ切れかもしれないが！
「キャーーーー！千冬様、リアルの千冬様よ！」
「私、お姉様に憧れて、隣の県から来ました！」隣県って近いな！？
「ずっとファンでした！」

「はぁ…毎年、よくもこれだけの馬鹿者が集まるものだ。感心する。」

一夏ｓｉｄｅ

「（これがポーズじゃなくて本当に鬱陶しがってるんだよなぁ・・・）」
刹那ｓｉｄｅ
「（まぁ…この人の事だから本心から　そう思ってるんだろーな）」
一夏&刹那「（人気は買えないって知ってんのかな?千冬姉（この人は））」

しかし甘かったのはこの2人
先程よりも黄色い声が挙がったのは割愛させて貰おう
「で?お前は挨拶も満足にできんのか、お前は」
辛辣。千冬が一夏にかけた言葉は辛辣であった

「いや、千冬姉、俺は――」
パアンッ!「織斑先生と呼べ」
「・・・はい」
このやり取りでクラス中に疑問が浮かぶ

「「「織斑君って千冬様の弟?」」」「ならそれが関係してＩＳを?」
「なら黒時君は?」
女子一同は情報伝達速度が素早く、色々な話が浮かび上がっていた
「あー…騒ぐな。まだ自己紹介が終わってない。次は、黒時　お前の番だ」

織斑先生の一言で静かになっていくクラスで自己紹介とは鬼か!
さっきの騒ぎの中済ませたかったよ!と、思わずにいられない刹那だが
愚痴を言っても仕方ない。自己紹介をするとしよう

「えー…黒時　刹那です。趣味…はー特に無いですけど、何もしない時間が好きです
特技はー徹夜をするなら2日3日は余裕です。よろしくお願いします」
ペコリと頭を下げクラス中を見回す。
よし！さっきの織斑みたいに＜もっと言って＞みたいな目の奴はいない
――――もっとも今の自己紹介ってどうなの？感がハンパなかったが
――――

心の中でガッツポーズ。よしこれでこの場は乗り切った！
その後は順調に全員分の自己紹介を終えて休憩へと入った

ここで一夏は後ろの席の刹那に声をかけてみることにした
「えっと、黒時だっけ？俺、織斑一夏。一夏って読んでくれればいい」
「ん？あぁ！俺は黒時　刹那　俺も下の名前で刹那って呼んでくれ」
「よろしく。って聞くけどさこの状況（女子に囲まれる）辛くないか？」

「まぁ何かと視線が集まるのは勘弁したいけどな」

休憩に入り（それでも女子からの視線は絶えず）、一夏は刹那と挨拶を交わし雑談をしている処に
「お2人方ちょっと、よろしくて？」
「「ん？」」
声をかけられた2人が声の主に顔を向ける

そこには鮮やかな金髪の女子がいた。わずかにロールがかった髪は『いかにも』
高貴なオーラが出ていた
「訊いてます？お返事は？」
「聞いてるけど何？」「何か用事か？」

一夏と刹那が普通の返事をしたはずなのだが、目の前の女子はワザとらしく声をあげた
「まあ！なんですの、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも
光栄なのですから、それ相応の態度というものがあるんではないかしら？」
「「・・・・・・」」正直、この2人はこの手の人は苦手だ

何が偉くて威張るのかが理解できない。そして刹那はこういった偉そうにしている奴が
心底苦手である　話しかけられたので、一応言葉を返しておく
「悪いが、俺は君の事を全く知らないから話す態度なんて知らない」「刹那に同じくだな」

刹那ｓｉｄｅ
そりゃだって初対面の人に敬語ってのは礼儀として解るが、相手が上から目線話してくるなら…ねぇ？
それとも何か？コイツの国の言語で話せって？日本語で話してきたのは　そっちなのに

一夏ｓｉｄｅ
確か自己紹介で何か言ってたけど…正直、千冬姉が担任だった事の方がショックだ

お互いがつまらない考え事をしていると目の前の女子は目を吊り上げて
「わたくしを知らない？このセシリア・オルコットを？イギリスの代表候補生にして、入試主席のこのわたくしを！？」
「あ、質問いいか？」一夏が聞く
「ふん。下々の要求に応えるのも貴族の務めですわ。よろしくてよ」
「・・・代表候補生って何？」
がたたたっ！聞き耳を立てる周りの女子や刹那までもがずっこけた
「お前、本気か？マジか？リアルでか？」
「おう。知らん」セシリアが「信じられない」って顔をしたな…今っつーか言いきったよこの子・・・知らない事は素直に言おうって顔してるよ
「代表候補生ってのは、まぁ要約すると国家代表の候補生。つまり…
エリートってトコかな？」
「そう！エリートなのですわ！本来ならわたくしのような選ばれた人間とは、
クラスを同じくする事だけでも奇跡・・・・・幸運なのよ。
その現実をもう少し理解していただける？」
「そうか。それはラッキーだ」「あー幸せー（棒読み）」
「……馬鹿にしていますの？」
お前が幸運だって言ったじゃん
「大体、あなたは知識が少しはあるようですが（刹那を睨みながら）

あなたはＩＳについて何も知らないくせに、よくこの学園に入れましたわね

あなた方がＩＳを動かせるとの事で期待をしていましたけど、期待はずれでしたわね」

「俺に何か期待されても困るんだが…」

「期待する意味が解らんな…」

嫌味を混ぜて返事をする刹那にセシリアはこめかみに何かが浮かんでいたが

気にする事は無いだろう。うん

「まあでも？わたくしは優秀ですから、あなた方の様な人間にも優しく接してさいあげますわよ

何せわたくし、入試で唯一教官を倒したのですから」

唯一をかなり強調し、自慢げに語ったセシリアだったが・・・

「入試って、あれか？ＩＳを動かして戦うやつ？」

「それ以外に入試などありませんわ」

「あれ？俺も倒したぞ、教官」

「は・・・・・・？」

「あぁ、俺も戦わされたが勝ったぞ？」

「は・・・・・・？」

そんなに２人の言葉がショックだったのか、目を見開いて驚きながら

「わ、わたくしだけと聞きましたが？」

「「女子ではってオチじゃないのか？」」おおう２人の声がモニったよ

ピシッ！ん？何か音が聞こえたな

「わ、わたくしだけではない、と？」
「えっと多分？」「女子限定だったらだろ」
「ッ――――――！」
声にならない音を出して偉くご立腹の様子。そこへ一夏が

「えーと、落ちつけよ。な？」
ブチッ。「こ、これが落ちついていられ――――」
きーんこーんかーんこーん。
次の授業開始のチャイムに言葉を遮られたセシリアは

「また後で来ますわ！逃げないことね！よくって！？」
逃げゼリフを吐きながら席へと戻っていった
それと同時、織斑先生が入ってきて先程までの空気は一変して
次の授業へと入っていった・・・

出逢い（後書き）

いやぁ～…恐い。
自分のすとーりー構成力の無さが恐いねｂ

ゴホン！
ご覧になってくださって、どうもです

英国の人、憤慨。（前書き）

チュートハンパですが大目に見てください・・・

英国の人、憤慨。

「これから実戦で使用する各種装備の特性について説明する」
織斑先生が教壇に立っている。よほどの大事な事なのか山田先生まで手にノートを持っていた。不意に織斑先生が
「あぁ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな
クラス代表とはそのままの意味だ。対抗戦だけでなく、生徒会の会議や委員会への
出席・・・まぁクラス長だな。誰かいないか?自薦他薦は問わないぞ」
「はいっ織斑君を推薦します!」「私は黒時君を推薦します!」
おや?このクラスにはイレギュラー男子と同じ名字の人がいるのか・・・

「ふむ…なら候補者は織斑一夏と黒時刹那の2人だな?」
一夏「お、俺!?」刹那「ちょっと待ってください先生!」
何で俺達なんですか!?と尋ねる前に一夏は出席簿により強制着席
刹那は「黙れ」の一言と空飛ぶ出席簿攻撃で黙らされた

「推薦された者に拒否権は無い。諦めろ　それで?他にはいないのか?
いないならこの2人のどちらかがクラス代表だぞ」
仕方なく鬼<千冬>の言う事に逆らえず一夏は刹那に、刹那は一夏にクラス代表を擦りつけてやろうと考えている所・・・

「納得いきませんわ!」
バアンッ!と大きい音を立てて立ち上がるセシリア

そのような選出は認められません！大体、男がクラス代表だなんて
いい恥晒しですわ！
このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえと仰るのですか？

いきなり立ち上がったセシリアが憤慨している最中――
一夏ｓｉｄｅ
「（おお！さっき仲良く話していたお陰でセシリア・なんとかさんが変わってくれるっぽくなっ…大体、男がクラス代表だなんて　いい恥晒しですわ！
このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえと仰るのですか？…た？あれ？）

刹那ｓｉｄｅ
「（おお…あのセシリアって奴、クラス代表を俺がやらなくてもいい様に説得でも…大体、男がクラス代表だなんて　いい恥晒しですわ！
このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえと仰るのですか？…してくれる訳無いよねー）」

――馬鹿な考えをしている2人に更なる罵る声が聞こえてくる
「実力からして、わたくしがクラス代表になるのは必然。それを物珍しいという理由で極東の頭の悪い猿と
得体の知れない猿に任されては困ります！」
頭の悪い猿＝一夏　得体の知れない猿＝刹那

この言葉で一夏は人間扱いされてない事に驚いているが、もう1人のイレギュラー存在は
ブチッ「…おい」
「？なんですの得体の知れない…「ガタガタ煩ぇんだよ」！？」

「俺は人だ。人以外の何者でもねぇんだ。古いだけが取り柄の国のガキが喚くな」
彼が何故キレているのか、周りの誰にも理解不能であり（千冬は理解して様に眺めていたが）

彼が怒っている事に少しばかりビビっていた。
セシリアは怯えながら同時に自国の侮辱をされ怒って
「な、なんですって！？」
「だから五月蝿いって言ってるだろ？理解できないのかエリートさん？」

その光景を眺めていた一夏が止めに入る
「おい刹那、言い過ぎじゃ…「だ、大体文化としても後進的な国で暮らさないと
いけない事自体、私にとっては耐えがたい苦痛で――」……」カチン×2
「「イギリスだって大したお国自慢ないだろ。世界一不味い料理で何年覇者だよ」」

声が重なり、一夏はやってしまったの顔と刹那のドヤ顔…何故ドヤ顔？
の2人にセシリアの「わたくしの祖国を侮辱しますの！？」という声が
聞こえた次には「決闘ですわ！」の声と彼女の指が2人に突き出されていた
刹那は「最初からそのつもりだ」と「一夏はどうする？」と聞かれたので

「おう。いいぜ。四の五言うより解りやすい」
「言っておきますけど、わざと負けたりしたら私の小間使い――い

え！
奴隷にしますわよ」
「テメェの奴隷になるぐらいなら本気で相手してやるよ。手加減しねぇぞ？」

と、刹那と一夏＜手加減（ハンデ）＞と口にするとクラス中の女子から大きな声で
笑われた。「２人ともソレ、本気で言ってるの？（笑）」――と。
そう、今は女尊男卑の時代・・・まぁここで言い争うよりちゃんとケリをつける
２人は「ハンデは無くていい」と言い、織斑先生の締めの言葉でその場は収まった

――授業終了後――
「なぁ刹那…さっきは、なんであんなに怒ってたんだ？」
――一夏聞かれて、正直に話す必要は無いと感じた刹那は
「なんとなくだよ」とはぐらかしていたが、
彼は＜人＞として生まれて来なかったのだ…ただ、軍事増強の為に作られた＜兵器＞

だから怒った。自分はもう＜人＞なのだから、＜人＞以外のモノ以外と、
呼ばれたくないから・・・と、「おーい」一夏に呼ばれ思考を中断。
「（にしても、猿呼ばわりされただけでキレるなんて大人げなかったな）」
少しばかり自重気味に薄い笑いを浮かべながら返事をする

「どうした？」
「俺、ＩＳの事よく解ってないから、刹那がＩＳに詳しいなら俺に教えてほしいんだ」

コイツはＩＳの事を理解せずにここに（ＩＳ学園）いるのか…
呆れながらも、まぁいいか。と思い了承をして雑談を開始したのだった

――雑談中に――
「……ちょっといいか？」
誰かに声を掛けられ、２人は声の主へと振り向いた

英国の人、憤慨。（後書き）

ところで、ふと思ったもですが…
主要キャラの登場が、このままのスピードでは遅くなるので
これからは、なんとか投稿スピードを上げていかなくちゃ！と

がんばりますっ！

ファースト登場

「……箒？」
一夏に箒と呼ばれた人物はポニーテールで、少々目つきがキツそうな子だった
「ん？一夏、知り合いか？」
「ん？まぁ、幼馴染だからな」

幼馴染という言葉に、箒と呼ばれた子は不服そうにしているが…理由なぞ知らんわ。
「それで？何か用か？えっと…「篠ノ之　箒だ。」篠ノ之」…無愛想な奴っぽい
俺、＜刹那＞が《篠ノ之》と呼ぶと、箒は先程みたいに不服そうにしているが…（以下同文
…ん－名前を呼んだだけで睨まれるとは…何故だ？聞いてみるか

「なぁ篠ノ之？」
ギロリ。また睨まれた…
「なんで睨まれるんだ俺」一夏に聞いてみると言い難そうにしておられる。
これは名字を嫌ってるとかか？なら本人にどう呼べばいいか聞いてみる

「えっと篠ノ之？なんか呼び方が嫌だったか？なんか怒ってるように見えたんだが」
「う・・・別に嫌…というかあまり名字で呼ばないで欲しいのだが…」
「ならなんて呼べばいいんだ？さっきから睨まれてるのが気になってな」

「す、すまん。ワザとではないんだ。・・・そうだな、下の名前で呼んでくれればいい」

本人から許可が下りたので、下の名を呼ぶ事にする。と
「篠ノ…じゃない、なぁ箒？一夏に用事があんのか？」
さっきから気になっていたのだが、休憩時間なくなるぞ、そろそろ
「あ、あぁ一夏ちょっと話がある。」「（刹那）俺がいない方がいいか？」

「そうなのか箒？」「う…うむ」「なら移動するわ」
「いや外で話してくるさ。いいだろ箒」「解った」
「遅刻しない様に戻って来いよー」
2人は廊下へと出て行き話を始めていた（ぶっちゃけ声がでかくて全部聞こえていた）

そして授業も終了。放課後に早速、一夏にＩＳの事を教えていると（面倒臭いが1時間で１００円で教える事になった）
「あ、黒時君に織斑君。まだ教室にいたんですねー」
顔を上げると山田先生が資料を片手に立っていた

「2人の部屋割が決まりましたよ」
「なんですか唐突に…って俺等は家から通学じゃなかったんですか？」
「千冬ね…織斑先生に聞いた話と・・・」
2人して首を傾ける

そうしたら山田先生が小声で2人は特殊（イレギュラー）だから、
家からの通学は色々とホニャララらしい。らしい
「解りました。それで俺達の部屋は何所なんですか？」
「あ、いえ、そのー…お2人は同じ部屋でなくて…」

おや?これは1人1部屋の予感か?寮生活で同室の住人を気にせずに個室とは!
そんな期待も露知らず。山田先生は・・・
「お2人の部屋なんですが…黒時君と織斑君は違う部屋で女子と同室になってるんです」

・・・・・・「はぁ?」
何を言っているのだ?2人部屋なら片方の女子を移動させればいいのに?
態々(わざわざ)、女子と同室?・・・困るんですがっ!
「えっと…これは織斑先生が決められたので変更は無理だと思います」

「流石、千冬姉…あ、でも俺は家に荷物があるんですけど」「俺もです」
鬼むら…違う、織斑先生が決めたなら逆らえないと判断したが、荷物に
関しては家に帰らないとならない。しかし、
「私が手配しておいてやった。ありがたく思え」
音も無く気配を消して近寄ってきたぞ、この鬼(ヒト)先生
「織斑先生、俺は家に戻る必要があるんですが」
「妹から。と張り紙付きのダンボールが届いていたぞ」
……余計な事しやがってアイツめ

「2人とも事態を把握したなら自室に戻れ。下校時間だ」
織斑先生は、そう告げて去って行った
「なら私も失礼しますねー」山田先生も去って行った
「なら俺等も部屋に言ってみるか」「おう、教えてくれてサンキュ

な」

教室に残っている2人もＩＳの勉強を止めて各自個室に向かって行く…

一夏ｓｉｄｅ

「ここか１０２５室。」

彼が入って数十秒後にドアから木刀が飛び出すという事件？があった・・・何故だろうね

刹那ｓｉｄｅ

「えーと、１０２１室　ここだな」廊下の突き当たりである

コンコンとノックをするが、返事は無い。留守か？と思いつつ

ガチャ――ドアを開け入室。電気は付いているが、人は　いな――いや気配を感じる

何処にいるのか解らず、その場に立っていると背後に気配がッ！

と、何故同居人に対して　こうも気構える必要があるのか解らないが――同居人は

暗殺術に長けているっぽい。ってか速ッ――――！！！多分同居人が飛び出てきて

後ろを獲られる！かと思うと急に視界が暗くなる。

「だーれだ？」少し大人びている声が聞こえるが・・・

「知らん。解らない」そう言うしかないだろう

視界をふさいでいる指はさらさらとして、すこし冷たいのが気持ちいい

「はい、不正解」

指が離れて刹那が振り向くと、困惑する刹那を楽しそうな笑顔で眺

めている、
２年の＜リボンの色から＞女子だった

ファースト登場（後書き）

あー…大丈夫！ワタクシめの妄想力だけは、もう末期さっ？
文章力皆無でスミマセン・・・
がんばりますよー

ところで、刹那君の同居人が解りましたか？かなり早い登場ですが
アノ人です

オリ設定で刹那君に妹つけたけど、出てくるのか？
出てこないです・・・いつか伏線回収しよう

同室の不思議な人

振り向いた先の2年生女子は何故だか不思議な雰囲気を纏っていた
「……何者ですか？」少しばかり睨んでみる
相手の名を確認する前に相手の素性を聞いてみる
「ん？どうして警戒してるのかな？」

顔を合わせる前に瞬速で後ろから視界を奪う人が言う台詞ですか・・・

「いやいや警戒しない方がおかしい…ですよ。いきなり視界を奪われたら」
見たところ上級生なので敬語を使う
「ああ、最初の出会いでインパクトがないと、忘れられると思って」

「この部屋にいるって事は同室の人ですよね？普通忘れないでしょう普通」
「けど、キミは普通じゃないからね」
「・・・根拠も無いのに失礼ですね」少しイラついた
先程よりも警戒心を高めておく

「ううん、今の動きから私に背後を獲らせない様に構えてたからね良い動きだよ」
――――？　俺の知られたくない過去の事じゃないのか？
少しばかり警戒を解いてソフティー？に会話を始めよ…「流石、ＩＳによる軍事力増強のせいで強制のＩＳ適合者になったキミは普通じゃないね」

「！――アンタが何故知っている！？」
いきなりの不意打ちに声を荒げてしまう。

このコトは織斑先生と学園の理事長くらいしか知らない筈だ
「やん。声を荒げないで」フザけているのか、落ちついているのか
解らない

「いいから答えろ！答えなければ――」
「あんまり大きな声だと他の部屋の人達に聞こえちゃうよ？」
「ちっ……何故、俺の正体を知っている？」セシリアとの事があり、
すぐにキレはしない
聞かずにはいられないのだが、ここは落ちけ俺。口封じは後で出来る

「その前に、自己紹介させて貰うよ。私は更識　楯無
ここの生徒会長よ。よろしく」手に持つ扇子に自己紹介と書かれて
いる…
「いきなり自己紹介？…まぁいいか。俺の事は知っているみたいだ
から
自己紹介は必要ないな？だから早く俺の質問に答えろ。何故知って
いる」

上級生だからって、俺の秘密を知る者には容赦なんか無い。口封じ
するべし
「焦らない焦らない。私だけが名乗ってキミが名乗らないのは不公
平だよ」
――何を呑気に話を聞いているんだ俺は…なんかペースを乗っ取
られた感じだ
「・・・俺が名乗ったら質問に答えるか？」

目の前の人物は「もちろん」と答えたので名乗った
「俺は黒時　刹那。」我ながら、それだけか！？と思ったね。
人が折角、名乗ったのに「知ってるよ」とかほざかれた…殴りてぇ
「うん、じゃあキミの質問に答えようか。私は生徒会長であり更識

家の人間なの」

更識家――確か対暗部用暗部の裏世界のプロフェッショナルだったっけ

「更識家・・・あぁ成程、裏世界の奴を裏世界の奴が知るのは当然、か」

「私が全部を言う前に納得しないでほしいな」

知るか。俺の秘密を知ってる奴には容赦なんか（以下同文

「で？例え更識家の奴が俺の事を知ってても何故接触する？監視の為か？」

「うーん…キミと話してるとペースが乱されるね」

アンタが言うか・・・・さっきから流れを乱すようにしやがる

「私がキミに近づいたのは理事長から任されたんだよ。後は私個人で興味があったからね」

「あぁ十蔵さんか…」

入学前に織斑先生と理事長と俺の3人で俺の今後の話しをした時に仲良くなったアノ人か…美味しいお菓子を有難う。十蔵さんbって違う。あの人が心配だからって更識を向かわせたのだろう

「わかったかなぁ？」何か年上目線の様なコトバだった。あ、年上か・・・

「理解は出来た。だが俺の秘密を内密にするかどうかアンタを信用してない」

「大丈夫よ、そんな暗～い話はこっちの世界（ウラのセカイ）でしかしないわよ」

・・・信用、するのは不安だが信用している2人の内1人が任せたのだ。

「・・・アンタを信用してみる」十蔵さん…今度、お菓子集（たか）りに行くからな

自分でもかなり簡単に決めてしまったが、信頼してみようと感じた
「よろしい。なら――」
先程までの張り詰めた空気から一転。楯無は
「というわけで、同室の更識　楯無よ。よろしくね黒時　刹那君」

あ、そうか同室の人だったっけ
「俺の事は刹那でＯＫ…ですよ。名字はあまり好きじゃないんですよ楯無先輩」
さっきまで焦っていた？から敬語を忘れていた。
「そう。では私も楯無と呼んでもらおうかな。たっちゃんでも可」

「解りました、楯無さん」たっちゃんと呼ばないらしい
このやり取りから、２人は先輩と後輩の仲になった
「そーいえば楯無さん？」
「何かな？」

「ここって１年の寮ですよね？何で２年の楯無さんが此処に？十蔵さんに頼まれて？」
そう、ここは１年生寮。２年の楯無がいる筈がないのだ。
しかし、楯無は当たり前のように
「それは生徒会長権限で、ね。ついでに面白そうだったから」

いきなりのｊｏｋｅｒ（ジョーカー）だった
「・・・さいですか」
その後は楯無さんと親睦を深める為にお互いの事を少し少し話し合った

――――――

翌日、楯無さんが「刹那くーん起きてー朝だよー」とか言って刹那に声をかける
「ん～…まだ時間…あります…から寝させてくださ…い」
学園に行く時間はまだまだなので刹那は起きろと言われても起きないのは、
やはり朝の睡魔は格別に強いからだろう。しかも刹那は朝に弱い
「むー抵抗するわねぇ。こうなったら…」
スタスタと楯無さんが近づいてくる音がする・・・
正直、眠いので寝返りをして朝日が指す方から体を背ける。すると
「うりゃ。こちょこちょこちょ～」
「うわ!?やめっ、あ、うわ、ひぃぃぃぃ!」
Ｌｅｔ、ｓくすぐりＴＩＭＥ
「さあさあ、起きなさい」
「ちょ、やめ、起きて、起きてまっ、あはは!」
――――起こされた。だから今、機嫌が悪い。だが、反論したら、また悪魔の行為が…
「それにしても楯無さん、なんで俺を朝早くに起こしたんですか?」
いきなりだったので効果は2倍、そして刹那はくすぐりが大の苦手
「まだ刹那君にくすぐりをしてなかったから」
答えになってないし、意味が解らない。
「兎に角、くすぐりは止めてください」
楯無さんは返事をしてくれなかった・・・かと言って笑顔を向けられても・・・
――――この様な事がたった1日（夜と朝の数時間）で数回あって、
楯無さんの事を

言動、雰囲気、態度などは大人びているのに稀に子供っぽい一面を持つ不思議で自分の事をわからせない。俺には何と無く自分と似ていると思った

――――朝早く起こされ、眠気も無くなり特にやる事が無いので学食へ行こうと――

「刹那くーん」ガチャ

先程、俺を弄った後に部屋を出た楯無さんが戻ってきた

「なんですかー？…ってどうしたんですか？その料理」

手に持つトレーには見た目が綺麗で香りも良い料理が乗っていた

「うん。さっきのお詫びと親睦を深める為に楯無お姉さんが朝御飯を作ってあげました」

正直、朝御飯はいつも野菜ジュースｏｎｌｙの俺には＜金が無い訳じゃないぞ＞

とても眩しく見えた。最近は料理をまともに食べてない＜金が無い訳じゃないぞ＞

「（確か最近はずーっと野菜ジュースとコンバットレーションだけしか食べてないぞ）」

楯無さんが俺の口に箸でつまんだ料理を持ってくる

「はい、あーん」

もぎゅもぎゅ。ごっくん。うん美味しい美味しい。寝ぼけているのか、

食べさせられた事に何も言わない

「って楯無さんが全部作ったんですか？」

「私以外に誰もいないわよ？で、美味しい？」

「あ、はい美味しいですよ。ありがとうございます態々、こんなに」

「どんどん食べてね」

何故、こんな事をしてくれるのか解らないが美味しいので良しとする。

・・・色々と気になる事が多いが、悪い気はしないのはなんでだろうね

「さぁ今日も授業頑張ってね」

楯無さんの言葉でアノ光景が蘇る。

・・・・・一夏と共に生き延びるとしようか

「・・・ありがとうございます」

楯無さんのスキンシップ？のお陰で女子に対して変に緊張しなくて済みそうだ

――俺と楯無さんは朝食を済ませ、２人で互いの教室に向かって行った

同室の不思議な人（後書き）

楯無さんのキャラあってる？
自分では解らないです・・・

でも大丈夫！頭の中ではＩｎａｄｅｌｕｓｉｏｎだからね
・・・頑張りますっ！

授業の中で

朝、女子達が元気よくキャイキャイ会話をしている所に挨拶をする
「おはよー」
「!?く、黒時君!?お、おはよっ」
集まって会話中の女子達に俺が笑顔で挨拶をしたら顔を背けられた。
をいをい。全く…親から教わらなかったのか?人の目を見て挨拶しろって
俺は教わった事無いけどね。っつーか何故、皆顔を赤くしてんの?
風邪か?体調管理くらい出来ないと駄目だぞ、若いんだから
「お、刹那だ。おーっす」

オッサンみたいな思考を中断。一夏の後ろの席なので、席まで行き話を始める。
「おはようさん、一夏。何か眠たそうな顔してるぞ」
「あぁ…昨日の夜にちょっと、な」

「ふーん…どーでもいいか」
「いや、そこで何があった?って聞いてくれよ」
ぶっちゃけ、苦労話の感じだから興味ないが・・・
「一応、聞いてやろう。何があった?」

「実は・・・いややっぱり聞かないでくれ」
そう言って一夏は視線を窓際に送る。視線を移すと座りながらコチラを見て…
基(もとい)、睨んでいる篠ノ…箒がいる。何故睨んでる?
「何かあったみたいだが、聞かないでやるよ」

「悪いな、助かるぜ刹那」
少し、興味が沸いたが…そっとしてやろう
「俺と比べて刹那は眠くなさそうだな」
「そりゃ、一悶着があって朝早くに起こされたからな」

「？同室の人とトラブルでもあったのか？」
「違う違う。同室の人は不思議で面白い御方でしたよ」
「何故に敬語？…ふーん面白い人なら良かったじゃないか」
不思議過ぎて対応に困るし、マイペース？な人だったがな

「そういう一夏は仲良くやっていけそうな人だったか？同室の人」
「箒だったから大丈夫…だと思う」
・・・コイツはホントに何があったんだよ
「頑張れよ？」

「サンキュー」
キンコンカンコーン
一夏が元気になった所で予鈴がなり響き、織斑先生と山田先生が
入ってきて授業が開始された

――――――――
1時限目の終了時には一夏を見る限り、集中して授業を聞いている
様に
見えたが2時限目終了の鐘が鳴り響き、一夏を見ると・・・
「おーい…グロッキー一夏？」

「…駄目だ。理解不能だ」
「そんなんじゃ上（セシリア）から目線の奴との勝負に負けるぞ」
「そうは言ってもなぁ、刹那は理解してるのか？」

「ん？俺か？理解してるつもりだぞ。多分」
多分、たぶん、タブン、ヘブン（天国）…何考えてんの？俺
馬鹿２人を放っておいても授業は３時限目に入っていった
――――

「ＩＳは常に操縦者の肉体を安定に保ちます。これには心拍数、脈拍、呼吸量、発汗量、
脳内エンドルフィンなどがあげられ――」
「先生、それって大丈夫なんですか？なんか、体の中をいじられてるみたいでちょっと怖いんですけども・・・」

クラスメイトの１人がやや不安げな面持ちで尋ねているが…
「（別に体に悪影響なんか出ねーと思うがな）」
刹那にはＩＳの授業を聞く必要が無いのだ。何せ彼は感覚（なんとなく）でＩＳを乗りこなす兵器（ヒト）だから・・・

まぁ普通の人には不安なのだろう。先程のクラスメイトに返答をする山田先生
「そんなに難しく考える事はありませんよ。そうですね、例えば皆さんは
ブラジャーをしていますよね。あれはサポートこそすれ、人体に悪影響が出ると
言う事は無いわけです。もちろん自分サイズのものを選ばないと――」

おや？健全男子の前でして欲しくない会話の最中、山田先生と俺の目が合う。
一夏め、目を合わせない様に顔を背けおって…
刹那と目が合った、山田先生は一度キョトンとしてボッと顔を赤くした。

「え、えっと、いや、その、黒時君や織斑君はしませんよね。解らない例えでしたね」

天然巨乳先生のごまかし笑いは教室中に微妙な雰囲気を漂わせた。
2人の男子よか、女子の方が意識をしているみたいで、腕組みのフリで
胸を隠そうとしていて、3時限目の終わりまで余所余所しい空気だった
キーンコーンカンコーン

「ねぇねえ黒時君さあ！」「はいはーい質問ー！」「今日のお昼暇？放課後暇？夜暇？」
昨日までの様子見は終焉を迎えたのか、一夏と刹那が談笑している所にロケットスタート
「いや一度に聞かれても――」
「おい、その前に商売をするな。そこ」

刹那が気付いた整理券販売はかなりの金額が貯まっていた
「千冬お姉様って自宅ではどんな感じなの！？」
お、それは気になるぞ。案外、駄目人間（笑）っぽ――ヒュンッ！
スパッ！
「え。案外だらしな―」パアンッ！

「休み時間は終わりだ。散れ」
いつの間にか後ろに立つ鬼斑先生が出席簿×2（片方は刹那に飛んできた♪）
「織斑先生？なんで俺が攻撃されるんですか？」
「自分の心に聞いてみろ」・・・読心されたぞ

まったく、あの出席簿は何製だ？鋼か！？

先程の攻撃で頬の横を出席簿が突っ切って、血が出ていた
――危ないです。いやホント
「ところで織斑」何事も無かったが如く、会話し始める

「お前のＩＳだが準備まで時間がかかる」「へ？」
「予備機が無い。だから少し待て。学園で専用機を用意するようだ」
「（へぇ…専用機持ちか。ま、どーせデータの採取とかも目的なんだろうがな）」
一夏がティンプンキャンプンでいると、教室がざわめいた

「専用機!？１年の、しかもこの時期に!？」
「つまりそれって政府からの支援が出てるって事で・・・」
「私も早く専用機欲しいなぁ～」
一夏が意味がわかってなさそうなので織斑先生がつぶやく。＋溜息付きで

「織斑、教科書六ページ。音読しろ」
「え、えーと『現在、幅広く・（以下☆省略』」
「理解できたか？」「なんとなく」
一夏の納得では、つまり…

1. ＩＳは世界に４６７機しか存在しない
2. コアは篠ノ之博士しか作れない。博士はコアをもう作っていない
3. 俺と刹那が特別待遇。但し実験体

「あ、れ？織斑先生、刹那の専用機は？」
先程、先生は一夏１人に専用機の話をした。けど刹那には？
「ああ。黒時には専用機は必要ないからな」

――――？皆が「何故？」といった視線を刹那に向けるが、刹那は返事で無く笑顔を向けたから

（いえ、話す事はありませんよ？の笑顔だが）

女子達は顔を赤くして、疑問をあやふやにされていた。

一夏は疑問を持ったままだったが・・・

あ、ちなみに篠ノ之博士というのは――――

「あの、先生。篠ノ之さんって、もしかして篠ノ之博士の関係者なんでしょうか・・・？」

「（あぁ…そういえばアイツの名字って篠ノ之だったっけ。あの天才は）」

「そうだ。篠ノ之はあいつの妹だ」

せんせーい、個人情報保護法知ってます？

「えええぇーっ！す、すごい！このクラス有名人の身内が２人のいる！」

「ねえねえっ、篠ノ之博士ってどんな人!?やっぱり天才なの？」

ｅｔｃ・・・授業中だが、箒の元にわらわらと女子達は集う。

一見、おもしろい光景である

しかし、箒と束さんは――

「あの人は関係ない！」

突然の大声。皆は何が起こったのかわからない様子だった

「大声を出してすまない。だが、私はあの人じゃない」

そう言って、箒は窓の外へ顔を向けてしまう。

女子達の興味が削がれた所に先生達の一声で授業に戻っていた

――――後で箒に話しかけようと思った一夏だった

――――――――――――――――――――

「安心しましたわ。まさか訓練機で対戦しようとは思っていなかったでしょうけど。
あなたに関してはよく解りませんが。」
休憩＝睡眠時間にしようとした刹那と一夏の前にセシリア参上
「まあ？一応勝負は見えていますけど？流石にフェアじゃありませんもの」

「なんで？」一夏が首を傾げる
「代表候補生だから専用機でも持ってるんだろ」
「へー」
「馬鹿にしていますの？」

「いや、すげーなと思っただけだ、どうすげーのか知らんが」
それを一般的に馬鹿にしていると、セシリアが机を叩く。うん。煩い…
「――つまり全人類六十億超えの中でもエリー…」
なんか、めちゃくちゃ語っていたが眠いので寝た。

…休憩時間ＯＶＥＲで寝てしまい、授業開始に先生から出席簿が飛んできた

お昼
一夏が箒＋αを誘って学食へ行ったらしい。置いて行かれたぞ俺
正直、楯無さんの料理が食べたいなぁ…と、一瞬だけ思った。
ともあれ昼飯はーうん。野菜ジュースだ。学食にでも売ってるかな？行ってみる事にした

授業の中で（後書き）

すみませんスミマセン…中途半端なトコで終わりました。
次回、次次回でセシリアとの戦闘に入れるか、な？

がんばりますよｍ．．ｍ

特訓、頑張れ！一夏ｂ

「お、一夏はっけーん」
見知らぬ女生徒と箒が会話している近くに寄る
「ですので、結構です」
「そ、そう。それなら仕方ないわね・・・」

なんか人の良さそうな先輩っぽいのが去って行った
「一夏に箒ー、何があったんだ？」
一夏が説明するに親切な先輩が一夏をＩＳ特訓をしてあげよう。と申し出たが
箒が束の妹で、特訓は結構です。私が彼に教えてあげますよ。それでは～

ということらしい。さっきは何か怒ってた感じなのに…よーわからん奴だ
「それで箒、教えてくれるのか？」
「そう言っている」
「なら刹那も一緒にやろうぜ。」

ん、構わんぞ、と口を開こうとすると箒の「にらむ」こうげき
…刹那は怯んだ。じゃない　少し怖いので
「い、いや俺はいいや遠慮しとく」
箒の目つきが元に戻った。何だったんだ今の？

「でも刹那もＩＳの事、教えてくれるんだよな？なら一緒にしようぜ」
また箒に睨まれたが逃げる事が出来そうにないので一応ＯＫした
「今日の放課後」

「ん？」

むすっとした感じの箒が言う

「剣道場に来い。腕がなまってないか見てやる」

「いや、俺はＩＳの事を…「見てやる。」わかったよ。刹那も一緒に行こうぜ」

・・・・・・どうあっても俺を連れて行く気らしい

――――――――――――――――

バシン！

「どういうことだ」

「いや、どういうことって言われても・・・」

放課後、剣道場にギャラリー満載の中で一夏が箒に手合わせをして一夏の一本負けの状態である

「どうしてここまで弱くなっている！？」

「受験勉強してたから、かな？」

「・・・中学では何部に所属していた」

「帰宅部。３年連続皆勤賞だ」

箒が唖然としたので、刹那は学校の部活というモノを知らないから帰宅部とは何か聞いてみた

「なぁ一夏、帰宅部って何だ？」

「は？知らないのか？マジで？」「ああ（断言」

「マジで？お前の通ってた学校って真面目な奴らばっかだったのか？」

刹那が通ったことのあるのは小学校だけなのでマジで理解していな

い。
何故、小学校だけなのかはイロイロあったので割愛させて頂こう
「？結局、帰宅部とは何だ？」
「え、っと学校の部活動をせずに学校が終わると直ぐに家に帰る人の事かな」

そもそも部活の事をあまり知らないので話を聞いても理解不能だった
「？帰宅部の事は解らんが、家に帰るだけの活動なんだろ？」
――なんで部活動の事を箒が聞くのか？と聞いてみたら
一夏は昔、道場で剣道をやっていて、中学校でも剣道はおろか、運動もしてないようだからしい。つまり

「箒は一夏が弱くなってる事に怒っている？」
そうだ、と箒が目で伝えてくる。いや口で言えよ…でも、
「まぁ運動なんて面倒だからなぁ…一夏が家に直ぐに帰るのも納得だ。
それに剣道って防具とか着けるのダルそうだし」

「・・・なんだと？」
あれ？箒が怒ってる？なんで？
「おい刹那、今のは箒に――」
「そこに直れ！そのフザけた根性を叩き直してくれる！」

直れ！とか言ってるけど、その前に竹刀で襲い掛かってくるな！
「っ！！」
一夏の近くにあった竹刀を掴み、箒の一撃を防ぐ！
「なにっ！？このぉ！」

バシバシと猛攻を仕掛けてくる箒。

剣道？何それ？おいしいの？竹刀？堅そうだね。の刹那は防戦を強いられる
２つの竹刀が弾き合って一瞬の隙を見た刹那は「（ここで決めればコイツは落ちつくか？）」
箒の竹刀を上方に吹っ飛ば――あれ？スカッ…

「あまい！」
刹那の竹刀は空を裂いた直後、箒の強烈な一撃が彼の頭へ叩き込まれた
「ッ――――――！」
痛ぇ…脳を揺さぶられた感じがして気持ち悪かった

「ふぅ…」と息をつき、竹刀を収めた箒
「おー…痛い痛い。スゲーな箒、滅茶苦茶速いじゃん。それに強いし」
ケロッとした態度に一夏と箒は少々驚いていた

何せ剣道の全国大会優勝者の攻撃を防ぎ、一撃を喰らっても平然としているから。
しかし、周りのギャラリーには――
「織斑君と黒時君て結構弱い？」
「ＩＳ動かせるのかなぁ？」

――好き放題言いやがっていた
それを聞き、一夏は「トレーニング再開するか…」と呟いた。
そこに、箒は興が覚めたのか「それがいいだろう」
これから１週間、放課後の３時間を特訓（ＩＳと関係なく）にすると言った。頑張れ！一夏！と心の中で敬礼をしておいた

―――――

先程の＜一夏、地獄の特訓決定おめでとー事件＞から自室に辿り着くドアを開けると――

「あら刹那君。お帰りー」

楯無さんが・・・・・・

「ただいま戻りました。いや、てか、なんで下着姿で歩いてるんですか？」

目のやり場に困る格好でいる

「なんでって、自室なんだし大丈夫でしょ？」

「そうじゃなくて人の目を少しは気にしてください」

「刹那くんのえっちぃ。」

なぁ！？冤罪だ！俺は悪くねぇ！俺は悪くねぇんだ！……ソレは置いといて。

「えっちって言われても楯無さんがその格好でいたら否応が無しに見えます。

何か着てください」目を背けながらベッドの方へ歩いて行く

「ぶー。仕方ないわねー」

「変な声出さないでください子供じゃあるまいし。生徒会長なんでしょーが」

「むー…そんな事を言う子にはコレね～」

十指をワキワキと動かしながら近づいてくる…

「あ、あの？楯無、さん？ソレだけは止めませんか？」

「こんなのに耐えられなかったら来週の決闘で勝てないわよ？」

何で知ってるんですかっ！？と聞く前に止めた。何故か聞く必要は無さそうだ

「って、ソレに耐えられなくても俺は勝ちますよ！だから止めてください！」

「解らないわよ～？セシリアちゃんが脇腹を狙ってくるかもしれないじゃない」

「絶対防御で効きませんてば…って、うわ、やめ、うわあああああぁぁ！」

「こちょこちょこちょこちょ～」

楯無さんの擽りは数十分くらい続いた……

特訓、頑張れ！二夏ｂ（後書き）

短かかったですね～
感想待ってますー

頑張りますー（・。・）ｙ

一夏の試合。そして・・・

イロイロすっ飛ばして6日が経過～
おぉ、今日はセシリアとの決闘の日じゃないかー（棒読み）――――
――
「なぁ箒、刹那」
「「なんだ？一夏」」

波乱の学園生活を送る事、約1週間。時間はスグに去って逝く・・・
「気のせいかもしれないんだが」
「一夏、気のせいだろう。なぁ？箒」
「そうだな。気のせいだろう」

そう。たった1つだが、大事な問題が解決していない
「ＩＳの事を教えてくれる話はどうなったんだ？」
「「・・・・・・・・・・」」
「目を逸らすな」

この前の――＜一夏クン。特訓、頑張って（笑）＞から6日。
刹那は暇を潰す為に一夏の特訓を見に行っていた。
箒は剣道の稽古をみっちり付けてくれた。
＝ＩＳの事に関しては一切、何一つ行ってない

「いや、仕方ないだろ？お前のＩＳ、無かったんだし」
「まあ、そうだけど――じゃない！知識とか基礎とか教えてくれてもいいじゃん！」
ごもっとも、だが？教えるのダルいし？感覚（なんとなく）でなんとかなるって！
…と刹那は考え中。

箒は視線を逸らす
「目　を　そ　ら　す　な　っ」
「「・・・・・・・」」
ま、簡潔にすると――――――

一夏の専用機は今だ来ていない。
「「……」」
一夏、刹那、箒、沈黙
「お、織斑くん織斑くん織斑くん」

無駄に3度も呼ぶ山田先生が駆け足でやってきた。
転びそうな先生を刹那が落ちつかせる
「山田先生、落ちついてください。はい、深呼吸」
「は、はいっ。す～～～は～～　す～～は～～～」

「はい、そこでストップ」
「うっ」
「（あれ？冗談でストップって言ったのに）」
山田先生はみるみる顔が赤くなっていく

「（何時まで止めてんだ？一夏も箒も冗談だって教えてやればいいのに）」
「・・・ぶはあっ！ま、まだですかあ？」
冗談ですから本気にしないでください
「目上の人間には敬意を払え、馬鹿者」！？背後に殺気！

言うが速いか、遠くから声が聞こえた瞬間に首を逸らす
ヒュンッ！――チッ！・・・髪の毛が数本、散って逝った
「千冬姉・・・」一夏が＜織斑先生＞と呼ばずに叩かれた
・・・なんで俺だけｆｌｙｉｎｇ出席簿？（殺傷性アリ）

「と、と、来ました！織斑くんの専用ＩＳ！」
遂にお出ましらしい。一夏の専用機が。
ポカンとしている一夏に鬼先生が準備をしろと言う
「この程度の障害、男子たるもの軽く乗り越えて見せろ。一夏」

「頑張れよ、一夏。俺はお前の後で試合らしいから」
「織斑、すぐに準備をしろ。アリーナの使用時間は限られているからな。
ぶっつけ本番でモノにしろ」「え？　え？　なん・・・」
「「「早く！」」」

一夏以外の声が重なり、ピット搬入口が開く。
その向こうには・・・

――そこに、「白」がいた

白。真っ白。飾り気のない。無の色。
その「白」は操縦者――一夏を待っている様に感じられる
「これが……」呆然とした一夏が口を開いた
「はい！織斑くんの専用ＩＳ「白式」です！」

「（俺のＩＳとは正反対の見た目だな）」そう感じている内に、一夏はピットを飛び出した

――――――

一夏ｓｉｄｅ
「あら、逃げずに来ましたのね」
セシリアがふふんと鼻を鳴らす。また、腰に手を当てたポーズも様

になっている
「（けど、俺にそんな関心は無い）」

鮮やかな青色の機体『ブルー・ティアーズ』。その外見は、特徴的なフィン・アーマーを四枚背に従え、どこか王国騎士のような気高さを感じる。
それを駆るセシリアの手には2メートルを超す長大な銃器――
六十口径特殊レーザーライフル《スターライトｍｋ?》――が握られている

すでに試合開始の鐘は鳴っているので、いつ撃ってきても不思議ではない
「最後のチャンスをあげますわ」
「チャンスって?」
「わたくしが一方的な勝利を得るのは自明の理。ですから、ボロボロの惨めな姿を

晒したくなければ、今ここで謝るというのなら、許してあげないこともなくってよ」
そう言いって目を笑みに細める。―警戒、敵ＩＳ操縦者の左目が射撃モードに移行―
「そういうのはチャンスとは言わないな」
「そう?残念ですわ。それなら――」

――警告!敵ＩＳ射撃体勢に移行。トリガー確認、初弾エネルギー装填。

「お別れですわね!」
セシリアの《スターライトｍｋ?》より、エネルギーの弾が射出された

刹那ｓｉｄｅ

「（あーあ…武装も何も展開してない一夏に攻撃って…少しくらい待ってやればいいのに）」
そんな事はセシリアに届くハズも無く、一夏はひたすらセシリアの攻撃から逃げていた
「（・・・打鉄を使わせて訓練してやればよかったかな…？）」
必死に頑張る一夏を見て、刹那は少しだけそう思った

――――

「二十七分。持った方ですわね。褒めて差し上げますわ」
「そりゃどうも・・・」
一夏の機体『白式』は実体ダメージが中破。近接ブレードを辛うじて使える程度。
圧倒的に不利な状況だった

セシリアの駆るブルー・ティアーズは４つの自立機動兵器が装備されている。
その装備に苦戦を強いられる所、セシリアより
「では、閉幕（フィナーレ）と参りましょう」
彼女の右腕が横に動き、命令を受けたビットが一夏に接近してくる

「くっ・・・！」
「左足、いただきますわ」
――直撃する。そう感じて、一夏は一か八か――
「ぜあああああっ！！！」

セシリアのライフル銃身に正面からぶつかり、何かを理解したよう

に動いて行く
――一夏が理解したのは――
ガスッ！ビットから穿たれるレーザーを抜け、ビットを蹴りで吹き飛ばす
「なんですって！？」

「この兵器は毎回お前が命令を送らないと動かない！しかも――」
一夏のよるビット落しでセシリアのビットは地面に叩き付けられていく
「（やれる。後は集中するだけだ）」
見え始めた勝利に僅かに胸を踊らせた

教師たちのいるピット

「あの馬鹿者。浮かれているな」
千冬が唐突に言う
「？何故そう思うんです？」山田先生が聞く
「さっきから左手が閉じたり開いているだろう？あいつの昔からのクセだ。

あれが出るときは、大抵簡単なミスをする」
その場にいた、山田先生と刹那が感想を持ったが、刹那の方が…
「（へぇ…流石、姉弟だな～。まさか！ブラコ――）」ヒュン！サッ！ザクゥ！
空飛ぶ出席簿↓避ける↓壁に突き刺さる出席簿…

「すみませんでした」
「わかればいい」
なんで読心されるんだ？と思った
刹那が馬鹿やってる時に試合はまた動いた

――獲った！
一夏がセシリアとの間合いに近接ブレードを振り下ろす
確実に勝利への一撃を前に――ヴンッ――。
「おあいにく様。まだまだでしてよ！」
ドガァァァッ！
『弾道弾（ミサイル）』が現れ、一夏へと直撃をした
だが、
「ふん。機体に救われたな馬鹿者め。」
「これは――あぁ…一次移行（ファースト・シフト）か」
刹那の言う通り、一夏のＩＳは煙が晴れて姿を示す
試合中の両者ですら驚いている
――つまり、この一次移行（ファースト・シフト）で先程までの『白』は
一夏専用の『白』と化した
セシリアによる攻撃が再度始まり、それを交わして進む一夏
その手には一次移行による能力「零落白夜」を発動した「雪片弐型」
がある
「おおおおおっ！」
最後の一撃を叩き込む――直前、
『試合終了。勝者―セシリア・オルコット』
ピットにいる千冬と刹那を除いた誰しもが一夏の敗北に疑問を持った
――――

「お疲れさん。一夏」
「あ、あぁサンキュ、刹那…」
「どうして負けたんだ俺？」
やはり本人は理解していないようだ

「織斑、それは後で話す。その前に黒時、次はお前の番だ」
オルコット、連戦だが行けるか？と、伝えると「だ、大丈夫ですわ」
と返事が返ってきた
「よし、なら休憩を挟んで黒時との試合まで待機していろ」
セシリアに休憩をさせている間、千冬は刹那と2人でピットを出て
行った

――――――

休憩時間、刹那とセシリアの試合が始る前。
試合開始前に千冬は刹那を連れてピットから出て、話を始めた
「黒時。」
「なんですか、織斑先生？」

「1つだけ守ってもらう事がある」
「なんでしょう？」
「相手は代表候補生。そこらの奴とはレベルが違う。だが、
お前はレベルが違うなどという次元では無い」

そう。「恐らく」などではなくて、刹那は代表候補生の実力などよ
りも
遥かに上を行く存在なのだ
「……たかがＩＳを動かした時間が人より長いだけですよ」
「・・・ふっ。まぁいい。だが、1つ言っておく――」

千冬は冷たい眼光で刹那を見、告げる。「殺すなよ？」
絶対防御があっても、彼には出来る事だ。だが彼は
「大丈夫です。俺は兵器でも人殺しでもない。人、なんですから」
「そうだったな。済まない、いらない心配だったな」

「いえ、気にかけてくれて有難うございます。安心してください先生」
「解った。……行って来い、黒時」
「はい」
そう告げて彼は漆黒のＩＳを纏いアリーナへ向かって行った・・・

一夏の試合。そして・・・（後書き）

さあ！ようやく次回、刹那君のバトルです！
チート存在の彼を頑張って弱くさせてみます。

感想待ってます（ｐ＿・）

彼の戦法。彼の戦闘。

「出てこい、忌々しい兵器（クロガネ）」
刹那の専用機が姿を現す。
それは、一夏の専用機『白式』とは正反対の色…
漆黒色のＩＳ『鐵（クロガネ）』

黒。真っ黒。視線が吸い込まれる様な黒。
全てを飲み込んでしまいそうな黒だった
２対の大きなウィングスラスターが特徴であった
ただそこに存在するだけで不思議な感覚を覚えてしまう

武装はまだ展開をしていない

「お～いセシリアさんよ～」
軽い口調でセシリアに話しかける
「・・・なんですの？」
「休憩時間は十分に取れたか？完璧な状態じゃねぇのに俺に勝てんのか？」

「ふんっ！あなたに心配されることはなくってよ」
「そーか。…なら」
「えぇ…それでは」
「「始めますか！（わよ！）」」

――ギュンッ！

セシリアの《スター・ライトｍｋ？》からエネルギーが放たれる！
「一夏と同じ戦法じゃ勝てねえぞ？も少し頭使えって」

「お黙りなさい！」
――刹那が攻撃を避けながらセシリアを挑発する
「あなたこそ、逃げ回ってないで攻撃をしてはどうです！？」
「逃げてない逃げてない。自由にフラフラしてるだけだ」
「ふん！わたくしの華麗な攻撃に見とれてしまったのでしょう？」
セシリアも負けじと挑発する
「それは無いな。いやマジで。つかハッキリ言って攻撃パターンが単調だぞ？」
「――ッ！もう許しませんわ！」
「おぉ怒った。恐い恐い」
――――――
―ピット―
「・・・なんで刹那は攻撃しないんだ？」
一夏が皆の疑問を口に出す
「黒時くん…なにかするつもりでしょうか？」
山田先生が誰に言ったのか呟く
「……あの馬鹿者が」
「千冬ね―織斑先生、なにか知ってるんですか？」
「いや、なんでもない」
珍しく前言撤回をした織斑先生。
「（あの馬鹿者、オルコットの疲労が溜まるまで遊ぶつもりか…？）」
半分正解、である。刹那は攻撃をいきなり仕掛けるつもりなど元より無い。全く無い
「ほら！当たらないぞ！？それとも休憩が足りなかったか？」

「減らず口を！」
「そう言うのは当ててから言いなっ」
ヒョイ。ヒョーイ。ヒョイ。ヒョーイ。ヒョイ――――避ける。当たらない。
ピットにて――――

「ええい！何故あいつは攻撃を仕掛けんのだ！見ている方が苛々する！」
箒がキレていて、
「なんで避けてばっかなんだ？…！まさか、攻撃を仕掛ける事が出来ないくらい
セシリアが押してるのか？」一夏が壊れる

そんな事は無いのは誰しもが理解している。
だが、何故彼が攻撃を仕掛けないのか解らない
――――彼が攻撃を仕掛けないワケ。
それは――――――

「（……よし、『黒月』の攻撃力はもう少しで一定値だな）」
近接用太刀『黒月』は攻撃力が極小な武器であるが、１つの特殊能力がある
それは一夏の零落白夜と同じ、バリア無効化能力を備えている。
しかし『黒月』の特殊能力はエネルギー消費が無い武装。一度召喚させ、その刃に触れるだけで

相手のバリアを消す。それだけ。バリアを消す以外は棒切れ。
だから攻撃力を蓄える為の時間が必要となる。気紛れな意思を持った様な武器である。
バリアを消してそのまま『黒月』で攻撃しても生身の人間にボール

がポコって当たるくらい痛い
――「（ホントはシールドエネルギーを消費させれば攻撃力も瞬間的に上昇するがな）」

「いい加減にしなさいっ！」・・・これぐらいで十分か？
「わかったよ！こっから攻めてやる。目ぇ瞑んじゃねぇぞ！」
「！？」
『瞬時加速（イグニッション・ブースト）』並の加速でセシリアの周囲を駆ける

刹那の専用機がスピード重視の機体だから。２対の大きな翼があるからこそ出せる速度
「消えた！？」
セシリアの視界から刹那の姿が消え、彼女のＩＳから敵機確認と表示され
ハイパーセンサーで周囲を確認する

――いた！
と確認したがもう遅い。
それは彼の名前の如く刹那に現れ――セシリアの身体を傷付けない様に――
『黒月』を振り下ろす！

ブルー・ティアーズのバリアが消え、攻撃力が高まった太刀で切り裂き、
彼女のＩＳより『シールドエネルギー残量０』と表示される。
上からの負荷を掛けられたセシリアは地へと落ちて行く
「きゃあぁぁぁぁ！」――このままでは絶対防御が無い状態で地に落ちる

――――「殺すな。」千冬の言葉に「大丈夫です」と答えたからに

は助ける。
瞬時加速（イグニッションブースト）を使い、空より堕ちるセシリアを
お姫様だっこの形で拾う
「悪いな…やりすぎた、スマン」本音を告げたが…
「――――」気絶してらっしゃった

「あ～…後でちゃんと謝っとくか」
『勝者、黒時　刹那。』
試合終了のブザーが鳴り響いた

彼の戦法。彼の戦闘。（後書き）

刹那君の機体
『鐵』と、『黒月』の説明…わからないでしょうか？
上手く伝える術が無いので勘弁してくださいな

ついでに、今回は自分で何を書いてんだ？と感じた文で自信無いです

感想、待ってます（・3・）b

彼に　どう戦えと？（前書き）

眠気！疲労！
かなり溜まってますので駄文の可能性アリです…

彼に　どう戦えと？

「う…っ」
ピットの一画にてセシリアが目を覚ます
「お。起きたか？」
先の試合――セシリアを負かした勝者（せつな）の姿があった

「いや、ホントやり過ぎた。絶対防御を少しづつ削って勝つつもりだったんだが、黒月の攻撃力を高め過ぎたみたいでな。傷は無いと思うが大丈夫か？」
・・・今だ意識がボンヤリとして、あまり理解不能なセシリアだが彼が謝っている事は理解できた
「？よく、わかりませんが…わたくしは負けてしまったのですわね？」

「一撃で、な。」
ムカッ…彼が少しおちょくった様に言ったのが伺える
「そう、ですの…」
勝負に敗北したというのに悔しさは余り込み上げない

「１つ、よろしくて？」
「何か？」
セシリアが彼――刹那――のＩＳと先程の戦闘に何があったのかを尋ねようと――
「１年１組、黒時　刹那。至急、職員室まで来い。急げ。繰り返す――」

鬼先生…じゃなくて織斑先生からの＜お呼び出し♪＞
「・・・なんで？」

「あなた…なにをしましたの？」
「心当たりは皆無なんだが…しゃーない。呼びだされるか…」

刹那は立ち上がり、職員室へと赴く――前に、
「黒時さん」
「何？俺、職員室、行く。ＮＯＴ行く、死ぬ。」
「いえ、この前はあなた方の事を挑発してしまって　すみませんでしたわ」

何で謝るのか解らずにキョトンとし、
「ならソレと今日の事はお互い様って事にしてくれ。俺の方こそ悪かったな、さっきは」
「フフッ」
「何で笑ってんだ？」

「そんなに謝らなくても別に気にしていませんわ。勝負に負けたのはわたくしですので」
「・・・そうか？それならいいが…」
彼は何とも不思議な人だと思えたセシリアだった

――――ピンポンパンポーン
「――黒時　刹那。黒時　刹那。後、１分以内に職員室へ出頭しろ。さもなくば――」
「出頭かよ！？やっべぇ！っと、それじゃあなセシリア！」
彼は全力疾走でピットから出て行った

「はい。それではまた。刹那さん。
ですが…ここから１分では職員室には到着しないでしょうね」
彼女の言葉は届いたのか、彼だけが知る事となった

―――――

「惜しかったな黒時。１３秒ＯＶＥＲだ」
千冬により呼び出された刹那は３～４分の時間を１分１３秒と、驚くべき速さで
職員室へとたどり着いた。
「（ちぃ！ＩＳの部分展開して飛んでも間に合わなかったかっ！）」

躊躇うことなく学園内重要規約を破りやがった。彼はＩＳを出してまで、
千冬に怒られたくないらしい…しかし
「ん？…先程までピットにいたのだろう？そこからでこの時間…」
おや？何か嫌な予感が・・・

「お前、ＩＳのＰＩＣを使ったな？」
ばれちゃったー…。「・・・イイエ、ツカッテイマセン」
「本来なら今すぐに罰を与えるのだが…まずは私と話し合おうか」
完璧にバレているが…よし！これはお咎め無しか！？

ニヤッと千冬は笑い、「武術組手でもしながらな」
結局、話し合いという形での罰が始まった
「・・・はい」
逃げられない様に首を掴まれ、処刑場へと連行された

―――――

「黒時、何故先程はあの武装で戦った？」
「何故って―ヒュン―そりゃとっとと―ブンッ―終わらせたかったからで―シッ―す！」
千冬による猛攻を避けながらの会話・・・カオスである？

「あの武装（クロヅキ）を使えば並大抵のＩＳは速効で勝負が決まるがっ！
あれを使って操縦者に重傷を負わせると考えなかったか？」
「黒月の威力を低めにして攻撃すればっ！―シュッ―大丈夫だと思ったんです」
「だが、それで加減を見極めれず、あの一撃で終わったのだろう？他の武装の事は考えたか？」
「そう―ガッ！―ですが、けど俺のＩＳにはっ！黒月と防御専用に使う武装しかないんです！」

―――ピタッ。猛攻が止まる
「なに？」
「ですから、黒月と防御の武装しかありません。前に話しませんでしたっけ？」
「初耳だ」

「あれ？そうでしたっけ？いや、でも攻撃を行う武装は黒月だけですよ」
「本当か？」
「ホントですって。なにか問題でも？」
特に気になる事は無いハズ・・・

「大ありだ、馬鹿者。あの武装は危険だ。貴様も理解しているだろう？」
「そりゃ、対ＩＳ用ＩＳ武装なんですし…当然かと」
仕方がないでしょう？俺が作ったワケじゃないし
「あの武装―黒月―の使用は禁止する」

はい？俺の唯一の攻撃武装を禁止？どう戦えと？
「なんでですか？先生だって黒月と同じような力の雪片を扱ってま

したよね？」
「あぁ、そして一夏もその能力を持っている」
「なら何故ですか？」

「黒月（あれ）にはエネルギー消費が無いだろう？雪片の様にエネルギー消費が
あるのでは話は別だが、」
何が問題だってんだ？ハッキリと言ってくれ、早く！俺は体力の限界なんだよ。
「これから一夏とお前を見に世界各国のＩＳ研究者などが学園に来るだろう」

「ここに？ですが合法的には見に来る事は難しいハズです」
「そうだ。しかし学年別トーナメントなどで自国のＩＳ性能の確認の為に来れる。
それと同時に他国のＩＳの性能の確認を行うだろう」
「俺や一夏のデータを盗みに来るって事ですか」

「言い方が悪いが…そうなるな。そこでお前の武装が出てくる。」
まさか――あぁ、黒月の能力…あれは唯一使用（ワンオフ）ではなく、武装自体が異質なので
簡単に、とはいかないだろうが能力をコピーされるかもしれない、か…
「気付いたと思うが、その武装は絶対に、外部は愚か、誰にも知られる訳にいかない」

「・・・確かに、こんな物が出回るとロクな事になりませんね」
「理解したか？理解したなら黒月は使用するな」
バッサリ。反論など聞かない。そんな言葉だった
「もし…もしも俺が黒月を使って戦闘をしたら？」

「信頼はしているが、そうだな…それで相手に怪我を負わせる、又は相手を死なせる事があるその時は―」

―――――

―――――

―――――

―――

―

続く言葉は刹那が絶対に黒月を使わなくなる言葉だった・・・

「（俺の弱いトコをよく知ってやがる…でも俺は人として生きる為に黒月を使わない様にしないとな…）」

彼に　どう戦えと？（後書き）

刹那くんの武器に使用禁止令発令！
さて、今後はどうやっていこう？考えて無いや…
頑張ります（Ｔ　Ｔ）ｙ

感想待ってます

使用禁止は困るから…

ふぅー…。黒月の代用武器、か。う～ん
そーだ！黒月の変わりに新しい武装でも用意は…時間かかるしなぁ…
つーか…嫌だ。黒月以外は使いたくない――
一瞬、「ぐっどあいであ」が浮かぶが、意味を成さない。

そして刹那のＩＳ『鐵』の武装を作るには時間がかかる
何故ならば
「（あの天才と『鐵』を作った所でしか『鐵』に適応する武装は作れないし）」
はぁ～…深い溜息を零していると、背後に忍び寄る悪意の気配ッ！

「さっきから溜息ばっかりだから――うりゃ。こーちょこちょ。こちょ。こちょ～」
「って、ちょ、やめ、いきな、あはははは！」
楯無が溜息ばっかりで気になった刹那の気分を変える為――いや趣味の擽りにより彼を苦しめた
――――

「楯無さん！もう擽るのは止めるってアナタは何回言ったんですか俺に！？」
かれこれ１週間の間、彼は同室の楯無に何十回以上、擽りを受けていた
そして「もう止めてくださいよ！？」涙目の彼は最後にそう伝えるが聞いてもらえないのだ
「そんな約束、覚えて無いわよ？」その繰り返しで次回の擽りになっていく・・・

現在、悪魔の様な行為から解放された彼は契約書でも書かせてやろう。破ったら部屋から追放しよう
と考えてみて――寝た。不貞寝した。黒月の事は今度考えよう……

――――――――――

一夏の敗北。セシリアの一勝一敗。刹那へ『鬼との組手』。あれから翌日。
昨日、セシリアに負けた一夏は気合いを入れ変えた様ない表情であった。
その対象となる様に刹那の表情は暗いモノであった・・・
――――――――しかし、それは朝のＨＲが始まるまで・・・

一夏と刹那、２人の顔は先程と逆の表情に変わる事となった
「では、１年１組代表は織斑一夏くんに決定です。あ、一繋がりでいいかんじですね！」
「先生、質問です」手を挙げて発表。おぉ、偉いぞ一夏
不思議な事にクラス代表戦に敗北した彼がクラス代表となっていた

「はい、織斑くん」
「なんで俺がクラス代表になってるんでしょうか？」
「それは――――」
「あ、そーだ一夏。クラス代表、お前に譲るから。ガンバレ！」

一夏の後ろから声が聞こえる
「は？」
「いや、俺はクラス代表なんてメンド…じゃない、相応しい人間がなるべきだって
思ったんだ。」

「（刹那の奴！面倒だからって俺に代表の仕事押しつけやがったな！？）」

そう、刹那が着任する筈だったクラス代表は昨日の夜――

『刹那くん、クラス代表就任おめでとー』

楯無によるお祝いの言葉がかかる

『クラス代表？なんでしたっけソレ？』

『何って、今日はその為に試合だったんでしょう？』

『そうだった気がしますねぇ…すっかり忘れてました。で、代表って何をするんですか？』

『こら。先生の話はちゃんと聞きなさい』

『すみません・・・で、代表の仕事って？』

『生徒会の開く会議や委員会などへの出席などよ』

『ふむぅ…それなら――――』

メンドーだから一夏に押しつけてやろっと！

思い立ったがスグ行動。メンドーな事をしたくない為にも彼は職員室の山田先生へと「クラス代表は一夏に譲ります！俺より一夏が適任ですっ！失礼しました」

セシリアの部屋――天蓋付きのベッドがある――に行き「クラス代表って一夏に決定な！

んじゃバイバイ！」一方的に伝えていたが伝わっていたようだ

「黒時くんが代表でも私たちは構わないけど、織斑くんでも構わないよっ」

「折角、黒時くんに任されたんだから織斑くんガンバってね」

「このクラスには男子が２人もいるから貴重な経験を積める。他のクラスの子に情報が売れる。

一石二鳥×２だねっ」おい、情報料の一部は俺にくれよ？一夏に代

表、譲ってやったんだし

バンバンと机を叩き、千冬が口を開く
「静かにしろ。クラス代表は織斑　一夏。依存は無いな」
はーいと（一夏を除く）クラス全員が元気よく返事をしたのだった
「（うん、団結力って大事だよな！いやぁ～ホントに一夏、代表オメデトー）」

――――――――

「ではこれよりＩＳの基本的な飛行操縦を実践してもらう。織斑、オルコット、黒時。
試しに飛んでみせろ」
四月の下旬、桜の花びらが全て散った頃。
刹那たちは鬼教官――千冬――の授業を真面目に受けていた

「早くＩＳを展開しろ」
ＩＳの待機状態は操縦者の体にアクセサリーの形状でいる
白式の待機状態は右腕ガントレット。セシリアは左耳のイヤーカフス。
刹那は首から下げる・・・ネックレスの先にミニチュアサイズの黒月。

イレギュラー２人はアクセサリーではない。防具と武器である
「織斑、オルコット。黒時はもう展開し終わったぞ」
一夏は右腕を突き出し意識を集中する
「（確か右腕を突き出すポーズが一番集中できるんだっけ？）」

クラス代表戦より放課後の時間を使い、一夏と刹那は偶に特訓をしていたのだ

全員分の展開が終了し、千冬より「飛べ」との指令が出される
言われた後のセシリアと刹那の行動は素早く、急上昇、遥か上空で制止した
「何をやっている。スペックでは白式と鐵はスピードは同じだ。BT（ブルーティアーズ）より上だぞ」

一夏がおぼつかない飛行で2人の元へ飛んでくる
「一夏さん、自分がやりやすい方法を模索する方が建設的でしてよ？そうでしょう刹那さん」
「そうだな、自分に合う方法を見つけた方が賢明だな。」
「なら刹那はどんな感じで飛んでんだ？」「ん？なんとなくだ」

・・・ますます理解不能になりそうな一夏だった。
「織斑、オルコット、黒時、急降下から完全停止をやれ。目標は地表から１０？だ」
「了解です。刹那さん、一夏さん、お先に」
「お。よし俺も行くか。一夏、先行ってるぞ」

先に降りて行った2人は難なくクリアした――通信回線より「多分、地表から１０mでなく、目標から1？と8？の誤差があると思います」刹那はミリ単位まで確認したらしい…細かいなっ！――――らしい
「うまいな2人とも。刹那は細かいな…よし、俺も行くか」
一夏が集中し、ロケットファイアーが噴出するイメージを思い描き
急降下・・・

ギュンッ！――――――――――――――――――ズドォォンッ！！！

「一夏～？地面に着いたけど、そりゃ墜落だぞ・・・？」
「馬鹿者。誰が地上に穴をあけろと言った。」
「…すみません」

体を起こした一夏に箒が近寄り、

「情けないぞ、一夏。昨日あれほど教えてやったろう」
「箒…一夏が失礼な事考えてやがるぞ」
「解っている。まったく・・・大体だな一夏、お前と言うやつは――」
箒の愚痴が始まるが、

「織斑、武装を展開しろ。それくらいは自在にできるだろう」千冬に遮られる
「は、はいっ」
彼が周りに人がいないか確認し、腕を突き出す
パァァァと光の粒子が集い雪片弐型が召喚された

「遅い。0．5秒で出せるようにしろ」
怒られていた・・・呼び出し(コール)練習していたが、確かに実戦であのスピードは遅すぎる
「セシリア、武装を展開しろ」「はい」
彼女は一夏よりも素早く、狙撃銃＜スターライトｍｋ?＞を呼びだした。のだが、

「おい、セシリア…俺に銃を向けるな」
「す、すみませんでしたわ刹那さん」
「黒時の言う通りだ。横に向かって仲間でも撃つ気か?そのポーズはやめろ。いいな?」
セシリアも怒られていた。その後、近接用の武装呼び出しの遅さにまた怒られていた。

2人の専用機武装を出した後は刹那の番だが、
「黒時…あの武装を展開しろ」

やはり千冬は黒月の使用を認めていないらしい。彼女の目が、強く語っていた

「（でも、俺には黒月が必要だ。誰が何と言おうと、使わない訳にはいかないんだよ…
そりゃ、人を傷つける為に使わねぇけど…俺が気をつけて使えば大丈夫だろ。
今度、黒月の使用制限の事で話しあってみるか。）」
――――彼は黒月に何か特別な思いがある様だった――――

使用禁止は困るから…（後書き）

うん。なんとか黒月の事とか考えたよ！
でもそれは次回から～…

ヒロインは今のところ楯無です。
リクエストなら年上の人物かシャルだけです（・△・ゞ

私は年上好きであるが、シャルだけは許せてしまった人間だったのです
守備範囲が広くて広くて

感想待ってます

よし、思い立ったが何とやら（前書き）

後半の方がグダグダかもです。

よし、思い立ったが何とやら

「ふぅん、ここがそうなんだ・・・」
夜。ＩＳ学園の正面ゲート前に…
サイドアップテールの黒髪が夜風になびかれている少女が立っていた。
――――――――――――――――

「というわけでっ！織斑くんクラス代表決定おめでとう！」
「「「おめでと～！」」」
ぱん、ぱんぱーん。クラッカーが一夏を目掛けて乱射される…。結構な量だから重そうである
ちなみに今は夕食時の自由時間。場所は寮の食堂。１組フルメンバーが揃っていた。

「・・・・・・」
一夏は、心底めでたくない…なんだこのパーティーは。と、溜息を零していた
彼がチラリと壁を見る。『織斑一夏クラス代表就任パーティー』と紙がある…
「いや～、これでクラス対抗戦も盛り上がるねぇ」「ほんとほんと」

「ラッキーだったよねー。同じクラスになれて」「ほんとほんと」
先程から相づちを打っている女子２組だった気もするが、気のせいだろう
「ったく・・・」一夏はクラス代表を押しつけてきた張本人の行動に目をつけた
「ん？」盛り上がってる女子達と一緒に楽しく会話しながらお菓子を頬張ってる刹那が顔を上げた

「どうした一夏？――黒時くん、お菓子どーぞ！――ありがとね（ニコッ。代表就任よかったじゃないか
――私のもどーぞっ！――サンキュな（ニッコリ）。オメデトさん」
「・・・・はぁ…負けたのは俺だからなぁ…頑張るか、クラス代表」
「まぁ困った事があれば多分、手伝ってやるよ」

刹那は一夏を手伝う事は無さそうであった
「はいはーい、新聞部でーす。話題の新入生2人に特別インタビューに来ました～！」
オーと、女子一同が盛り上がる
「あ、私は2年の黛　薫子。よろしくね。新聞部副部長やってまーす。はい名刺」

受け取った名刺に一夏と刹那は「「（画数の多い漢字だな。書く時タイヘンだろ）」」
「ではまず黒時くん！セシリアちゃんに勝って織斑くんに代表を譲ったのか、コメントを」
「レコーダが近いですし、何故に無邪気な目をするんです？…えっと、
試合に勝てたのは一夏の後で戦ったからでしょうか。セシリアは強かったですよ？

もし俺が先に戦ってたら負けてたかもしれませんし」
彼は流石に、最初（ハナ）から勝負になってなかった。とは言えなかったのでテキトーに答える
「えー本当？ここは―セシリアを負かすのは俺だけだ、とかさぁ！」
「意味がわかりません。はい、次は一夏だぞ」

もっとコメントが欲しそうな黛先輩の視線を一夏へと向かせる
「じゃあ織斑くん！代表になった感想どうぞ～！」
「えーと、まあ、なんというか、がんばります」
「えー。もっといいコメントちょうだいよ～。」

「自分、不器用ですから」
「うわ、前時代的！じゃあまあ、適当にねつ造しておくからいいとして」
・・・情報で成り立っている世界はこうして毒された逝くのか…と刹那は感じた
「ああ、セシリアちゃんもコメントちょうだい」

先輩の近くに控えていたのだろう、髪型のセットは写真対策っぽくなってる
「コホン、ではまず、どうしてわたくしがクラス代表を一夏さんにしたかと――」
「ああ、長そうだからいいや。写真だけちょうだい」
そもそもセシリアが一夏に譲ったのでなく、刹那の一方的な決定だったが？

「さ、最後まで聞きなさい！」
「いいよ、適当にねつ造しておくから。ん～…よし、黒時くんに惚れたからってことにしとく」
「なっ、な、ななっ…！？」
急に話を振られた刹那だが、

「そんな馬鹿な。何を言ってんですか？」
バッサリ。言いきった彼をセシリアが睨む。
「はいはい、とりあえず3人で並んでね。写真撮るから。注目の専用機持ちだからね」

先輩の指示通りに並び――
「それじゃあ撮るよー。３５×５１÷２４は～？」
なんですか、それは。
「え？えっと…２？」「７４．３７５」
刹那が即答正解。てか一夏、奇数がある時点で２は違うだろう普通
「黒時くん正解～」
パシャリとシャッター音が鳴る。って、すごいな。
見事にクラス全員が撮影の瞬間に集結していた。

「あ、あなたたちねぇ！」
「まーまーまー」
「セシリアだけ抜け駆けはないでしょー」
「クラスの思い出になっていいじゃん」

「ねー」
口々にセシリアを丸めこむように女子達が言う。
その後、１０時過ぎまで続いた後、一夏と箒の２人と別れ、刹那は自室へと向かうと――
「（ん？あれは…鬼教師じゃないか）」

寮の見回りだろうか、千冬がいた。
「（そーだ、黒月の事で話があるんだ）」
彼は禁止令が出された武装について考えた話があるみたいだ。
「織斑先生～」

呼ばれて振り向く織斑先生。
「ん？あぁ黒時か、何の用だ」
「えぇ…ここでは難しいので移動しましょう」

「？」

――――――――

「織斑先生、俺のＩＳ武装『黒月』の使用禁止を止めてもらえますか？」

「その話か…何故だ？」

「俺に必要なモノだからです」

「理由を答えろ」

「理由？言う必要はないだろーが。解ってんだろ？」

「お前・・・」

刹那の言動に綻び(ほころ)が生じる。

「アンタ知ってるだろ？黒月にはやってもらう事がある。」

このＩＳ学園に入る前の刹那に関係している事らしい。

「…それは知っている。だが、今は必要ではないはずだ」

そう。刹那が行おうとしている事の時以外は黒月は不必要。しかし、

「えーっと…落ちつかないんですよ。持ってないとね」寝る時にヌイグルミが必要みたいに言う

正直、答えになってない。というか、意味がわからないのだが…

千冬は刹那の成すべき事を知っているので深く追求するのを止め、深い溜息を吐いた

「だが、やはり使用を許可はしない」

「そう言うと思いました」

なら何で話を持ちかけた？と思わずにいられない

「？お前の考えている事がわからないぞ」

「んーと、俺は黒月の代用なんて作れませんが改造くらいなら可能

かと」
「改造だと?あの武装の何を?」

「前にアンタがエネルギー消費があるなら大丈夫、って言うから改造してエネルギー消費の機能をつけてみる」
なんとも簡単に話す彼に
「確かに、お前の言う通りになるならば唯一使用(ワンオフ)と誤魔化せるが・・・お前に出来るのか?」

「俺1人では無理です。同室の生徒会長さんに手伝ってもらいたいですね」
―楯無さんの事は理事長の十蔵さんに聞きに行った。彼女は1人でISを完成させたと―
「更識か・・・確かに任せても安心はできる、か。…更識に相談をして許可を得れたら改造をしろ。
問題が改善されたら使用を認める」

千冬に告げられ刹那は即座に行動を起こしに自室へと向かった

よし、思い立ったが何とやら（後書き）

精一杯、考えての結果です（T＿Tゞ
温かい目で見てください。

感想、待ってます。

セカンド登場（前書き）

グダグダになってるかと・・・

セカンド登場

「あ、おかえりー」

楯無さんがベッドに寝転がり、下着姿で雑誌を呼んでいた。
だが刹那は特に何も言わない事にしていた。
「（服着てくださいって言うたびに『えっち』とか言われて＋擽りも困るし…言っても聞かないだろうし…）」
彼はイロイロと学習をしているらしい。

「戻りました。っと楯無さん話があるんですけど」
「な～に？」
「実は――」
先程の会話の内容と例の武装について話してみた

「んー…まずは刹那くんのＩＳを見てから考えましょう」
「なら明日の放課後でいいですか？」
２つ返事で承諾をしてくれた楯無さんだった
――――――――――――

「織斑くん、黒時くん、おはよー。ねえ、転校生の噂聞いた？」
朝、一夏と教室の席に着くなりクラスメイトに話しかけられた。
「転校生？今の時期に？」
今はまだ４月だ。何故、入学ではなくて、転入なのかは一夏も疑問を持ったようだ

「そう、なんでも中国の代表候補生なんだってさ」
「「ふーん」」
そーだ代表候補生といえば。

「あら、わたくしの存在を今更ながらに危ぶんでの転入かしら」

我がクラスの英国代表候補生、セシリア・オルコット。今朝も腰に手を当てたポーズが決まっている。

「このクラスに転入してくるわけではないのだろう？騒ぐ事でもあるまい」

おおう、一夏の幼馴染こと箒が窓際の席から来ていた。女子とは音も気配も無く動けるのかっ！？…

「おい一夏、転入生の方より来月のクラス代表戦を気にしとけよ」

「そりゃ、転入生も気になるけどさぁ」

「そうですわ、刹那さん。クラス代表戦に向けてより実戦的な訓練をしましょう。

なにせ、専用機を持っているのは3人だけなのですから」

「だってさ一夏。代表なんだから頑張れよ？」

「まあ、やれるだけやってみるか」

「やれるだけでは困りますわ！」「そうだぞ。男たるもの弱気でどうする」

「今のところ専用機を持ってるクラス代表って1組と4組だけだから、余裕だよ」

クラスの士気が高まっている所に

「――その情報、古いよ」

ん？教室の入り口から声が聞こえる

「2組も専用機持ちが代表になったの。そう簡単に優勝できないから」

腕を組み、ドアにもたれていた少女がいる。

「鈴・・・？お前、鈴か？」

一夏が声をかけていた。知り合いかな？
「そうよ。中国代表候補生、鳳　鈴音。今日は宣戦布告に来たってわけ」
なんか、無駄に格好つけてる奴のツインテールが左右に揺れた。

「何格好つけてるんだ？すげえ似合わないぞ」
「んなっ・・・！？なんてことを言うのよ、アンタは！」
先程の態度と違い、かなり砕けた話し方に変わっている。
「おい」あ、織斑先生じゃないですか。そこのツインテ少女、後ろに気を配れ

「なによ！？」
バシンッ！聞き返した鈴に痛恨の一撃。クリティカルヒットだろうか。
「もうＳＨＲの時間だ。教室に戻れ」
「ち、千冬さん……」

「織斑先生だ。さっさと戻れ、そして邪魔だ。」
「す、すみません・・・またあとで来るからね！逃げないでよ、一夏！」
「さっさと戻れ」
「は、はいっ！」

・・・・・嵐の様な騒ぎを起こした鈴は猛ダッシュで2組へ戻って行った。
「なぁ、今のって一夏の知り合いか？騒がしそうな奴だったが」
「その話は後だ。馬鹿者」
バシンバシン！何１つ悪くない一夏と刹那が叩かれた。

「（うぅ…音速ＬＶ（レベル）の空飛ぶ出席簿よりは怖くないがコッチの方が

痛ぇ）」
千冬からの攻撃は結局、危ないと学ぶ刹那であった

――――――

授業の終了、クラスメイトを引き連れ学食へレッツＧＯ
しかし、どーん。学食入り口に立ち塞がるは先程の鈴。っと一夏に話なら俺に関係なし！
「ちょっとどいてくれる？食券がオバチャンに渡せないんだ」
「そうだぞ鈴。普通に通行の邪魔だぞ」

「う、うるさいわね。わかってるわよ」
食券をおばちゃんに渡し、日替わり定食をＧＥＴ。席へと移動する刹那は一夏より少しばかり離れて食事。同時に『鐵』の武装調整を行っていた
「（後で一夏に何があったか聞けばいいか）」自分のＩＳの事に興味を向けた

――――――

放課後の教室。
「あぁ一夏、俺は今日特訓に参加できないから」
学食での事柄を聞いた刹那が言う
「何かあるのか？」

「ちょっと用事が、な」
「了解。んじゃーな」
刹那は楯無の待つピットへと向かった

――――――

「すみません、遅くなりました楯無さん」
「構わないよ。早速刹那くんのＩＳを出してもらおうかな」
楯無に言われ、即座に展開。『鐵』のデータを呼びだした
「これが刹那くんのＩＳ…それで？問題の武装はどれかな」

「これです。この太刀。黒月です」
黒月のデータをまじまじと見る楯無。
それから一息ついて、
「私の意見を言う前に刹那くんの意見を聞こうかな」

「そうですね、意見と言うか問題点は…黒月は俺がＩＳを展開していない時にエネルギーを蓄えているんです。待機中の鐵から」
「それはどうゆうこと？」
「ＩＳ待機状態の時に『鐵』と同時にエネルギーを貯めているんです。俺の意思に関係なく。そしてその

エネルギーと、黒月の材質ですかね。それらが交わって＜バリア無効化能力＞が発動するんです。」
「刹那くんが発動させていないのに？」
ええ。と頷き、説明を続けた。
つまり――

・黒月は『鐵』の待機状態にエネルギーを蓄えている。

・蓄えたエネルギーと黒月を形成する特殊な材質が交わり、バリア無効化が発動

・改善点は、黒月の勝手なエネルギー泥棒（バイパス）を止める事。

この問題を解決する事により黒月使用時にエネルギー消費が行われる

「――――って事です。」
「ふむ。なら何処を直すのか解ってるんだね」
「ええ。1人では難しい所もあるので楯無さんに手伝って欲しいんです」
「わかったわ。なら早速始めましょう？」

「ありがとうございます楯無さん」
「うんうん。楯無おねーさんにお任せあれ」
2人は夜まで改造に勤しんだのだった・・・

セカンド登場（後書き）

主要キャラが全員出るのはいつの事やら…
なんとか…頑張ってます（ｐ皿・）ｙ

感想、待ってます

彼は健全でした（前書き）

短めになりますた

彼は健全でした

――――最っっっ低！女の子との約束をちゃんと覚えてないなんて男の風上にも置けないヤツ！
犬に噛まれて死ね！――――

何処かからかそんな声が聞こえた気がする。
黒月の改造を今日は終え、楯無さんには先に部屋に戻ってもらい、刹那は『鐵』を片づけて自室へ向かっていた

「（ふぅ…まだまだ黒月には時間かかるだろうな。楯無さんが手伝ってくれて助かった）」
思った様に改造が進まずにいるようだ。
「（数週間くらいかかるかもな――――）」
ドンッ。刹那が歩いていると誰かにぶつかった。

「お、っと…スマン。だいじょ――――って、お前は」
一夏の幼馴染、鈴だった
「いたた…」
頭を打ったのだろうか、頭を押さえている。

「危ないでしょーが！さっさとどきなさいよ！」
「ん？スマン。どいてもいいが、この先に用があるのか？こんな夜遅くに」
「あんたに関係ないでしょ！」
まぁ…関係無いし興味も無い…。ならなんで聞いたのかね俺は

「あぁそうだな。それじゃ。見回りの織斑先生とかに見つからないようにな」

「ぅ・・・」
今、露骨に嫌な顔をしたなコイツ。朝の一撃を思い出したか？
「ま、何処に行くのか知らんが夜遊びはそこそこにして、早く寝なさい」

「あんたはオカンか！」
オカン？おかん？やかん…あかん・・・
「あんた今、つまんない事考えたでしょ？」
つまらない？ふと、頭ん中に思いついただけだ。てか心ん中を読むな

「一夏と同じレベルね」
はぁ。と溜息を吐かれた。一夏と同じレベル？失礼な。
「って、そーいや一夏の幼馴染なんだってな。えっと――」
「鳳　鈴音よ。なに？あんた一夏の事知ってんの？」

「あ、俺は黒時　刹那だ。知ってる…てか今日、学食で一夏と一緒にいたの見なかったのか？」
「そういえばいたわね…って、なんで男のあんたがいんのよ？」
知られていないのは普通の反応だろう。一夏がＩＳを動かせるって話題になった時、俺も
『織斑くんが入学するから、ついでに君も極秘で入学して来いバーカ。』
って俺の事を知る、ごく僅かな関係者から強制に入れられたっけ…
「一夏みたいにＩＳを動かせるから」
「ふぅん…そうなんだ。まあいいわ」
あんまり興味が無さそうである

「そうか。俺は部屋に戻るから。あんまり夜遅くに出歩くなよ～」
正直、帰ってシャワー浴びたいし。

「はいはい、わかったわよ。それじゃあね」
鈴は俺の横を通って行った。

「ピットに用事でもあったのかな？」
鈴が何をしに出歩いているのか解らなかった。

―――――――――――

「ただいま戻りました」
「あら刹那くん。随分遅かったね」
「えぇ、少し話をしてまして」
ふ～ん、と言い楯無は話を変える

「ところで刹那くん、あの武装なんだけど改造するのに時間がかなりかかるわよ？」
「でしょうね。俺の見る限り、数週間は必要です」
「なら　楯無お姉さんは数週間も忙しい中、刹那くんを手伝うのね～」
あぁ…生徒会長だから生徒会の仕事もあるのか…。

「すみません、忙しい中」
「私は生徒会活動で疲れてるの」
「だから感謝してるじゃないですかっ。楯無さんが忙しいのは解ってますよ」
「と言う事で、」

・・・唐突に何を？
「何ですか？」
「刹那くん」
「はい？」

「私にマッサージをしなさい」

意味がわかりません

「だから、私は生徒会活動で忙しい中、刹那くんの手伝いをしているの」

えぇ、さっきから言ってますね。

「疲れている私の体にマッサージを頼んでいるの。刹那くんに」

「・・・俺はマッサージの仕方なんて知りませんよ。やったことないですし」

「んふふ、刹那くんを知ってる関係者は――――

『人体のツボとか急所とか知ってますのでマッサージをさせてみたら最高でしたよ』――――って言ってたわよ？」

・・・・昔、人体の弱点・ツボなどを覚えさせられ、その知識を元に俺の知り合いに

強制的にやらされた記憶が浮かび上がる。

「・・・なんで楯無さんが知ってるんですか？」

「あら、刹那くんが私の事を調べた様に、私も同じことをしただけだよ」

裏の世界は相手の事を探る事から始まる。

理事長や情報屋を通じて楯無さんの事を危険人物か、どんな人物か、調べたっけ。

それの反対の事をされたまで、か。

「（いや、楯無さんにマッサージ？色々とマズイ気がする。スタイル抜群だしなぁ、この人）」

「あ、エロい顔」

「してませんてば！」

「ならはやく～。」
何故だろうか、楯無さんに反抗すると魔の十指（くすぐり）が発動されそうである。
思い返すだけで背筋が凍る・・・

「わかりました…けど、何か穿いてください。下着だけは駄目です」
「刹那くんのいけず」
「なら止めましょう」
「えー。それはひどいなぁ。じゃあ何かズボン的なもの穿いてくるわね」

是非、そうしてください。俺がどれだけ目の向け場に困ってる事か・・・

「パンツじゃないから恥ずかしくーーー」
「パンツですからね」
本当に勘弁してください。名称なんて関係なく、パンツに見えたらパンツです。

「これならいーい？」
見せつけてきたのは、ヒップラインのくっきり出たスパッツだった。
当然、下着のラインも浮いている
「（さっきとあんまり変わってないじゃないですか…）」
「あ、エロい顔」

「だからっ！してません！」本当に困ってるんですよ？
「まあ、とりあえずよろしくね」
「はいはい…」
ベッドに転がる楯無さん。反論する気力の無い、刹那。

「じゃ、はじめますよ」

「ん。お願い。今より美人さんになれるようにしてね」
「（ハードルが高すぎるでしょうに）」
むにゅっ。

（足の段階でこれですか・・・）
脂肪の柔らかさではなく、しっかりと筋肉を感じられる。
「ねー、早くお尻～。すわってばっかりでこってるの」
「はぁ・・・」流石にお尻には抵抗があるが、

無の境地を目指し、刹那は楯無のお尻に手を伸ばす。
――むにゅぅ。
「・・・・・・」
柔らかい。そしてかなりのボリュームである。

「刹那くん」
「はい」
「鼻血でてる」
「・・・はい」

――――――彼は健全な青少年であった

彼は健全でした（後書き）

感想、待ってます

くだらない事考えて悪いかい？（前書き）

出来があまりよくないかもしれません・・・

くだらない事考えて悪いかい？

5月。
刹那が楯無さんと黒月を改造し始め、数週間。
一夏が鈴を怒らせたらしい。と耳にした。クラス対抗戦の日程表が張り出された。
そんな事があっても刹那は今日も引き込も…否、改造をする――筈だった。

「で？俺は忙しいんだけどよぉ、一夏くん？」第3アリーナAピットへ向かう中
「いや刹那じゃないと困るんだ」
「なんで？」
一夏が口を開こうとすると・・・

「ふん。中距離射撃型の戦闘法（メソッド）が役に立つものか。第一、一夏のISには射撃装備がない」
「それを言うなら篠ノ之さんの剣術訓練だって同じでしょう。ISを使用しない訓練なんて、時間の無駄ですわ」
「な、何を言うか！剣の道はすなわち見という言葉を知らぬのか。見とは――――」

…成程。理解した。
「2人がこんな感じだから練習にならない、と」
「あぁだから刹那に練習相手を頼んだんだ」
「丁重に断――」

待てよ？白式の零落白夜と同じ様に黒月を改造するんだから白式の能力を

確認する良い機会じゃないか。
「いや、やるぞ。白式と鐵で模擬戦しようぜ」
「ホントか!?なら着いたら――」

始めようぜ。と続ける瞬間。
「聞いているのか、一夏!」
「刹那さんも剣術の特訓は無駄だと仰ってください!」
「俺は聞いてるっての!」

「てかセシリア!俺に話を振るんじゃない!」
騒がしくもAピットのドアの前に着き、OPEN
「待ってたわよ、一夏!」
ピットには腕を組み、仁王立ちの鈴がいた。

一夏と鈴に何かあったらしいが、鈴は不敵な笑みを浮かべている。
「で、一夏。反省した?」
「へ?なにが?」
「だ、か、ら、っ!あたしを怒らせて申し訳なかったなーとか、仲直りしたいなーとか、あるでしょうが!」
「いや、そう言われても…鈴が避けてたんじゃねえか」
「あんたねえ…じゃあなに、女の子が放っておいてって言ったら放っておくわけ!?」
「おう。刹那もそうだろ?」

「いや?放っておいてって言われたら逆に放っておきたくないと思う」
「あんたはよく解ってんじゃない。一夏って・・・ああ、もうっ!」
焦れたように頭をかく鈴。あぁ…髪の毛ぼさぼさになるぞ。女性は髪が命とか何とかって言うだろ。

「謝りなさいよ！」

一方的に鈴が謝罪を要求するが、一夏は素直にうんとは言えない。
「だからなんでだよ！約束覚えてただろうが！」
「あっきてた。まだそんな寝言言ってんの！？約束の意味が違うのよ、意味が！？」
意味が？豚を使った沖縄料理か？あれはミミガー。

「くだらないこと考えてるでしょ！？」
どうやら一夏も刹那と同じ事を考えたらしい。
と、まぁ鈴との痴話喧嘩も長引きそうなので密かに鐵の調整をしておく
「（ふむ…今日は楯無さん無しで改造、か。大変だろうな）」

実際、刹那が全て黒月の改造をしているのでなく楯無に半分を任せているといっても過言でなかった
「（いやぁー楯無さん、黒月の５割くらい任せちゃってスミマセン）」
楯無がそれほど優秀であると、刹那は感じて任せたのだ。
まぁ、彼が楯無を信頼している証拠でもあるが・・・

「うるさい、貧乳」
不意に一夏の声が聞こえる。そして発言した言葉が危険だと、彼の頭が告げた。
それは的中する――

ドガァァッンッ！！！

爆発音、衝撃で部屋が揺れる。鈴がＩＳの部分展開で右腕をＩＳ装甲化させていた

「い、言ったわね…。言ってはならないことを、言ったわね！」
誰が見てもヤヴァイ。そう、本気で怒っている。
「い、いや、悪い。今のは俺が悪かった。すまん」

一夏による謝罪があるが、
「今の『は』！？今の『も』よ！いつだってアンタが悪いのよ！」
無茶苦茶な理由だが、一夏に反論の余地は無いだろう。
それから鈴は、鋭い視線を一夏に送ってピットから出て行った

「・・・一夏」
「あぁ」
「謝っとけよ？」
「・・・あぁ」

――――――――――

一夏と特訓最中に白式のデータをこっそりパクっ・・・閲覧したり、参考になるデータを盗・・・コピー？したりした。
しかし、白式には黒月に必要なデータはあまり無かったのだが…。
一休みするつもりで自室へと戻って来た刹那がドアを開ける

ガチャ――
「お帰りなさい。ご飯にします？お風呂にします？それともわ・た・し？」
「スミマセン！部屋間違えましたっ！」
おかしい。楯無さんに似た人が変な格好をしていた。あんな不思議な趣味の人がＩＳ学園にはいるのか…

一度、学生寮を全力疾走で出て、再度入る。さっきのは偶然間違え

ただけだ。自室の場所を間違えたんだ。きっと。そうに違いない。
ガチャ――――
「お帰り。私にします？私にします？それとも、わ・た・し？」

「なにやってんだぁぁぁぁ！？」
敬語を使う事さえ忘れて叫んでいる刹那。
「何、って裸エプロン？」
「なんで疑問形！？俺は何でそんな格好してんのか聞いたんだ！」

「まあまあ、そう言わずに」
「答えろよおぉぉ！」
彼のキャラがかなりブッ飛んだ。
「はい、刹那くん。落ちついて。深呼吸～」

すー…はー。すー…はー。
「楯無さん。何でそんな格好してるんですか？」
冷静になった彼は疑問を投げ掛ける。何事も即座に対応できるのは良い事だ
「たまたま発見して、ね♪刹那くんを驚かせようと思って」

この人の考えている事を理解できる奴はいるのか？いや、俺はいないと思う。
「楯無さんには何処かから電波でも飛んできているんでしょうね、きっと」
ついうっかり、思っていた事を口にしてしまう。あぁ…これはオワタ・・・
「むっ。年上を小馬鹿にする子には……こうだ！」

結果、楯無のくすぐり３０分コーナーｗｉｔｈ刹那。の始まりであった

くだらない事考えて悪いかい？（後書き）

感想、待ってます

おいおい…。嘘だろ？（前書き）

おいおい…。嘘だろ？

クラス対抗戦（リーグマッチ）当日、第２アリーナ第一試合。
初戦をする一夏と鈴。
刹那、箒、セシリア、山田先生、織斑先生はピットにて試合開始を待っていた
２人の会話が始まる。

「一夏、今謝るなら少しくらい痛めつけるレベルを下げてあげるわよ」
「雀の涙くらいだろ。そんなのいらねえよ。全力で来い」
「一応言っておくけど、ＩＳの絶対防御も完璧じゃないのよ。シールドエネルギーを突破する攻撃力があれば、本体にダメージを貫通させられる」

鈴の言う事は脅しでは無く、本当の事であった。刹那のＩＳにも、それは当てはまる
『殺さない程度にいたぶることは可能である』
という事実は変わりようがない。
試合開始のブザーが鳴る。

ガギィンッ！！
鈴による初撃を防ぐ一夏。直後、初撃を防いだ筈の一夏は飛ばされた。
見えない何かに吹き飛ばされた様に
――――――

「なんだあれは・・・？」
リアルタイムモニターを見ていた箒がつぶやく。

それに答えたのは、同じくモニターを見ていた刹那であった
「『衝撃砲』だろ。空間に圧力をかけて砲身の生成、余剰で生じる衝撃を打ちだす。」

セシリアと同じ第3世代型兵器だな、と彼は付け足す。
猛攻を避ける一夏を見ている箒はすでに聞いていなかった。
「（あの『衝撃砲』完成度が高いな…砲身の角度は不可視で無制限か）」
弾丸も見えない筈なのだが、刹那は見えている様である・・・。

鈴の青竜刀「双天牙月」と一夏の「雪片弐型」が弾き合う。
距離が離れれば鈴による砲撃が襲い掛かって来る
そのパターンを2・3度繰り返している内に事態は急転した

ズドオオオオオンッ！！

「それ」がアリーナのシールドを貫通したのを刹那は見逃さなかった。

「正体不明のＩＳがアリーナへ侵入！」
普段はドジな一面を持つ山田先生が一段と輝いて見える。
「織斑先生、アリーナの観客を避難。山田先生、遮断シールドの解除を早く」
「もうやっている」刹那の対応策は千冬も同じだったようだ

「な、なにが起きてますの！？」
「セシリア。緊急事態だ。一夏と鈴に正体不明なＩＳが襲撃した」
息を呑むセシリア。状況の把握は即座に行う事こそ最良の道だ。
「織斑先生、俺に出撃許可を」

「お前に何ができる？遮断シールドがある限り――」
言葉を中断して刹那に問う。
「――行けるのか？」
「行けますよ。黒月の使用許可、降りたと思って行動します」
「わかった。許可する…できる事ならば「あの」ＩＳのコアを破壊せずに再起不能にしろ」
「了解」

山田先生ｓｉｄｅ
「（このような緊急事態に馴れているかの様な動きで出て行きましたけど…黒時くん何者なんでしょう）」

千冬ｓｉｄｅ
「（ふむ…。黒時が向かったならば問題は無いと思うが…。しかし、あいつ…黒月の改造は終わったのか？）」

アリーナのシールドを黒月で消し、そこから一夏達に加勢。
まずは――「鐵！」
漆黒のＩＳを纏い黒月を展開。少しばかりの違和感が感じられたが、機能に問題は無い様だ。
――――ッ！・・・よし、シールドは消えた。突入開始。

「一夏！鈴！下がれ！」
突然の声に驚いたのか、２人揃って振り向いてくる。をい、戦闘中だぞ。
ハイパーセンサーで確認しろよ。よそ見してる暇が――
「鈴！」

「だ・か・らっ！余所見をする暇は無ぇって言ってんだろが！」

刹那は向けられたビーム兵器による攻撃から鈴を抱きかかえてさらう。
「ちょ、ちょっと、馬鹿！離しなさいよ！」
「離脱したら離すって――って馬鹿はお前だ！暴れんな！殴ってくるな！」

「う、うるさいうるさいうるさいっ！大体、何処触って――」
このガキ、緊急時くらい大人しくしろっての！
「！　来るぞ！」
一夏より警告の一言が飛んでくる。

「さんきゅ。さて、このＩＳ…」
強襲を仕掛けてきたＩＳは外見が『全身装甲（フル・スキン）』である。
しかも、手は異様に長く、首が無い。
「（これは――やっぱり人が乗ってないな。なら）」

「一夏、鈴！」
「何よ！」「なんだ！？」
「鈴はサポート、一夏は俺と一緒に突っ込め。武器、雪片だけなんだろ？」
「何勝手に決めてんのよ…たっく。いいわ、援護は任せなさい」

「なら俺と刹那で突っ込むか」
こうして、即席トリオが結成された――――

――――

「黒時くんが参戦しましたけど…大丈夫でしょうか？」
山田先生が千冬に聞いた。
「安心しろ、あいつは強い。そう簡単に負けはしないだろう」

「ですがこんな緊急事態に生徒1人の増援でどうにかなるとは思えません！」

「落ちつけ。コーヒーでも飲め。糖分が足りないからイライラするんだ」

「・・・あの、先生。それ塩ですけど・・・」

ぴたりと千冬の動きが止まる

「なぜ塩があるんだ」

「さ、さあ？でもあの、大きく塩って書いてありますけど」

「・・・・・・」

「あっ！やっぱり黒時くんを向かわせた事が心配なんですか！？それに弟さんの――」

「・・・・・・」

ピットにイヤな空気が漂う。

「あ、あのですねっ――」

「山田先生、コーヒーをどうぞ」

「え？それ、塩が入ってるやつじゃ――」

「どうぞ」

ニコリとした笑顔の裏に無慈悲なる悪魔がいた

「（しかし、黒時には何か違和感を感じたが・・・一体？）」

その予感は的中する事となる・・・・・・

――――――――――

「おい……嘘、だろ？」

「刹那！どうした！？」

「・・・いや、早く決めるぞ！鈴、衝撃砲の連射！一夏、エネルギ

ー全部使って零落白夜だ！」
「お、おう！」「了解！」

刹那が疑ってしまった、起こる筈のない事態。それは、
黒月の改造はまだ終わってない。それなのに鐵のエネルギー残量がかなり減っている。
それはただ、攻撃を避けるだけでは減る量では無かった。
「（まさか、黒月がエネルギー消費をし始めた！？）」

そのまさかである。しかし、彼が思い描いていた結果と違い、
自分が必要な時だけエネルギー消費を行うモノでなく、
黒月を呼びだしているだけでエネルギーを消費してしまうモノとなっていた
「なんつー不良品になったんだよ…黒月」

愚痴を言っても事態は変えられない。
「一夏、あのＩＳを無人だと思え。それなら全力で行けるだろ」
「ちょっと待ちなさいよ！なんで無人機って決めてんの？」
「お前等も気づいてるだろ？あの動きは人じゃ無理だ」

「「・・・」」
2人も薄々感じていたのだろう。なら話は早い
「一夏。やる事は解ってるな？この前教えた瞬時加速の事だ」
「ああ！解ってるさ！」

「一夏、私はどうすればいいの？」
「俺が合図したらアイツに向かって衝撃砲を撃ってくれ。最大威力で」
「いいけど、当たんないわよ？」
「いいんだ。じゃあ早速――」

「一夏ぁっ！」
キーン…アリーナ全体に響き渡るような声が聞こえる。声の主は箒のものだった。
「な、なにしてるんだ、お前・・・」
「男なら・・・男なら、そのくらいの敵に勝てなくてなんとする！」

またキーンとした箒の声。
「・・・」
敵ＩＳは箒を見る。
「箒、逃げ――」

一夏が叫ぶが間に合わないだろう。なら、一夏がすることは１つ。
「鈴、やれ！」
「わ、わかったわよ！」
一夏に促され、衝撃砲を構える鈴。そして一夏はその射線上に躍り出る

「ちょ、ちょっと馬鹿！何してんのよ！？どきなさいよ！」
「いいから撃て！」
「ああもうっ……どうなっても知らないわよ」
衝撃砲のフルパワーが白式の背に直撃する。

刹那が一夏に教えた事、それは瞬時加速（イグニッション・ブースト）の原理。
後部スラスターからエネルギーを放出、それを内部に一度取り込み、圧縮して放出する。
その際に得られる慣性エネルギーを利用して爆発的に加速する。
それはつまり、外部のエネルギーでもいいということ。

そして、『瞬時加速（イグニッション・ブースト）』の速度は使用するエネルギー量に比例する。

「オオオオオッ！」
『零落白夜』。必殺の一撃は、敵ＩＳの右腕を切り落とす。
だが、その反撃で敵ＩＳの左拳が一夏にモロに直撃した

「「一夏っ！」」箒と鈴の叫ぶ声が聞こえる。
しかし、もう1人――刹那は叫びはしない。それは
「狙いは？」
『完璧ですわ！刹那さん』

よく通り、うるさいときもある声が聞こえる
突如飛来する、ブルー・ティアーズの四機同時狙撃が敵ＩＳを打ち抜いた。
遮断シールドは刹那の突入時に破壊している。
『ギリギリのタイミングでしたわ』

『セシリアならやれると思ってた』
確信じみた口調で刹那は答える。
「セシリア…助かった」
「礼には及びませんわ、一夏さん」

「よし、これで終わっ――」
――警告！敵ＩＳの再起動を確認！警告！
「「「「！？」」」」
片方のみ残った左腕。それを最大出力形態（バースト・モード）に変形させ、一夏と刹那を狙っていた

（黒月のせいでエネルギーが少ないけどっ！やるしかねぇ！）
「一夏！エネルギー全部使って突っ込め！」
白と黒を纏った2人は放たれたビームへと飛び込む
視界が真っ白に覆われながらも、2人の手に敵の装甲を切り裂く手

ごたえを感じた

「う・・・？」
「やっと起きたか、一夏」
「せ、つな？」
「あぁ。…さっきの戦い、なんとかなったみたいだぞ」

保健室のベッドに寝ている一夏に、もう1つのベッドに寝ている刹那から声がかかる
「そうか・・・」
「どーせ千ふ…織斑先生が説明に来るだろうから俺は寝とく」
「お、おう。おつかれ」

一方的に話を切り上げ、寝る。
――――大体は説明されなくても理解してるから寝るか――――
――とりあえず、刹那は寝た。

まぁ…結局は事態の結果や何があったかなどは千冬の声や、うるさい箒の声などのせいで目が覚めて
聞こえてしまったのだった・・・。

おいおい…。嘘だろ？（後書き）

こんな感じになりました。

感想、待ってます（・０・）ｙ

感謝します（前書き）

短めになりました。
これからの展開はちゃんと考えましたよ！

感謝します

――――――――保健室で休憩しすぎて夜になった

「刹那くん、退院おめでと～」
「楯無さん。俺は退院じゃなくて保健室から戻っただけです」
にしても…お見舞いに来てくれてもいいじゃないですか。
「な～に？お見舞いに行って欲しかった？」

心を読むと書いて読心（どくしん）と言う。なんで読めるの？楯無さん。それと千冬さん。
「そんなわけないでしょう」
「ホントかな～？」
「ぅ・・・」

「図星だったんだ♪」
「自分でも不思議ですよ。実際は誰でもいいんですけど、誰かに逢いたいって――そんな感じは」
「寂しかったの？」
寂しい・・・それが何なのかよく解らない。でも、寂しかったのかな？1人で居る事は。

「よく解りませんけどね」
愛想笑いをしてみたが、昔と違って1人でいると嫌な感じはした。
鬼教師め…保健室を出る時に声かけてくれればよかったのに。いや、あの人は怖いからいいや
「そんな寂しくて泣き出しそうな刹那くんに晩御飯のプレゼント～」

「楯無さんが作ったやつですか？」
「ん～そうしたかったんだけど、あのＩＳの事で忙しくて。
刹那くんは　おねーさんの料理が良かった？」
「ええ」

そりゃねぇ？1度しか食べた事無いけど、美味しかったから。
「嬉しい事言ってくれるわね」
「事実ですから」
「刹那くん・・・どうしたの？なんか変よ？」

・・・おかしいのは解ってる。それは――
「楯無さん」
「なぁに？」
「黒月の改造。手伝ってくれてありがとうございました」

「？もう改造はお終い？」
「いえ…もう手をつけれません。これ以上、改造は無理です」
「どういうこと？」
「今日の戦闘で黒月を使用しました。その時に気づいたんですが――」

黒月を呼び出し（コール）しているだけで『鐵』のエネルギーが消費した事。

自分の意志ではエネルギー消費を抑えれない事。

黒月の異変について、全て話した。
「そう。残念だったわね」
「ですね。でもこれなら織斑先生に使用許可が貰えます」
「あら、前向きなのね」

「あ～…いえいえ、俺が言いたいのはですね？」
「武器の事はもういいの？」
「あの能力が使えるなら別にいいんです。で、俺が言いたいのは――」
絶対、絶対にこれだけは言いたかった。

「楯無さん。もうマッサージしなくていいですよね？」
楯無さんにマッサージは俺の理性がヤヴァくなるんだ。なんて言うか…こう、イロイロと。
いや！誰か変われるなら変わってみて！？こう！アツいパトスが、こう！・・・ゴホン。
「・・・刹那くん」

むむむ？なんだ？楯無さんに極上の笑顔が浮かんでる。
「あ・れ始めましょうか♪」
ニコリとした笑顔、それと――――
「楯無さん？何を？ははは…十指が忙しなく動いてますって！」

「観念しなさい、刹那くん」
くすぐり。それは楯無の出世術…基（もとい）、趣味である。
「ちょ、やめ、たて、うわ、ぁぁぁぁぁぁぁあ！！！」
――――――――

いつもの倍、軽く1時間以上は　くすぐられた。

でも――――

「（手伝ってくれてありがとうございます。楯無さん）」

本当に感謝します。

少し不貞腐れた楯無に心の中で呟いた。

感謝します（後書き）

黒月の使用に気をつけて戦う事になった刹那クン。
今後の展開、ちゃ～んと考えました。

感想、待ってます（・８・ゞ

ひと時（前書き）

自分で何を書いたか理解が・・・

ひと時

6月頭、日曜日
一夏が家に戻るついでに友人の家に寄るから～とか言って俺も誘ってきた。
最初は乗り気じゃなかったが最近、自室の冷蔵庫の野菜ジュースのストックが減ったので、
買いに行くついでに一夏について行った。

「お、ついたぞ。刹那」
「ん？着いたって…えっと『五反田食堂』って」
「おう。ここの料理は美味いんだよ」
いや、知ってんだよ。俺、此処に結構来てんだよ。友人の家ってここか？

中へ入って行く。
「いらっしゃい。って、一夏じゃねえか。それにお前さんもか」
「久しぶりですね厳さん」
「え？厳さん、刹那と知り合い？」

「おう。コイツはここの常連だぞ」
「そうなのか刹那？」
常連って言われるほどじゃないけどな
「まぁ偶に『業火野菜炒め』を食いに来てるだけだ」

五反田食堂鉄板メニュー『業火野菜炒め』を刹那は――
「コイツめ、何が「偶に」だ。前は2日に1回くらいで来てたろうが」
かなりの頻度で食べに来ていた。てか野菜好きだよね刹那（このコ）。

「バラさないでくれよ…別に隠す事じゃないけどさ。まぁ美味いからな」

「嬉しい事言ってくれるじゃねーか。今日こそタダで食ってけ」
「あんな美味い料理に金を払わないのは失礼だって。いつもどーり払わせて貰うよ」
・・・とりあえず、一夏の出る幕はなさそうだ。
――――――――――――

「ご馳走さん」
パンッと音を立て、両手を合わせ合掌。
「おう、お粗末さん」
「ふぅ。そーいえば一夏、友人の家ってのはここか？」

「おう。あ、そうだ　厳さん弾います？」
「ん？家の方にいると思うぞ」
「わかりました。刹那、行こうぜ」
「会計済ませたらすぐ行くから待ってろ」

――――――

会計を済まし、食堂を出――――
ピピピッ！む？携帯か・・・
「はいもしも――――」
「おい黒時。今何処にいる？学園に戻ってこい。お前に用事がある」

千冬さん・・・一方的に話さないでください。今なんて？よし、
「りぴーと、あふたー、みー」
「おい黒時。今何処にいる？学園に戻ってこい。お前に用事がある。
…もう一回か？」

くっ！これ以上続けるとヤバそうだ

「はぁ…わかりました。１０分くらいで戻ります。それじゃ」
通話終了を押して一夏を呼ぶ。
「悪いが急用ができた」
「そうなのか？」

「ああ。だから厳さんにヨロシク言っといてくれ、んじゃ学園でな」
一夏と別れて千冬さんの所に行く。あ、１０分じゃ野菜ジュース買って帰れない…
またの機会に買いに行こう…。

―――――――――――

「戻ったか」
「ええ、それで俺に何の用です？」
「先日の黒いＩＳの事だ」
あ～襲撃してきたＩＳね、コアぶっ壊したけど怒られないよな？

「織斑先生、ＩＳのコアですが、どうせ登録されてないコアでしょう？」
「話が早くて助かる…。ああ、登録はされていなかった」
「しかも無人機」
「その通りだ」

こんな技術を持って、こんな事を引き起こしたのはあの天才（バカ）しかいないだろう
「そんな事じゃなくて、用事って何です？」
「ああ、襲撃してきたＩＳを解析してほしい。お前１人で。」
「いやです♪」ニッコリ笑って断ってやる

ッシュ！――――スパァッ！ッー…

「先生、首に音速で出席簿を投げないで下さい。本気（リアル）で死にます。血が出てきました」

「知らん。まずは話を聞け」

おい！アンタが言うか！まぁいい

「あれは普通のＩＳでは無いからな。秘密を知る者は少ない方がいい。だから手伝ってもらう」

「拒否権は？」

「そこまで嫌か？」

「解りました、解りましたよ。だから出席簿を構えないでください」

何枚の出席簿を搭載しているんだ、この歩く重戦車め！

「お前は学習をしないのか？」

駄目だ、抗うのは止そう。

ま、確かにあんな異常（フザけた）ＩＳは俺に任せてくれればいいんだ。

「了解です。俺も調べたかったから、解析やります」

文句を言ったが俺も気になってた事だから頑張りますか。

「最初からそう言え、この馬鹿者め」

――――――――――

解析をしても特にいい結果が出た訳では無かった。

ま、大体予想してたけど。

ひと時（後書き）

頑張ります。

2人の転校生

「ねえ、聞いた？」
「聞いた聞いた！」
「え、何の話？」
「だから、織斑君と黒時君の話よ」

「いい話？　悪い話？」
「最上級にいい話」
「聞く！」
「まあまあ落ち着きなさい。いい？絶対これは女子にしか教えちゃダメよ？
女の子だけの話なんだから。実はね、今月の学年別トーナメントで――」

食堂にて、刹那は一夏と夕飯を共にしていた
「あのテーブル、かなり騒がしいな」
一夏が気付いた事を口にした。
「トランプとかだろ、きっと」

「えええっ！？そ、それ、マジで！？」
「マジで！」
「うそー！きゃー、どうしよう！」
きゃあきゃあと黄色い声が聞こえてくる。

うん、うるさい。けど若い内の笑顔が多いと老けないそうだからいい事だね。笑顔
年寄り臭い刹那を放っておいても夜は過ぎて行った。

―――――――――――――――

「やっぱりハヅキ社製のがいいなぁ」
「え？そう？ハヅキのってデザインだけって感じしない？」
「そのデザインがいいの！」
「私は性能的に見てミューレイのがいいかなぁ。特にスムーズモデル」

「あー、あれねー。モノはいいけど、高いじゃん」
月曜の朝。クラス中の女子がわいわいと賑やかに談笑をしていた。
「そういえば黒時君のＩＳスーツってどこのやつなの？見た事ない型だけど」
「あー。あれは特注品なんだよ。男物のスーツがないから、どっかのラボが作ったって」

俺のＩＳスーツ？世界で最初の男のスーツだからな～。実験体１号、俺（刹那）。
「ＩＳスーツは肌表面の微弱な電位差を検知することによって、操縦者の動きを
ダイレクトに各部位へと伝達、ＩＳはそこで必要な動きを行います」
誰も説明なんて求めて無いが、すらすら説明しながら現れた山田先生

「山ちゃん詳しい！」
「一応先生ですから。…って、や、山ちゃん？」
「山ぴー見直した！」
「今日が皆さんのスーツ申し込み開始日ですからね。ちゃんと予習してきてあるんです。

えへん。……って、や、山ぴー？」
「普段はドジに見えるけど今だけはしっかりして見える。流石、真

耶ちゃん先生」
「ま、真耶ちゃん!?く、く、黒時くん!?先生を名前で呼ぶのはちょっと…」
そんな嬉しそうなニコニコ顔で言われても説得力ありません。てか何故、俺にだけ過剰反応?
――パアンッ!周りに女子達がいたからか、出席簿は飛来せずに直で殴られた…
「お、織斑先生・・・」
「教師には敬意を持って接しろ馬鹿者」
親しみの呼び方をしたのに…。つーか脳が揺れたぞ絶対。頭がフラフラとする・・・

「諸君、おはよう」
「おはようございます!」
統率の取れた俊敏な動きの後の「あいさつ」
ここは軍隊か?・・・まぁ余計な事は考えないでおこう。

「今日からは本格的な実戦訓練を開始する。訓練機ではあるがＩＳを使用しての授業になる
各人気を引き締めるようにな。――では山田先生、ＨＲを」
「は、はいっ」
連絡事項を言い終えた千冬が山田先生にバトンタッチ。

「ええとですね、今日はなんと転校生を紹介します!しかも2名です!」
「え・・・」
「「「ええええええっ!?」」」
くっ!女子ズの狂気の様な叫びは教室を揺るがす!――

「（ていうか、2人だと?…分散しないのか?）」
刹那にしては珍しい?普通の事を考えていると、教室のドアが開いた。
「失礼します」
「……」
先程までのざわめきが何も無かったのようにピタリ、と止まる。
何故なら、そのうちの1人が――男子であったから。
――――――――――――――――

「シャルル・デュノアです。フランスから――」
ニコニコ顔で告げ、一礼。
「お、男…?」
誰かが呟く。それは誰しもが思った事だろう・・・
「はい。こちらに僕と同じ境遇の方がいると聞いて本国より転入を――」
礼儀正しい立ち振る舞い。人懐っこそうな顔。
印象は、誇張じゃなくて『貴公子』である。笑顔が眩しいね～
「きゃ・・・」

――来る!本能が告げた。何か…来る!
「きゃあああああああ――――っ!」
ぐあああああああ――ッ!耳がっ耳がぁぁあ!!!
そ、そにっくうぇー…ぶ…?。…人間、やれば何でも出来る。

「男子!3人目の男の子!」
「しかもうちのクラス!」
「美形!守ってあげたくなる系の!」
「地球に生まれて良かった～～!」

元気だね、うちのクラス女子一同は。
「あー、騒ぐな。静かにしろ」
面倒くさそうに千冬がぼやく。
あー…溜息ばっかりで幸せが逃げますよ～千冬さん

「み、皆さんお静かに。まだ自己紹介が終わってませんから～！」
そう…見た目から異端なもう1人の転校生がまだいる。
ジー・・・・・刹那の見たもう1人の転校生は――
「（眼帯…いやいやガチの眼帯て…。軍人だな、アレは。）」

――である。
「・・・・・」
「…挨拶をしろ、ラウラ」
「はい、教官」

佇まいを直して素直に返事をする転校生（ラウラ）にクラス一同、ぽかんとする。
「ここではそう呼ぶな。もう私は教官ではないし、ここではお前も一般生徒だ。織斑先生と呼べ」
「了解しました」
背筋を伸ばし、ぴっとした格好になる。てか教官って言ったら・・・。

「ラウラ・ボーデヴィッヒだ」
「・・・・・」
クラスメイト全体の沈黙。暫く言葉を待ってみたが続きは無い様だ。
「あ、あの、以上…ですか？」

「以上だ」

山田先生の必死の笑顔を無視し、無慈悲なる即答をかました・・・。
真耶ちゃん先生…乙です。
居たたまれない空気に皆が戸惑っていると

「！　貴様が――」
転校生のラウラが一夏に近寄る。

バシンッ！

「・・・・・」
「う？」
一夏の頬に容赦など無い平手打ち。
「いきなり何しやがる！」

「ふん・・・」
ラウラはお構いなしにあいている席へとＧＯ…。
はて？何故に一夏の奴は殴られたんだろうね？
「あー…ゴホンゴホン！ではＨＲを終わる。各人はすぐに着替えて第二グラウンドに集合。
今日は二組と合同でＩＳ模擬戦闘を行う。解散！」

手を叩いて千冬が行動を促す。
「おい織斑、黒時。デュノアの面倒を見てやれ。同じ男子だろう」
「了解です」
「君達が織斑君に黒時君？初めまして。僕は――」

「ああ、いいから。とにかく移動だ」
「刹那、今日は第二アリーナの更衣室が空いてるぞ」

了解、と返事をして急がせる為にシャルルの手を引き、教室より出る
「とりあえず男子は空いてる更衣室で着替え。これから実習のたびに長距離マラソンだから、早めに慣れてくれ」

「う、うん…」
どーした？さっきと違って妙に落ち着かなそうだ。
「「トイレか？」」
一夏も同じことを思ったのかシャルルに聞いた。

「トイ・・・違うよ！」
なら良かった。走る速度を落とせば地獄が近づく。それは――
「ああっ！転校生発見！」
「しかも男子３人揃ってる！」

ＨＲの終了後に現る、各学年各クラスの尖兵どもが駆けてきているから。
悠長にする時間は一切無。鬼教師の授業に遅れるわけにはいかないのだっ！
「いたっ！こっちよ！」
「者ども出会えい出会えい！」

何時の間にやら武家屋敷と化した学園・・・。幻聴か？ホラ貝の音が聞こえる
「織斑君と黒時君の黒髪もいいけど、金髪っていうのもいいわね」
「しかも瞳はエメラルド！」
「きゃああ！黒時君と手をつないでる！見て！２人！手！手を――」

「日本に生まれて良かった！ありがとうお母さん！今年の母の日は河原の花以外のをあげるね！」
「毎年河原の花あげてたのかよ！？」

お母さん…かわいそうに・・・。
「な、なに?何でみんな騒いでるの?」

「何でって、男子が俺達だけなんだから――」
状況を飲み込めないシャルルに説明しながら刹那は常人離れの事を仕出かす。
いきなり――「うわ!」「きゃあ!」一夏とシャルルの体を脇に控え、――ダンッ!
床を蹴る。――ダンッ!地を蹴り、壁に足をつけて前方へ踏み込む。
――

――まぁ…一瞬だけの壁歩き?しかも2人抱えて。馬鹿かコイツ
そして後ろより聞こえる女子達の「待てー」だの「きゃああ!」の叫びを無視し、更衣室へ。
「ふぅ…あ、自己紹介まだだ。俺は黒時　刹那　だ。刹那でいいぞ。よろしくデュノア」
何事も無かったが如く走りながら自己紹介。ワケがわからないよ・・・。

「あ、俺は織斑　一夏。一夏って呼んでくれ」
「え、あ、え、っと…よろしく刹那、一夏」
そんなこんなで到着。一夏と刹那は制服を一気に脱ぐ
「わあっ!?」

シャルルが何か叫ぶが気にしない。
いやマジで気にしてたら千冬さんからの殺傷性付与の攻撃がプレゼンツ。
「一夏!シャルル!先に行くぞ!」
とにかくダッシュ!最近、千冬さんからの攻撃が強くなってる気がするもん

まぁ気のせいだろうけど

2人の転校生（後書き）

ＴＯＸを買ってプレイ中です。なので投稿スピードが落ちますね…

感想待ってますｄ（＾　＾ゞ

ＩＳを使って授業

「ん？黒時、織斑とデュノアはどうした」
「まだ着替えてると思います」
「…そうか。早く列に並べ」
男子３人以外は揃っているので刹那も列へと並ぶ

「遅い！」
一夏とシャルルが到着。
「くだらんことを考えている暇があるならさっさと列に並べ！」
バシーン！あぁ…一夏が殴られた。何を考えてたんだか・・・。

「ずいぶんゆっくりでしたわね」
男子３人の隣にいる女子――セシリアに声をかけられた。
「スーツを着るだけで、どうしてこんな時間がかかるのかしら？」
「「道が混んでたんだよ」」

「ウソおっしゃい。いつも間に合うくせに」
ゑ？ホントなのに？　なら――
「あー…。一夏がさっき殴られた所が痛いって泣いてたんだ」
「痛くないし泣いてねえぞ！？」

失礼。なんとなく言ってみただけだ
「なに？アンタまたなにかやったの？」
何処からか聞こえる声。気配を感じさせずに近寄るだと！？
「後ろにいるわよ、バカ！」

おっと、気づかなかった。鈴は２組だから後ろか
「この一夏クンは今日来た転校生の女子に平手打ちをプレゼントさ

れたんだ」
「はあ!?一夏、アンタなんでそうバカなの!?」
「本当にバカですわね」

「――安心しろ。バカは私の目の前に3名いる」
ギギギギッ・・・ブリキの音で首を動かす刹那、セシリア、鈴
振り向く先には千冬(おに)、襲来。
バッシーン!蒼天の下で今日もまた出席簿による攻撃はいい音が鳴った

――――――――――

「では、本日から格闘及び射撃を含む実戦訓練を開始する」
「はい!」
1組2組の合同実習なので人数は倍の数だ。
「くうっ…。何かというとすぐにポンポンと人の頭を……」

「……一夏のせい一夏のせい一夏のせい……」
「1日に2回も喰らうと…記憶失っても不思議じゃねえ…」
馬鹿3人は頭を押さえながらブツブツと。
「今日は戦闘の実戦をしてもらおう。ちょうど活力溢れんばかりの十代女子もいることだしな」

――鳳、オルコット!
「な、なぜわたくしまで!?」
「刹那はなんで呼ばれないのよ!」
刹那と戦闘訓練など危なっかしいからだろう。

「専用機持ちはすぐに始められるからな。黒時は後で罰を科しておこう」

「「なら、構いませんわ（構わないわね）」」
くっ！鬼教師＋2め！罰ってグラウンド何周とかか？ならスグに終わ――
「グラウンドを５０周だ」結構、長かった。

・・・鬼畜め。
「それで、相手はどちらに？わたくしは鈴さんとの勝負でも構いませんが」
「ふふん。こっちの台詞。返り討ちよ」
「慌てるなバカども。対戦相手は――」

キィィィン……。
ん？空を裂くような音が上空から――
「ど、どいてくださーい！」
空を見上げる。

空から山田先生＜ＩＳ展開状態＞が飛来してくる。
「はぁ・・・何やってるんですか真耶ちゃん先生」

ＩＳ展開状態の人間が降ってくる事に周りから驚きの声が上がるが、刹那はＩＳを展開。そして回避ではなく――――
ガシッ！――――山田先生を受け止める。しかし、その受け止め方――
「お姫様だっこ・・・」

誰かが呟いた通り、刹那が山田先生をお姫様だっこしている。
「あ、あのう、黒時くん…そ、その…離してくれると…いえ、離さないならそれは、それで――」
「山ちゃんズルイ！」「黒時君にそんな事してもらえるなんて！」
「私と変わって！」

周りの女子達が何か喚きだす。つーか先生、早く離れてください。イロイロと大きいモノが当たってる。

「はぁ…山田先生、何をやってるんですか」
千冬さんに促されて俺から離れる真耶ちゃん先生。
「はぁ……。さて小娘ども。さっさと始めるぞ」
「え？あの、２対１で・・・？」

「いや、さすがにそれは・・・」
「安心しろ。今のお前たちならすぐ負ける」
負ける、と言われたのが気に障ったのか、セシリアと鈴はその瞳に闘志を滾らせる
「では、はじめ！」

号令と同時に３人が飛翔する。
「さて、今の間に……そうだな。ちょうどいい。デュノア、山田先生が使っているＩＳの解説をしろ」
「あっ、はい」
空中での戦闘を見ながら、シャルルがしっかりした声で説明を始める

「山田先生の使用されているＩＳはデュノア社製『ラファール・リヴァイブ』です」

――以下略――

説明が終わり、いいタイミングで？セシリアと鈴が落下してきた
「くっ、ううぅ……。まさかこのわたくしが…」

「あ、アンタねえ…何面白いように回避先読まれてんのよ…」
「り、鈴さんこそ！無駄にばかすかと衝撃砲を撃つからいけないのですわ！」
こいつらは馬鹿なんだろうか？人に責任を擦りつけ合ってやがる
「さて、これで諸君にも教員の実力は理解できただろう。以後は敬意を持って接するように」

ぱんぱんと手を叩いて千冬が皆の意識を切り替える
「専用機持ちは織斑、オルコット、黒時、デュノア、ボーデヴィッヒ、鳳だな。
では８人グループになって実習を行う。各グループリーダーは専用機持ちがやること。では開始」
千冬が言い終わるや否や、男子３人に２クラス分の女子が詰め寄ってくる

「織斑君、一緒に頑張ろう！」
「黒時君、私にわかんないとこ教えて～」
「デュノア君の操縦技術を見たいなぁ」

なんというか…行列が出来ている。え、何？これどーすれば？
その状況を見かねたのか、自らの浅慮に嫌気なのか、千冬は頭を押さえながら
「この馬鹿者どもが…。出席番号順に１人ずつ各グループに入れ！順番はさっき言った通り。
次にもたつくようなら今日はＩＳを背負ってグラウンドを百周させるからな！」

鶴の一声だろう。女子一同はグループごとに即座に並んだ。
「最初からそうしろ。馬鹿者どもが」

溜息ばっかりの人ですね、千冬さん。そんなに溜息ばっかりだと幸せが逃げますよ
「ではグループのリーダーは『打鉄』か『リヴァイヴ』を一体取りに来てください」

山田先生が通常の5倍はしっかりした感じだ。さっきの戦闘で自信がついたのだろうか？
まぁそんなことより俺の班だ。てか一夏とシャルルめ！俺より班のメンバー少ねぇじゃねーか…。
「え、っと…。じゃあ出席番号順にＩＳの装着、起動、歩行までやろうか。最初の人は――」
「はいはいはーいっ！」

元気な声で存在アピール。いや、わかるから。
「出席番号１番！相川　清香！ハンドボール部！趣味はスポーツ観戦とジョギングだよ！」
「何故に自己紹介？」一応、クラスの女子は大体覚えたから自己紹介しなくてもいいのに
「よろしくお願いしますっ！」

腰を折って深く礼をし、右手を差し出してくる。なんで？握手すればいいのか？
「ああっ！ずるい！」
「私も！」
「第一印象から決めてました！」

刹那の班全員から頭を下げられ、右手を突き出してくる
「え？どういう状況？よくわかんな――」
「「「お願いしますっ！」」」
……今度は後ろの方から同じ様な声が続けて聞こえた。

何事だろうかと思い、振り向くと、一夏とシャルルもお辞儀&握手待ちであった
うむ。２人とも状況が掴めないよな。俺もだ
スパーン！俺の近くより出席簿が火を噴いた音がする
「「「いったあああっっ！」」」

「やる気があって何よりだ。それなら私が直接見てやろう。最初は誰だ？」
反論は認めん。そう目が語っている…。
結果、相川さんが千冬の最初の犠牲者になってしまった。
「（あー…俺、暇になったなぁ）」

その後、授業も無事終わり（刹那の班を除く）、ＩＳを片づけると
一夏から昼飯に誘われたので
一緒にシャルルも誘い、屋上でお昼を過ごす事になった。

ＩＳを使って授業（後書き）

あぁ…。日夜ＰＳ３と共に徹夜だから眠ぃ…
頑張ります（ｐ＿－）

感想、待ってます

お昼ご飯

「…どういうことだ」
「ん？天気がいいから屋上で食べるって話だったろ？」
「そうではなくてだな」
――――なんか箒が言い難そうに口ごもってる。一夏と箒の会話を余所に刹那は

「いやぁー、さっきは凄かったなシャルル」
「え、何が？」
「何がって、雪崩のように押し掛けてきた女子達に丁寧に丁寧を二条した対応だったから」
その丁寧な対応のトドメにシャルルは――――

『僕の様な者の為に咲き誇る花の一時を奪う事は出来ません。こうして甘い芳香に包まれているだけで、もうすでに酔ってしまいそうなのですから』
であった。
うん、すごい。凄いと思う。嫌味くさくないし、本当にそう感じているようでスゴかった。

何？これは『貴族の義務（ノーブレス・オブリージ）』という奴か？フランスすげえ！
「ま、これから仲良くしようぜ。わからないことがあったら俺等に聞いてくれ。
あ、ちなみに一夏にＩＳの事は聞いちゃ駄目だぞ？」
「ったく一夏、アンタはもうちょっと勉強しなさいよ」

鈴による一夏への追撃。２ｃｏｍｂｏだ
「してるって。多すぎるんだよ、覚える事が。お前らは入学前から

予習してるからわかるだけだろ」
「ええまあ、適性検査を受けた時期にもよりますが、遅くても皆ジュニアスクールのうちに
専門の学習をはじめますわね」

「刹那は何時、適性があるって分かったんだ？」
一夏による質問。聞かれても答えない質問だった
「んー？覚えてねえや。最近だった気がする」
誰が正直に話すかボケェ

「ありがとう。刹那も一夏も優しいね」
「い、いや、まあ、これからルームメイトにもなるだろうし…ついでだよ、ついで」
「一夏さん、部屋割がもう決まったのかしら？」
「いや、普通に考えたら俺の部屋だろ。男だし」

「そっか。まあ、普通に考えたらそうよね」
「そうだなー…って刹那の同居人て変わらなかったのか？」
先月、一夏と箒の2人部屋は終わり、一夏1人の部屋になったらしいが
「（……楯無さんが俺の部屋にいるのは強制的というか、部屋変わっても付いてきそうだしなぁ…）」

「変わってほしいなら変わってやるけどな」
「？よくわからん…」
分からねえ方がいいんだ…。
さて、昼飯でも食べるとしようか

「・・・・・・」
先程の会話の中に入っていない箒が動いていない

「どうした？腹でも痛いのか？」
「違う・・・」

「そうか。ところで箒、そろそろ俺の分の弁当をくれるとありがたいんだが――」
「・・・・・」
無言で一夏に弁当を差し出す箒。
「じゃあ、早速。……おお！　これはすごいな！どれも手が込んでそうだ」

「つ、ついでだついで」
どこか嬉しそうな箒も弁当を広げ、食べ始める
――俺も自分の弁当を食べるとしよう
「え？弁当？…刹那って料理できたのか？」

おかしい。一夏に軽く馬鹿にされた気がする。
「まぁ一応は、な。俺だって何時も野菜ジュースだけじゃないさ。てか一夏、お前は早く食えよ？食べたら更衣室にダッシュだぞ」
「ん？一夏ってもしかして実習で毎回スーツ脱いでんの？」

「え？脱がないとダメだろ？刹那だってそうじゃねぇのか？」
「いや、俺は着たままだ」
「…ていうことは」
一夏が箒、セシリア、鈴をジロジロと見ている。

「女子の体をジロジロ見ないでよ！スケベ！」
「え？いや、別にそういう意味で――」
「い、意味がどうであれ、紳士的ではないと言っているのですわ！」
「だから眺めていただけ――」

「お、女の体を凝視しておいて眺めていただけとはなんだ！不埒だぞ！」
3人による集中砲火。かわいそうに……。
「・・・・」
「どうかしたの、一夏？」

一夏がシャルルを見ている。
「男同士っていいなと思ってな」
「そ、そう？よくわからないけど、一夏がいいなら良かったよ」
「シャルル、今のコイツの思考は危ない」

「そういう意味じゃねえって！」
「…男同士がいいって何よ…」
「…不健全ですわ…」
「…灯台もと暗しに気づかぬ愚か者め…」

一夏を見る目は少し白い目になっていたのは言うまでも無いだろう

――――――――――

「ふぅー…ただいま戻りました」
「あら、お帰りー」
ベッドに転がり雑誌を読む楯無さん（Ｖｅｒ下着姿）
だがもう何も言わない、言えない、言いたくない。

「今日刹那くんのクラスに2人、転校生が来たわね」
「あぁ、知ってましたか。そうです。ドイツの軍人、そしてデュノア社の娘…ですかね？」
「あら、気づいたの？」
「確証はありませんでしたが、手を握った時とか抱えた時に何と無

くそうかな～って」

「デュノア社は今、経営危機に陥っているから送られてきたんでしょうね」

「でしょうね～。ま、俺と一夏のデータを盗みに来たんでしょー」

シャルルに関して特に何も言わず次の話題へ

「もう1人の軍人さんは――あ、楯無さん、『越界の瞳（ヴォーダン・オージェ）』って知ってます？」

「もちろん。脳への視覚信号伝達の爆発的な速度上昇、超高速戦闘状況下における動態反射の強化を目的とした、肉眼へのナノマシン移植処理の事よ」

「流石、更識家。おそらくラウラはそれの移植者でしょうね。実力はかなり高そうです」

「ふ～ん…じゃあ刹那くん、何か問題が起こったら対処よろしくね」

「はっはっは、イヤです。千冬さんに任せます。あの人、ラウラの教官やってたらしいですから」

「まったく…織斑先生も大変ね」

――――――

その後は特に普通の会話をして楯無さんにマッサージをして＜無理やりやらされてるんだ＞寝た。

お昼ご飯（後書き）

よっしゃぁー。もうそろそろＴＯＸクリアするぞー

８一＜感想、待ってますＶ

アリーナの中の3人

「ええとね、一夏がオルコットさんや鳳さんに勝てないのは、単純に射撃武器の特性を把握していないんだよ」
「そ、そうなのか？一応わかってるつもりだったんだが…」
シャルルの転校から5日が経って、土曜日。
刹那は一夏とシャルルの3人でＩＳアリーナにいた

「うーん、知識としては知っているだけって感じかな。さっき僕と戦った時も間合いを詰められてたよね？」
「うっ…、確かに『瞬時加速（イグニッション・ブースト）』も読まれてたしな…」
「ボロ負けだったもんな」
「近接格闘オンリーの機体だからより深く射撃武器の特性を把握しないと対戦じゃ勝てないよ」

「今までの自称コーチ共が悪かったせいだ、きっと」
「おい一夏、事実でも口に出すな。あれを理解出来るのは異星人くらいだろう」
そう、シャルルの教え方は分かりやすい。しかし前述の自称コーチは――
Ｈさんの場合『こう、ずばーっとやってから、がきんっ！どかんっ！という感じだ』音だけ

Ｒさんの場合『なんとなくわかるでしょ？感覚よ感覚。…はあ？何でわかんないのよバカ』刹那と同じ
Ｓさんの場合『防御の時は右半身を斜め上前方へ5度傾けて、回避の時は後方へ――』細けぇ
うん、・・・意味が分からないよ
「一夏の『白式』って後付武装（イコライザ）がないんだよね？」

「ああ。何回か調べてもらったけど、拡張領域（バススロット）が空いてないらしい。だから量子変換（インストール）はむりだって言われた」
「たぶんだけどワンオフ・アビリティーの方に容量を使っているからだよ」
「あぁ、一夏の『零落白夜』だな」

「そう、白式は第一形態なのにアビリティーがあるっていうだけでもすごい異常事態だよ。
前例が全く無いからね。しかも、その能力って織斑先生の――――初代『ブリュンヒルデ』が使っていたＩＳと同じだよね？」
確かに異常事態だ。唯一使用特殊能力（ワンオフ・アビリティー）が同じなど有り得ない

「まあ、姉弟だからとか、そんなもんじゃないのか？」
「それは理由にならない。ＩＳと操縦者の相性の問題だからな」
「そっか、でもまあ、今は考えても仕方ないし、その事は置いておこうぜ」
「あ、うん。そうだね。じゃあ射撃武器の練習をしてみようか。はい、これ」

シャルルが一夏に５５口径アサルトライフル《ヴェント》を渡す
「え？他の奴の装備って使えないんじゃないのか？」
「所有者が使用許諾（アンロック）すれば、登録された奴は使えるって知らなかったか？一夏」
「うん、今一夏と白式に使用許諾を発行したから、試しに撃ってみて」

「お、おう」
手渡された銃器に若干の驚きを感じた様な表情になっていた。――

ふと、
「なぁシャルル、俺も射撃武器の練習してみたいから銃貸してくれるか？」
「え、あ、うん。いいよ――はい、刹那と鐵に使用許諾出したから。はい」
６２口径連装ショットガン《レイン・オブ・サタディ》を渡された
「サンキュ。さて――」
銃を構え、狙いをつけて撃つ。ドンッ！ドンッ！ドンッ！
「刹那、…上手いね。射撃武装を持ってないのに」
「そりゃどーも」

「（昔、銃器の扱い方をどれだけ学ばされたか…。ハンドガンからスナイパーライフルまで使えるってのの）」
――――――――――
一夏の《ヴェント》と刹那の《レイン・オブ・サタディ》より発砲音が鳴り響く中、
アリーナ内が急にざわつき始めて、注目の的に視線を移す。

「・・・・・」
そこにいたのはもう１人の転校生、ドイツ代表候補生ラウラ
誰とも会話をしない孤高の女子。あまり話しかけたくない雰囲気だ。
話しかける時はニコニコ笑顔で話そう。まず無視されると思うけど

「おい」
ＩＳの開放回線（オープン・チャンネル）で声が飛んでくる。しかし、それは一夏のみに向けられていた
「・・・なんだよ」
「貴様も専用機持ちだそうだな。ならば話が早い。私と戦え」

え、この子は戦い大好きっ子ですかぃ？見ろ、一夏の顔が嫌がってる顔になってる
「イヤだ。理由がねえよ」
「貴様になくても私にはある」
理由…理由…あぁ千冬さんの事か

「貴様がいなければ教官が大会二連覇の偉業をなしえただろう事は容易に想像できる。
だから、私は貴様を――貴様の存在を認めない」
「また今度な」
「ふん。ならば――戦わざるを得ない様にしてやる！」

言うが早いか、ラウラはその漆黒のＩＳを戦闘状態へシフト。
直後、左肩に装備された大型の実弾砲が連続で火を噴いた。
「！」
ゴガギンッ！――――ヒュンッ！スパアッ！

「…こんな密集空間でいきなり戦闘を始めようとするなんて、ドイツの人はずいぶん沸点が低いんだね
ビールだけでなく頭もホットなのかな？」
「…まったくだ。周りの迷惑を考えてくれ。シャルルが対応しなかったらヤバかったぞ」
横合いから割り込んできたシャルルがシールドで実弾を弾き、同時に右腕に６１口径アサルトカノン

《ガルム》を展開しラウラに向ける。
同時に刹那が――
「刹那、今、何をした？」
一夏の疑問に答えるつもりもなくラウラを見据える

今、刹那が行った事、それは黒月の一瞬の展開。刀を居合の形で振り抜き、
実弾を切り裂いたのだが……――実弾を斬った黒月(太刀)が見当たらない。
「フランスの第二世代(アンティーク)ごときで私の前に立ち塞がるとはな。
それと、貴様もだ」

「未だに量産化の目処が立たないドイツの第三世代(ルーキー)よりは動けるだろうからね」
「ホントにな。困ったもんだ…［大人げないぞ？遺伝子強化素体(アドヴァンスド)］」
最後の方は秘密回線(プライベート・チャネル)で伝えておく。
「！…貴様」

刹那&シャルルとラウラによる睨みあいが続いていると
『そこの生徒！何をやっている！学年とクラス、出席番号を言え！』
突然アリーナにスピーカーからの声が響く。騒ぎを聞き付けて来た担当教師だろう
「・・・ふん。今日は引こう」

興を削がれたのか、ラウラはあっさりと戦闘態勢を解除。そして去って行く。
アリーナを出たら、怒り心頭の教師が待ってるだろうがラウラは無視してしまうだろう。
「一夏、大丈夫？」
「あ、ああ。助かったよ」

「今日はもうあがろっか。４時を過ぎたし、どのみちアリーナの閉館時間だしね」
「おう。あ、銃サンキュ。色々と参考になった」
「それなら良かった」
「んじゃ、帰りますか」

「えっと…じゃあ、先に着替えて戻ってて」
でました。いつものパターン。シャルルは刹那と一夏とは一緒に着替えたがらない
実際、実習後の着替えを共にした事は無い
・・・まぁ…理由は分かってるけども

「そうか。なら一夏、戻るぞ」
「え？たまには一緒に着替えようぜ」
「い、イヤ」
「つれない事言うなよ」

「つれないっていうか、どうして一夏は僕と着替えたいの？」
「まさか…一夏、お前…」
「ちがうっ！言いたい事はなんとなく分かったけど違う！」
「なら戻るぞ。シャルル、遅くならないようにな」

「うん、ありがとう」

――――――――――

「はぁー、風呂入りてえ…」
「唐突に何だよって言いたいけど、その気持ちには同意してやる。真耶ちゃん先生の頑張ってくれるお陰で大浴場が使える様になるみたいだし」
シャワーより風呂に浸かる方が個人的に好きなので、真耶ちゃん先生には感謝だ

着替えが終わって処に
「あのー、織斑君と黒時君はいますかー？」
「えーとシャルル以外はいます」

噂をすればなんとやら、山田先生のようだ。

「入っても大丈夫ですかー？まだ着替え中だったりしますかー？」
「俺も一夏も着替えは済んでます」
「そうですかー。それじゃあ失礼しますねー。
――――デュノア君は一緒じゃないんですか？今日は3人で実習してるって聞いてましたけど」

「まだアリーナの方かと。呼びに行きますか？」
「ああ、いえ、そんなに大事な話でもないですから、2人から伝えておいてください。
ええとですね、今月下旬から大浴場が使えるようになります。時間の関係により、
男子は週に2回の使用日を設ける事にしました」

「「本当ですか！？」」
2人して子供の様に目をキラキラさせている・・・。
「真耶ちゃん先生、嬉しいです。助かります。ありがとうございます！」
「い、いえ、仕事ですから・・・」

「いや、ホントにありがとうございます！」
女教師の手を取り感謝の言葉を言う。かなり近い距離で言っている気がするけれど。
「・・・刹那？何してるの？」
んあ？シャルルか。着替え終わったのか。

「喜べシャルル！今月下旬から大浴場が使えるらしいぞ！」
一夏がアツく語っている最中、ふと思う。
「（あれ？シャルルに男子が大浴場使えるって言っても意味無いよ

な？）」
何時まで男装をして誤魔化すのだろうかと少し気になった

「ああ、織斑君にはもう1つ用事が。白式の正式な登録に関する書いて欲しい書類があるんで、
職員室まで来てもらえますか？ちょっと枚数が多いんですけど」
「わかりました。――じゃあ2人は先に戻っててくれ」
「うん。わかった」「りょーかい」

――――――――

一夏が真耶ちゃん先生と職員室に行ったので俺とシャルルは自室へと戻って行った

アリーナの中の3人（後書き）

感想、待っております（・3・）ｙ

シャルルの正体

ふむ…。シャルルが何時まで男装してるのか本人に聞いてみようかな～
「…ちょっと休憩してから聞きに行ってみるか」

――――――――――――――

コンコンッ。ガチャリ
「一夏～？シャルル～？入るぞ～？」
尋ねる前から開ける。別にいいじゃない、人間だもの
「ちょいとシャルルに聞きた――」

ジー・・・。
「え？」
「あ、刹那」
一夏と金髪女子がいるけど、この女子がシャルルなのか？

「あー…。シャルル、か？」
「え、っと…ひ、人違いです」
「そうか？なら一夏、人違いならシャルルは何処に行ったか知らない？」
少しばかり、からかいたくなった

「が、学食に行ったんじゃないのか？」
「ふむ。俺は今しがた学食から帰って来たんだけど？」もちろん嘘だけど

「す、すれ違いになったんだろ、きっと」
優しいね一夏。でも隠し通すには無理があるぞ

「っと、まぁ真面目な話。何でシャルルは一夏にバレたんだ?男装してる事」
その証拠に今は体のラインがくっきり浮かぶ服装をしていて女性だと分かってしまう
「ま、まさか刹那、気づいてたの?」
「お前の手を取った時とか、抱えた時に気付いたけど何か?」

「お前、シャルルが男のフリしてるって知ってたのか?」
「だから気づいてたって言ったじゃん」
寧ろシャルルの行動が女子っぽかったのも関係してるが、な
「そ、っか…気づいちゃってたか」

「あ、別に言いふらすつもりは無いから安心しろ」
「そっか…ありがとう」
別にお礼なんて言わなくてもいいんだけどなぁ・・・
「刹那以外はシャルルが女子って知らないんだよな?」

「おう」
・・・1人、いるんだけどな
「んで?シャルル、男装してまで入学してきた理由は何だ?――大体は分かってるんだけどな」
「俺も聞かせてくれ」

「うん…分かった。」
何かを考えた後、シャルルは口を開いた。

――――――――――――

「えっとね、僕が男のフリをしてまで入学したのは実家の方からそうしろって言われて…」
「実家っていうと、デュノア社の――」
「そう。僕の父がそこの社長。その人からの命令なんだよ」
「命令って・・・親だろう？なんでそんな――」

「僕はね、一夏、刹那。愛人の子なんだよ」
そうであろう事は予知していた。今のデュノア社に息子がいるなど聞いた事が無い
「引き取られたのが2年前。ちょうどお母さんが亡くなった時にね、父の部下がやってきたの。それで色々と検査する過程でＩＳ適応が高い事がわかって、非公式ではあったけれどデュノア社のテストパイロットをやることになってね」

自社の利益の為に娘を使わせたのだろう。
「父に会ったのは2回くらい。会話は数回かな。普段は別邸で生活してるんだけど、
一度だけ本邸に呼ばれてね。あの時はひどかったなぁ。本妻の人に殴られたよ。
『泥棒猫の娘が！』ってね。参っちゃうよ、母さんもちょっとくらい教えてくれたら、
戸惑わなかったのにね」

あはは、乾いた愛想笑いを浮かべるシャルル。
「それから少し経って、デュノア社は経営危機に陥ったの」
「え？だってデュノア社って量産機ＩＳのシェアが世界第三位だろ？」
「…作ってるリヴァイヴは第二世代だからな。作るなら第三世代を

作らないといけないんだろ」

「その通りだよ…フランスは欧州の統合防衛計画『イグニッション・プラン』からは除名されているからね。第三世代型機の開発は急務なの。国防のためもだけど、資本力で負ける国が最初のアドバンテージを取れないと悲惨なことになるんだよ」

前にセシリアが実稼働データを取る為にＩＳ学園に来たって言っていたな。

「それでデュノア社も第三世代型機を開発していたんだけど、もともと遅れに遅れての第二世代型最後発だからね。圧倒的にデータも時間も不足していて、なかなか形にならなかったんだよ。それで、政府からの通達で予算を大幅にカットされたの。そして、次のトライアルで選ばれなかった場合は援助を前面カット、その上でＩＳ開発許可も剥奪するって流れになったの」

「なんとなく話はわかったが、それがどうして男装に繋がるんだ？」

「簡単だよ。急目を浴びるための広告塔。それに――」

「・・・一夏、お前の…お前と白式のデータを盗みに来たんだろう」

「そう、２人のデータを盗んで来いって言われてるんだよ。僕は、あの人にね」

刹那もＩＳが使える事はＩＳ（ここ）学園に来て知ったんだけどね、と付け加えた。

「とまあ、そんなところかな。でも２人にばれちゃったし、きっと僕は本国に呼び戻されるだろうね。

デュノア社は、まあ……潰れるか他企業の傘下に入るか、どのみち

今までのようにはいかないだろうけど
僕にはどうでもいいことかな」

「「・・・・」」
「ああ、なんだか話したら楽になったよ。聞いてくれてありがとう。
それと、今までウソをついていてゴメン」
深く頭を下げるシャルルの事が無性にイライラする。お前は自分の
意思を持ってないのか、と。

そんな気分になり、腹が立っていると――
「いいのか、それで」
一夏がシャルルの肩を掴んで顔を上げさせていた
「え・・・？」

「それでいいのか？いいわけないだろ。親が何だってうんだ。どう
して親だからってだけで
子供の自由を奪う権利がある。おかしいだろう、そんなものは！」
「い、一夏…？」
「一夏の言う通りだ。親が決めた事？そんなものは関係ない。自分
自身がどうしたいかが重要だ」

「せ、刹那も…？」
ああ…クソッ。俺がシャルルに行った事は――
自分の利益や都合の為に子を使う奴に育てられ、捨てられた俺の事
を言ってるんじゃねーか…
それに・・・一夏も――

「親がいなけりゃ子供は生まれない。そりゃそうだろうよ。でも、
だからって、
親が子供に何をしてもいいなんて、そんな馬鹿なことがあるか！

生き方を選ぶ権利は誰にだってあるはずだ。それを、親なんかに邪魔されるいわれなんて無いはずだ！」
――一夏も自分の事を言っているのだろう…。

「ど、どうしたの？2人とも、変だよ？」
「ああ、…悪い。つい熱くなってしまって」
「別に…変じゃないって」
「いいけど…本当にどうしたの？」

「俺は――俺と千冬姉は両親に捨てられたから」
「あ…」
おそらく資料にあったのだろう。織斑姉弟の『両親不在』の意味を理解したみたいだ。
「その…ゴメン」

「気にしなくていい。俺の家族は千冬姉だけだから、別に両親なんていまさら会いたいなんて思わない」
「一夏よりもシャルル、お前はこれからどうするんだ？」
「どうって……時間の問題じゃないかな。フランス政府も事の真相を知ったら黙っていないだろうし
僕は代表候補生をおろされて、よくて牢屋とかじゃないかな」

はぁ・・・。自分自信のこれからをもう分かってるつもりなのか
「それでいいのか？」
「良いも悪いも無いよ。僕には選ぶ権利が無いから、仕方が無いよ」
無理に作った笑顔を向けてくるが、痛々しいものだと理解できる

絶望など越した諦観がそこにあって何とも言えない『何か』に苛立つ
「……だったら、ここにいろ」
「え？」

「刹那、お前…」

「一夏、ＩＳ学園特記事項２１、だ」
「・・・あ、ああ！
特記事項第二一、本学園における生徒はその在学中においてありとあらゆる国家・組織・団体に帰属しない。本人の同意が無い場合、それらの外的介入は原則として許可されないものとする」

そう、シャルルはまだ考える時間が3年もある。
「一夏、刹那」
「ん？なんだ？」「んー？」
「よく覚えられたね。特記事項は５５個もあるのに」

「一夏と違って頭がいいって事理解したか？シャルル」
「うぐ…お、俺は勤勉なんだよ」
「説得力ないけどね、ふふっ」
今の笑顔がシャルルの本当の笑顔なんだろうな

「ま、まあ決めるのはシャルルなんだから、考えてみてくれ」
「自称・勤勉に同意する」
「うん。そうするよ」
「んじゃ、俺は部屋に戻る」

「刹那、ありがとね」
「・・・どーいたしまして。じゃあな、シャルル、一夏」
「おう」
「うん。また明日」

俺は部屋を出て自室に戻る。途中、機嫌の良さそうなセシリアがす

れ違ったが、
よほど気分がいいのか、俺の存在に気づかないようで、そのまま何処かに行った（多分、一夏の部屋かな？）

――――――――――

暗い、暗い闇の中にそれはいた。
「・・・」
いつ頃からこうなのかはもう覚えていない。ただ、生まれた時には闇の暗さを知っていた。
人は生まれて初めて光を見るというが、この少女――ラウラ・ボーデヴィッヒは違う。

ラウラ・ボーデヴィッヒ。
それが己の名だとは知っているが、それは何の意味も持たないことを理解している
けれど、唯一例外はある。織斑　千冬に呼ばれる時だけは。
その響きが特別な意味を持っている気がして

（あの人の存在が……その強さが、私の目標であり、存在理由……）
それは一筋の光の様でだった。
出会ったときに一目でその強さに震え。恐怖し。感動し。心が揺れた。
体が熱くなり、そして願った

ああ、こうなりたい――と

理想の姿は完璧でなければならない。
ならばその完璧を崩す者を許せはしない。
（織斑　一夏――。教官に汚点を背負わせた張本人…）

あの男の存在は認めない。

そして、もう1人。

（黒時　刹那――――。私の事を知る、謎の存在…）

何者なのか？私の邪魔をする者なら…。

（排除する。どのような手段を使ってでも…）

暗い闘志に火を付け、ラウラは静かに眠りへと沈んで行った・・・

シャルルの正体（後書き）

ＴＯＸのサブイベやらで更新遅くなるかも…。

感想、待ってます～

25話（前書き）

サブタイが思いつかなかったのでシンプルに。――どうぞ

25話

「そ、それは本当ですの！？」
「う、ウソついてないでしょうね！？」
月曜の朝、教室に向かっていると廊下にまで聞こえる声がした
「なんだ？」

「さあ？」「知らん」
前を歩く一夏と、シャルル（男装ヴァージョン）である。
「本当だってば！この噂、学園中で持ちきりなのよ？月末の学年別トーナメントで優勝したら
織斑君と黒時君と交際でき――」

「俺と刹那がどうしたって？」
「「きゃあああああっ！？」」
どうしたのだろうか。一夏が普通に声をかけてただけに見えたが、返って来たのは
取り乱した悲鳴だった。まったく…はしたないぞ

「で？何の話？俺と一夏の名前が出たんだって？」
「う、うん？そうだっけ？」
「さ、さあ、どうだったかしら？」
鈴とセシリアは　あははは～うふふふ～と言いながら話を逸らす。
聞いたらマズイ話か？

「じゃ、じゃああたし自分のクラスに戻るから！」
「そ、そうですわね！わたくしも自分の席につきませんと」
どこか皆が余所余所しい様子だった

―――――――

「いやぁー…。一夏の奴は距離が長いとか言ってたけど、ＰＩＣ使えば楽なのになぁー」

学園内の男子が使えるトイレは三カ所しかないので授業の終了と同時に中距離走開始。

けど、それは一夏だけ。俺？いっつもＩＳの部分展開して飛んでトイレに行ってるけど？

バレなきゃいいんだ。バレなきゃいいんだよ。

「なぜこんなところで教師など！」

「やれやれ」

うん？近くから声が聞こえ、注意を向ける。２人いて、千冬さんとラウラだ

「何度も言わせるな。私には私の役目がある。それだけだ」

「このような極東の地で何の役目があるというのですか！」

あれま。現在の千冬さんに対しての不満をぶつけるラウラかい。

「お願いです、教官。我がドイツで再びご指導を。ここではあなたの能力の半分も生かせません」

「ほう」

「大体、この学園の生徒など教官が教えるにたる人間ではありません」

「なぜだ？」

「意識が甘く、危機感に疎く、ＩＳをファッションかなにかと勘違いしている。

そのような程度の低い者たちに教官が時間を割かれるなど――」

「――そこまでにしておけよ、小娘」

「っ……！」
凄みのある千冬さんの声。
「少し見ない間に偉くなったな。１５歳でもう選ばれた人間気取りとは恐れ入る」

「わ、私は…」
ラウラの声が震えている。恐怖、だろう。圧倒的な力と、かけがえのない相手に嫌われる恐怖。
「さて、授業が始まるな。さっさと教室に戻れよ」
「……」

ぱっと声色を戻し、ラウラを教室へと急かす。ラウラは黙したまま去って行った。
「そこの男子、盗み聞きか？以上性癖は感心しないぞ」
「待ってください。そんな性癖は持ち合わせていません」
「ならばいい。そら走れ、授業に間に合わないぞ」
「わかってますよ」

―――――――――

翌日の放課後。一夏、シャルル、刹那、箒が第三アリーナへ向かっていると、慌ただしい様子。
第三アリーナへ走る生徒が多い。
「なにかあったのかな？先にこっちで様子を見て行く？」
シャルルが観客席へのゲートを指す。俺と一夏と箒は頷いた。

―――――――――

ドゴォンッ！

「「「「！？」」」」
突然の爆発に驚き、視線を向けると、
「鈴！セシリア！」
それだけではなく漆黒のＩＳ『シュヴァルツェア・レーゲン』を駆るラウラが戦闘をしている

「くらえっ！！」
ジャカッ！と鈴のＩＳ『甲龍』の両肩が開く。第三世代型空間圧兵器・衝撃砲《龍咆》の攻撃だ
訓練機程度のアーマーならば一撃で沈める砲撃を、ラウラは回避しようとしない
「無駄だ。このシュヴァルツェア・レーゲンの停止結界の前ではな」

不可視の弾丸がラウラには届かなかった。
あれはＡＩＣだろう。アクティブ・イナーシャル・キャンセラーの略称だ。
通称『慣性停止結界』。空間にエネルギーを与える空間圧兵器に近いモノだ。
分析をしている間にラウラが手首に装着したプラズマ手刀で鈴とセシリアに斬りかかる。

「くっ！」
鈴とセシリアのＩＳアーマーが次々に破壊される。
そんな光景を楽しむような顔を一夏に向けるラウラ。
愉悦に浸った顔を向けられ、一夏の何かが振り切れたのだろう

「おおおおおっ！」
叫び声と共に一夏が白式を展開。同時に《雪片弐型》の展開。『零落白夜』を発動していた
「その手を離せ！！！」

「ふん…。感情的で直線的、絵に描いたような愚図だな」

ラウラは右手を突き出す。すると一夏の動きは止まり、
零落白夜のエネルギー刃は次第に小さく消えて行く。
「やはり敵ではないな。この私とシュヴァルツェア・レーゲンの前では、
貴様も有象無象の一つでしかない。――消えろ」

肩の大型カノンが、ぐるんと一夏へと砲口を向ける。
「一夏っ、離れて！」
シャルルの声が響き、アサルトライフルの弾雨がラウラに降り注ぐ。
一夏の自由が解かれる。

「ちっ……雑魚が……」
シャルルが銃による牽制は一切休まない。3度目の銃の切り替えを行っても弾雨は降り続ける
「面白い。世代差というものを見せつけてやろう」
弾丸を避け、反撃の為に体を低く屈める。

「行くぞ…！」
「くっ！」
――――――――――

「（あぁ～…なんかシャルルまで参戦しやがった…。誰が止めるんだよこの戦い。俺はヤだね）」
「何をしている？」
不意に声を掛けられ、振り返ると千冬さんがいる。
「一夏がいきなり突っ込みまして、シャルルもついでに」

「はぁ…。お前、あの馬鹿共を止めてこい」

「はぁ…。俺ですか？先生が止めてくださいよ。教師でしょう？」
「ＩＳを展開していない私がか？」
「織斑先生なら可能でしょう？」

言いながら、黒月を展開して千冬さんに渡す。うむ。きっとこの人は生身でもＩＳ武装を扱える気がするから
「仕方がない…。私が止めるしかないか…」
俺から黒月を受け取り、素早く戦場の中心に行き、ラウラのプラズマ手刀を防いだ。
・・・・・ホントに生身でＩＳ武装を扱いやがったよ　あの人。
軽い冗談だったのに

「では、学年別トーナメントまでの私闘の一切を禁止する。解散！」
パンッ！と千冬さんが手を叩く。それはまるで銃声の様に聞こえた。

―――――――――

「…女子って軽い地震くらいなら起こせるのか？」
先程、鈴とセシリアがかなりの負傷をしていたので保健室へ連れて行った。
そこで少し話をしていると、人工的な地震みたいな揺れを感じた。
ドドドドドッ！女子達が保健室に駆け込んできて、男子３人に（１人は女子だが）

今月開催の『学年別トーナメント』は２人組での参加が必須らしく、一緒に組もうと言ってきた。
一夏はいきなり「悪いな。俺はシャルルと組むから諦めて、刹那と組んでくれ！」と言う。

「「「黒時君！！！」」」皆の視線が集まったので――
「抽選で当たった人は一緒に頑張ろうぜっ！」と保健室の窓より逃走。

「（あの時の女子達の眼には修羅が宿ってた気がするなぁ…）」
ま、少しばかり怖くなって逃げたのだ。
締め切りまでにペアが決まらないと抽選だって書いてたから誰と組む事になるのだろうかね
自室へと戻ってきた。

「ただいま戻りましたー」
「あら刹那くん。お帰りー」
・・・楯無さんて、生徒会があるのに、何故に俺よりも帰ってくるのが
早いのか聞いてみたい気もするが…別にいいや

「そういえば楯無さん」
「なにかしら？」
「楯無さんて生身でＩＳ武装を扱えます？」
「急に何の話？」

「いやー今日、俺意外の専用機持ちが、ひと悶着起こしまして、織斑先生が俺の黒月を使って　その場を収めたんです。生身の体で」
「流石は織斑先生ね…」
若干、楯無さんも引いている感じがする

「ＩＳ学園（ここ）の教師全員はＩＳを展開しないでもＩＳ武装を使えるんでしょうかね～？」
「それは無いと思うわよ」
「ですよね」

まぁ、千冬さんが常人離れをしている事を思い知らされた。

25話（後書き）

感想、待ってます／（゜ロ／）（／ロ゜）／

最悪のパートナー（前書き）

文章が変になってないか心配中…。どーぞm（＿＿）m

「しかし、すごいなこりゃ……」
更衣室のモニターから観客席の様子を見た一夏が呟く。
各国の政府関係者、研究所員、企業エージェント、その他の顔ぶれが一堂に会していた。
「3年にはスカウト、2年には1年間の成果の確認にそれぞれ人が来ているからね」

「そんな事より一夏はラウラの方が気になってる感じだな」
「まあ、な」
「感情的にならないでね。おそらく、彼女はかなり強いと思うから」
「ああ、わかってる」

一夏&シャルルのペアは特訓の成果もあって強くなっている。
しかし、まぁ…俺にはあまり関係ない。一夏とシャルルのペアと戦う事になるかも分からないからな。
「（つーか俺、一体誰とパートナーか、未だ知らないんだけど）」
抽選の結果発表が遅れて、今日発表らしい。ペアとの練習なしで、ぶっつけ本番とは、
なかなか手厳しい状況だ。
「あ、対戦相手と抽選結果が決まったみたい」
モニターへと表示される文字を見る。
「「「――――え？」」」
出てきた文字を見、刹那、一夏、シャルルは揃って声を上げた。初戦の相手とペアの発表。それは――
『織斑　一夏&シャルル・デュノア』ＶＳ『黒時　刹那&ラウラ・

ボーデヴィッヒ』
なんともまぁ…困ったペアである・・・

――――――――――――

「一戦目で当たるとはな。待つ手間が省けたというものだ」
「そりゃあなによりだ。こっちも同じ気持ちだぜ」
試合開始まであと5秒、4秒、3秒、2秒、1秒――GO
「「叩きのめす」」

一夏とラウラの声は奇しくも重なり、試合開始と同時に一夏は『瞬時加速（イグニッション・ブースト）』
先手を決めれば有利に働くと思ったのだろう。しかし甘い。
「おおおっ！」
「ふん・・・」

ラウラが右腕を突き出す。――発動した。
一夏の体は硬直し、身動きを取れない状態だ。
「開幕直後の先制攻撃か。わかりやすいな」
「・・・そりゃどうも。以心伝心で何よりだ」

「ならば私が次にどうするかわかるだろう」
ＡＩＣで相手を捕えた次はラウラの肩に装備されている大型レール砲（カノン）をぶっ放す。
お、シャルルが飛んだ。そして銃を構え、
「させないよ」

６１口径アサルトカノン《ガルム》の爆破弾（バースト）を浴びせる。
「逃がさない！」
出た。シャルルの技能。『高速切替（ラピッド・スイッチ）』だ。

事前呼び出しを必要とせず、戦闘と並行しての武装呼び出し。

俺はここで参戦した方がいいのか迷う。試合開始前にラウラに「邪魔をするならば貴様も倒す」と言われたのだ。しかし、まぁ見せ掛けだけの試合を行っていないと、研究者たちに「この程度の実力」だと思わせる事が出来ない。俺への興味を削がせる作戦に出よう。

「ふぅー…。よしっ！」

一夏とシャルルには事前に、参戦しないつもりだ。と言ったが前言撤回させてもらおう

「甘いっ！」

シャルルがラウラに向けての連射をしている所に軽く斬りかかり中断させる。

ガギィィンッ！　案の定、近接ブレード《ブレッド・スライサー》で受け止められる。

「刹那！？っく！」

俺が参戦しないと言ってたからだろう、驚いている。それに不意打ちだったので体勢が崩れた

［俺は見せ掛けだけの試合をする。偶に攻撃を仕掛ける程度だ。それを避けたり反撃をしてくれればいい。俺のデータを態々、晒したくないからな」

プライベート・チャネルで伝えると［ん。了解］と返事が返ってきた。

よし。後は一夏がラウラと戦って、勝つか負けるかどっちに転がるかを見させてもらおう。

―――――

「貴様の武器はそのブレードのみ。近接戦でなければダメージを与えられないからな」

雪片とプラズマ手刀が打ち合う最中、声が聞こえる。

そう。一夏の武器は近接ブレード《雪片弐型》のみ。しかし、一夏が執拗に近接戦に拘るのは、

距離が離れれば大口径レール砲の的。そしてシュヴァルツェア・レーゲンの武装、

ワイヤーブレードがある限り、1度でも距離が開くと再び近づくのは難しい。

「うおおおおっ！」

ギンッ！ガィンッ！ガッ！ガギィィンッ！

「・・・そろそろ終わらせるか」

プラズマ手刀を解除し、両手を交差させ、前方に突き出す。

ＡＩＣを発動。一夏の動きを封じる。

「では――消えろ」

６つのワイヤーが射出された。

「くそおおおっ！」

一夏の叫びも虚しく、ＩＳ装甲の3分の1を削り取った。

見た感じではシールドエネルギーも半分近く減ったハズだ

ワイヤーが伸びて白式の籠手を掴み地へと叩きつける。

すかさず、体勢を立て直そうとする一夏が目にしたのは――

「とどめだ」

対ＩＳアーマー用特殊徹甲弾が己を目掛け進んでくる光景。

「（そろそろシャルルへの攻撃を止めるか・・・）」

軽くシャルルを吹き飛ばし、追い打ちをかけるフリをして、飛来する徹甲弾の元へ行く。
「おい！刹那！」
一夏の叫び声が聞こえるが無視。弾を斬る為に集中する。
――――

黒月を常に展開する事は自殺行為。ならば一瞬だけの展開をすればシールドエネルギーも少量で済む。
射出された弾丸を斬るにはそれなりの速度も必要だ。ただ振るだけでは斬れない。
　抜刀。　それは一瞬の斬撃にして爆発的な威力。
俺は鞘から刀を振りぬくイメージを浮かべ、黒月を展開。

――――――――ィィィン！
弾が当たるギリギリで断ち切る。前の時は出来た。なら…今回も出来る！
「うらぁぁぁっ！」
――――――――スパッァァ！

「悪いなラウラ・ボーデヴッヒ。俺に当りそうだったから、つい」
一夏が止めを刺されそうな時だけ手助けをしてやろう。
「貴様、言った筈だぞ。私の邪魔をするならば倒す、と」
「邪魔した訳じゃないって。流れ弾を斬っただけ。んじゃ俺は下がっとくよ」

ハイパーセンサーで背後を確認。一夏とシャルルが更なるヤル気を見せていた。
――――――――――――

「ふあー、すごいですねぇ。黒時君、あの弾丸を斬っちゃいましたよ。
でもボーデヴィッヒさんの邪魔になっちゃいましたけど」
「あれはデュノアに追撃すると見せかけた手助けだ。元より黒時はボーデヴィッヒと組んでいる
つもりは無いのだろう。2対2の様に見せた、3対1対だ」

「織斑君の人徳なんでしょうかね。でもちゃんと試合をしてくれないと困りますが…」
「…そうだな。（まぁ、黒時の場合はデータを取られない様に軽く戦っているだけなのだろう）」
「それにしても学年別トーナメントの急な形式変更は、先月の事件のせいですか？」
先月の事件――黒い全身装甲ＩＳの襲撃。反政府組織の仕業と言う事になったが、

襲撃という事で大事なので各国が揺らいでいる状況だ。
「おそらくそうだろう。実戦的な戦闘訓練を積ませる為、ツーマンセルになったのだろう」
「でも1年生は入学して3カ月目ですよ？戦争があるワケでも無いのに…必要あるんでしょうか？」
「先月の襲撃の様な事から自衛をする為だ。いつ狙われるかも分からない状況なら、な」

「ははぁ…成程」
疑問を氷解させ、頷く山田先生。再び、試合へと目を向けていく

――――――――

「これで決めるっ！」
零落白夜を発動させた一夏。
「触れれば一撃でエネルギーを消し去ると聞くが…当たらなければ意味は無い。
貴様の攻撃は読めている」

「普通に斬りかかれば、な。――それなら！」
「無駄な事を！」
ＡＩＣで動きを封じたラウラ。一夏が危ないが俺は手を出さない。
「…ああ、なんだ。忘れてるのか？俺達は――２人組なんだぜ？」

「！？」
遅い。視線を移した所でシャルルがショットガンの連射を叩き込み、ラウラの大型レール砲は爆散。
「おおおおおっ！」
隙が出来た相手に勝利を確信した一撃…の、筈だった。

キュゥゥゥン……。
エネルギー切れ。ダメージを負い過ぎたのだ。
「残念だったな。限界までエネルギーを消耗してはもう戦えまい！あと一撃で私の勝ちだ！」
「やらせないよ！」

シャルルが割って入るがワイヤーの牽制に邪魔をされる。
「うあっ！」
「シャルル！くっ――――」
気を取られた一夏に攻撃が来る。

「は……はは っ！私の勝ちだ！」
高らかな勝利宣言。けど、まぁ…

「敵が再起不能になるまで気を抜いちゃいけないだろ、普通。軍人なら当然じゃないのか？」
「なに？」
戦闘中は相手の動きを兎に角　確認しろ。それが出来ない奴は不意打ちに逢って負ける
「まだ終わってないよ」
『瞬時加速』を発動させたシャルルが使っている。
この戦いで覚えたのだろう。シャルルが『瞬時加速』を使えるなど誰も知らなかったのだから
「ふっ…。だが私の停止結界の前では無力！」
腕を突き出し、動きが止まった――――――ラウラ
ドンッ！
有らぬ方向からの射撃。視線を巡らすラウラと一夏の目が合う――
シャルルのアサルトライフルを構えた一夏と。
「こ、のっ……死に損ないがぁっ！」
「これで間合いに入れた」
シャルルが近づいて構えを取る
「それがどうした！第二世代の攻撃力ではこのシュヴァルツェア・レーゲンを墜とす事など――」
そこまで言って、ラウラはハッとする。
第二世代型最強の攻撃力を持った装備があると気付いた。
シャルルの盾の装甲が飛び、中から――
六十九口径パイルバンカー《灰色の鱗殻（グレー・スケール）》。通称――
「『盾殺し（シールド・ピアース）』…！」

「「おおおおおっ！」」
一夏とシャルルの声が重なる。ＡＩＣは間に合わない。
ズガンッ！！！

「ぐうぅっ！」
一発を撃ちこみ、終わりではない。灰色の鱗殻はリボルバー機構。
つまり連射可能。
ズガンッ！ズガンッ！ズガンッ！
ラウラのＩＳが強制解除の兆候を見せる。

――――

（こんなところで負けるのか、私は…！
私は負けられない！負ける訳にはいかない！）
彼女――ラウラは望む。
（力が、欲しい）

『――願うか…？汝、自らの変革を望むか…？より強い力を欲するか…？』
ラウラの奥底で何かが訊く。
言うまでも無い。力があるのなら、それを得られるなら、私など――空っぽの私など、
何から何までくれてやる！！！

だから、力を…比類無き最強を、唯一無二の絶対を――私によこせ！

Ｄａｍａｇｅ　Ｌｅｖｅｌ……Ｄ.
Ｍｉｎｄ　Ｃｏｎｄｔｉｏｎ……Ｕｐｌｉｆｔ.

Certification……Clear.

≪Valkyrie Trece System≫……boot.

最悪のパートナー（後書き）

感想、待ってます＼・ロ・

27話（前書き）

ま、またもやサブタイが思いつかない…だとっ！？

27話

「なんだよ、あれは…」
一夏が呟いていた。しかし、それを見た者は誰しもが同じ事を言うだろう。
ＩＳは原則として、変形しない。厳密には出来ないと言った方が正しい。
ＩＳがその形状を変えるのは『初期操縦者適応（スタートアップ・フィッティング）』と『形態移行（フォームシフト）』の２つだけだ。

パッケージなどでの多少の部分変化はあっても、基礎の形態が変化する事は無い。
だが――現に今、その、有り得ない事が起こっている…。
変形などで無く、一度ぐちゃぐちゃに溶かしてから再び作り上げた粘土人形に見えた。
シュヴァルツェア・レーゲンだったものがラウラを包み込むと急速に全身を変形、生成した。

先月の襲撃者とは違った黒い全身装甲のＩＳ・・・
その姿は最小限のアーマーしか纏わないのだが、問題は手に持つ武器――
「《雪片》……！」
一夏の姉、千冬さんが振るっていた刀。似ている？…否、複写（トレース）だ。

「――――！」
黒いＩＳが一夏の懐へ飛び込み、刀を中腰に構えた。
・・・あれは千冬さんの太刀筋だ。必中の間合いからの必殺の一閃。
「ぐうっ！」

一夏の《雪片弐型》が弾かる。トドメと言わんばかりの振り下ろしを辛うじて避けるが、
少し刃に触れたのだろう。腕からじわりと血が滲んでいた。
緊急回避を行った白式は光の粒子となり、消えた。
「それがどうした……」

――白式が消えたのに、そんな事など関係無い。そんな目をしている。
「それがどうしたあああっ！」
ちっ…あの馬鹿が！死ぬ気か！？
「うおおおおおっ！！！」

「一夏っ！」
一夏の腕を掴み、止める。
「離せ！刹那！あいつ、ふざけやがって！ぶっ飛ばしてやる！」
千冬さんの事になって熱くなってるのか？それでも冷静になれってての！
「どけよ刹那！邪魔をするならお前も――」

ガスッッ！と鐵を纏った状態での右ストレートを叩き込んでやる。
「ふぅ…落ち着け馬鹿が。何を熱くなってんだよ」
「あいつ……あれは、千冬姉のデータだ。それは千冬姉ものだ。千冬姉だけのものなんだよ。
それを……くそっ！」

やっぱり千冬さん絡みだったか…
「あんな、わけわかんねえ力に振り回されてるラウラは気に入らねえ。
ＩＳとラウラ、どっちも一発ぶっ叩いてやらねえと気がすまねえ」
「理由は分かった。けど今のお前には何の力がある？ＩＳも無い

お前が」

『非常事態発令！トーナメントの全試合は中止！状況をレベルDと認定、鎮圧のため教師部隊を送り込む！来賓、生徒はすぐに避難すること！繰り返す！』

「聞いたか？お前がやらなくても事態は収拾されるだろう……けど？お前はどうする？」

一夏の意思はかなりのモノだ。なら、それを少しだけ手伝ってやろう

「俺がやる…」

「ＯＫ…さて、白式のエネルギーだが――」

即座に相手のＩＳにエネルギーを渡せる訳ではない。エネルギー譲渡には時間がかかる。

「無いなら他から持ってくればいい。でしょ？２人とも」

「シャルル…」

吹き飛ばされてようやく立て直したのか…。

「だが、そう簡単にエネルギーバイパスを繋ぐには――」

「普通のＩＳなら無理だけど、僕のリヴァイヴならコア・バイパスで直ぐにエネルギーを移せると思う」

おいおい…マジか。通常は時間がかかって難しい筈の事を簡単に言ってくれやがる…。

「本当か！？だったら頼む！早速やってくれ！」

「けど！」

びしっとシャルルが一夏を指す

「けど、約束して。絶対に負けないって」

「もちろんだ。ここまで啖呵を切って飛び出すんだ。負けたら男じ

ゃねえよ」
ま、ここまで言うのは後には退けない覚悟を持っているからだろう。
「じゃあ、負けたら明日から一夏と刹那は女子の制服で通ってね」

「待て！シャルル！俺は何も関係ない！」
「負けたら一夏のせいって事で、ね」
理不尽だ。畜生…。
「い、いいぜ？なにせ負けないからな！」

勝手に了承してんじゃねえぞ一夏（バカ）！
けれど、この会話がいい意味で緊張を解す。
「じゃあ、はじめるよ。……リヴァイヴのコア・バイパスを開放。
エネルギー流出を許可。
一夏、白式のモードを一極限定にして。それで零落白夜が使える筈だから」

「おう、わかった」
「一夏？負けたら一生お前を恨む。そして明日からお前が瀕死になるまで顔面を殴り続ける！」
全力で念を押しておこう…。じょ、女装？ははは…ただのトラウマだよ！！！
「わ、分かってるよ…」

「完了。リヴァイヴのエネルギーは残量全部渡したよ」
シャルルの体からリヴァイヴは消える。
そして、白式の構築が始まる
「やっぱり、武器と右腕だけで限界だね」

「充分さ」
「さっさと終わらせてこい」

「行ってらっしゃい」
「じゃあ、行ってくる」

ゆっくりと黒いＩＳを見据え、言う。
「じゃあ、行くぜ偽者野郎。零落白夜――発動」
零落白夜の刃が日本刀の形に集約された。
一夏を敵と認識した黒いＩＳが刀を振り下ろす。

千冬さんの意思がない。そんなモノは――
「ただの真似事だ」
ギンッ！
腰から抜き放って横一閃、相手の刀を弾く

そしてすぐさま頭上に構え、縦に真っ直ぐ黒いＩＳを断ち斬る
「ぎ、ぎ……ガ……」
紫電が走り、黒いＩＳよりラウラが落ちるように出てくる。
「……まぁ、ぶっ飛ばすのは勘弁してやるよ」

ラウラを抱きかかえた一夏が呟いた。
その言葉は彼女に届くのは彼女自身が知る事だ。

――――――――――――

「ふぃー…」
一夏とシャルルが学食に行ったみたいだけど、自室で休憩する事にする。
「ただいまー」
おや、楯無さんのお帰りだ

「お帰りなさい。遅かったですねーやっぱり今日の事件についてで

すか？」
「更識家として、ね」
お疲れな事だ。俺も疲れてるけど
「今日の事件の原因はラウラのＩＳ――ＶＴシステムでしたか？」
ＶＴシステム――ま、過去のＩＳ大会で優秀な操縦者の動きをトレースするってヤツだ
「流石、刹那くん。その通り、織斑先生が重要案件で機密事項だって言ってたわ」
「今は禁止された代物（シロモノ）ですもんね～」
ふぅー、はぁー、と２人して溜息。いや、溜息を吐きたい気分なのだよ。

コンコンッ。ん？誰だ？
楯無さんに出てもらう訳に行かず（だって下着姿だし）俺が出る
「黒時君いますかー？」
おや、真耶ちゃん先生じゃないか

「いますよー…。で、何か用事でも？」扉が開き、会話を始める
「朗報です！なんとですね！ついに今日から男子の大浴場が解禁です！」
・・・・・・ゑ？マジで？
「マジですか！？てっきり来月からになるとばかり！」

「それがですね。今日は大浴場のボイラー点検があったので、もともと生徒たちが使えないんです。
でも点検が終わったので男子３人に使ってもらうって計らいなんです」
おぉ！普段の『仕事できるの？この人』な感じが真耶ちゃん先生から消える。

やればできる子だったのかっ！

「織斑君とデュノア君は先に大浴場の方へ行ってると思いますから黒時君も準備をしてくださいね」

「わっかりました！え、っと一夏たちは――」

一夏達は――――あれ？あれぇ～？男子３人？

「ちょ、ちょっと待ってくださいねー…」

思考を張り巡らす。これは……色々マズイな。色々と。

くっ！駄目だ！このまま大浴場へ向かったら、シャルルの事はどーするんだ？

ここは――――致し方ない…

「ま、真耶ちゃん先生…」

「は、はい？」

「俺、今日はシャワーで構いませんのでっ…今日は失礼しますね…おやすみなさい！」

圧縮空気の開閉音を後ろにベッドへと帰還する…まだドアの近くで何か言ってるけど無視。

一夏、俺は逃げる。何故だか大浴場に行くと大きな問題に直面しそうだから…。

「刹那くん、お風呂行かないの？」

「楯無さん…俺は男子です。一夏も男子。シャルルは女子だって分かってて言ってますよね？」

風呂…更に大浴場だというのに、行く勇気が無い。自室のシャワー室へ向かった。

「はぁぁぁ…」今日は溜息を吐きたくなる日なのだろう、きっと。

――――――――

髪をシャンプーで洗い、ボディータオルへと手を伸ば――無いガチャ。
「はーい。お背中流しに来たわよ」
「はぁっ!?」

シャワー室のドアを開け、水着姿の楯無さん登場。
「ちょ!?何しに来たんですか!?」
「お背中流しに」
「そうじゃなくてっ!」

「あらあら恥ずかしがり屋さんねぇ。ほら、おねーさんにすべてさらけ出しなさい」
「何でですか!大体、狭いのに2人で入ってどうするつもりですか!?」
「んー。密着?」
何で疑問形なんですか!

「まあまあ、そう言わずに」
ぐあっ!背中に柔らかい膨らみが水着越しに伝わってくる。
「だあああああっ!ダメです!さっさと撤退してください!」
「刹那くんの　ケチ」

「ケチって問題じゃない…うわぁぁ!?」
背中から腕が伸びてきて俺の胸板をなぞる様に指を這わせてくる。
「楯無さん!いい加減に――」
「背中を洗わせてくれたら出て行くわ」

なんかもう、抵抗する気力も沸かず…
「もう好きにしてください・・・」

「あはっ♪刹那くんってば気前いい～」
もう、どうとでもなれ・・・

――――――――

「今日は、ですね……みなさんに転校生を紹介します。まぁ…すでに紹介済みというか」
朝っぱらからテンションが低い真耶ちゃん先生だが、え？転校生？また？
「じゃあ、入ってください」
「失礼します」

どっかで聞いた事のある声だ。ついでに――
「シャルロット・デュノアです。皆さん、改めてよろしくお願いします」
シャルルに似た女子だなぁ～…じゃねえ！
「え？デュノア君て女？」

「おかしいと思った！美少年じゃなくて美少女だったわけね」
「織斑君、昨日デュノア君とお風呂に――」
ザワザワザワ。あ、オワタ。一夏、オワタ
バッッッシーーン！何かが扉を吹き飛ばし教室に乱入。あ、鈴だ

「一夏ぁっ！！！死ね！！！」
初撃――鳳　鈴音。（ＩＳ展開状態）両肩の衝撃砲開放準備完了
あぁ…明日の朝刊のトップはこうだろう。
「ミンチでした」「トマトケチャップでした」「地に堕つ柿でした」
「或いはイチジクでしたー」

「缶コーラでした」「又はぺ○プシコーラでした」「Ｃ●ｃａ－Ｃ

●ｌａでした」
お、最後の３つは全部一緒じゃないか
衝撃砲の連射が終わり、一夏を見ると――
「お、お前は私の嫁にする！決定事項だ！異論は認めん！」

瞬きを何度しただろうか、あの光景に。ラウラと一夏の唇が重なっている光景に。
あ。逃げた。一夏が。
ビュンッ！セシリアのレーザーだろう。危険が増してきた。
ん、次は箒の竹刀が空間を断ち切りそうなオーラを纏ってる。なにアレ？

お、今度はシャルルがＩＳを展開。あ、あれは『盾殺し（シールド・ピアース）』
・・・さようなら、一夏。心の中で敬礼。
ドガァァァッン！朝のＨＲは轟音と爆風が入り混じるＨＲとなった…。
今日からはもっと騒がしくなりそうだ。

―――
――
―

誰もいない場所で誰かとの電話を終えた女性が更なる騒ぎを引き起こす事は誰も知らない・・・

27話（後書き）

感想、その他待ってまーす＼（・皿＼）

同室の人と戦闘（前書き）

なんでこの２人の戦闘を書いたのだ？私は・・・。

同室の人と戦闘

「楯無さん、今日暇ですか？」
日曜日の朝、同室の楯無さんに尋ねてみる
「ええ。それがどうしたの？」
「模擬戦…してくれません？」

――――――――

第二アリーナにてＩＳを展開して楯無さんと向かい合う。
楯無さんのＩＳ『霧纏の淑女（ミステリアス・レイディ）』の見た目は――
アーマー面積が全体的に狭く、小さい。
だが、それのカバーの様に透明の液状のフィールドが形成されている。水のドレスってとこか。

そういえば初めて見たなーこの人の機体
「じゃあ…準備はいいですか？」
「いつでも構わないわよ」
「なら――行きますよ！」

――――――――

学年別トーナメントでラウラの弾丸を斬り裂いた時の事を考えた――
「（あれは咄嗟の決断力と瞬発力が無いと無理だ。…誰かと模擬戦でもして鍛えてみるか？）」
普段は模擬戦など自分の利益がないとしないのだが――今までの様に黒月一本で戦闘だ。
それは変わらない。けれど黒月にエネルギー消費があると今までの戦いは見直す必要がある。

まず一夏、――アイツもエネルギー消費の問題を抱えているが、一夏の戦闘法は参考にならない。

箒――アイツの真剣使った抜刀には学ぶところがあるが、ＩＳ関係では無い。

セシリアとシャルル――今回、近接戦闘メインだから、遠距離相手との戦闘には役に立つが、今必要な相手は近・中距離戦での相手だ

ラウラ――非常に近接・中距離のバランスがいいが《シュヴァルツェア・レーゲン》は修理中。

クラスの誰かに訓練機を使ってもらう？誰がいるんだよ・・・

と、言う事で――あ、楯無さんいるじゃん！って楯無さんに模擬戦頼んだんだよ。

別に無理して戦い方を変える必要もないが、攻撃・防御の２つに黒月を使ってたから

防御時に、黒月を展開してない手で防いでしまいそうになったからなぁ…。

戦闘中、常に持っているのが普通だったので慣れない感覚だ。

今の黒月は常に展開してたら（もともと軍用ＩＳとして作られたのでエネルギー量は多いが）数十分で

全エネルギーを喰い尽す。敵さんが持久戦に持ち込むと勝ち目がない…。

とまぁ今は近・中戦で戦法をどうするか見直す。

楯無さんに説明してＯＫ取れたら模擬戦するかー

―――――――

「――――ッ！」

まずは黒月を使わない戦闘法を試す。開始直後、飛び出しからの横薙ぎ回し蹴り――うん。避けられた

「甘いわよ」

言いながら右の手に持つランスを突き出してくる。

後方回避。ただ単に武器で突かれても避ける

「楯無さんこそ甘い攻撃ですねっ！」

体を前方へと傾け、零距離まで近づいてやる

「ふふっ。まだまだよ！」

特に動きを見せない楯無さんの表情は焦っていない――！？やべっ！

ランスをよく見ると穴がある。ズガガガガガッ！

四連装のガトリング・ガンが鐵のシールド・エネルギーを削っていく。

けど、ま、これくらいの消費は掠り傷程度だ。このまま格闘戦に持ち込む！

「そらッ！」

右腕でランスを払い除け、左で殴る――ランスを持つ反対の手で払われる。

・・・攻撃に黒月を使わないと一撃も入れれない

「楯無さん、こっから武器を使わせて貰いますよっ！」

「りょーかい――っ！」

飛翔中の抜刀は俺に無理なことだ。だから普通に斬りかかる

ガギィィンッ！ランスと太刀が火花を散らして弾き合う。

俺のＩＳ《鐵》はスピードがトップクラスと自負している。弾き合った直後、移動。そして斬る

ガギィン！ギィィン！
斬っても斬っても弾かれる・・・
「埒が明きませんねっ！」
「刹那くんが攻めてくるからでしょっ！」

一度、間合いを取って楯無さんの出方を伺う。
四門ガトリングによる牽制の後、その手に呼び出した武器――蛇腹剣《ラスティー・ネイル》
――――――ッッッ！鞭のようにしなる（高圧水流付きで）それで黒月を狙う。
「ちっ！――――けど残念でしたっ！」

黒月を収納（クローズ）。そして呼び出し（コール）…して、思いっ切り、振り被る！
投太刀？ってトコだ。不意打ちも使いどころに寄れば強力な一撃と化す。
決まればシールド・エネルギーの４分の１は削れる筈。
しかし、簡単には届かない。霧纏の淑女を守る水のベールにより防がれる。

「・・・ただの水じゃないですね」
「その通り。でも種明かしはしないよ」
あぁそうですかい…。いいなぁ…武器が１つって中々辛いもんだ。
まずは――――

「その水を操作する元凶を壊させて貰いましょう」
壊せばいいのは左右に浮かぶヤツだろう。
「それが出来るかしら？」

涼しい声してランスの連続突きは怖いな・・・

つーか俺、さっきからあんまり攻撃に転じてないし！黒月の回収に行けねえ！

空中からの投剣だったせいか、水のベールに防がれ変な方に飛んだせいか、地面に刺さってやがる

楯無（このヒト）さん上手い事武器の切り替えしてるから近づくのが困難だ。

こっちは何もしてないのにエネルギーを地道に減らされる…

「飛ばしますよ！っと」

『瞬時加速』じゃない。あんなモン使ったらエネルギー消費が早まるだろーが。

ズガガガガッ！！！シュッ！シィッ！　くそっ近寄れん・・・

「そろそろ疲れたかな？」

「楯無さんこそ！疲れたんじゃないですか？攻撃が単調ですね！」

パシィン！――――よしっ！黒月は回収成功。反撃開始だ。

「もらった！」

ズガガガガガァァッッ！

「きゃっ！」

背後に回り、袈裟斬り。絶対防御が発動したのだろう。ちょっとはエネルギー減らせたはず

「ようやく俺の一撃ですか…大変でしたよ。――そろそろトドメですかね」

「こ、こら…おねーさんを見くびっちゃダメ…でしょ」

手応えと見た目からしてかなり削ったな、楯無さんのシールド・エネルギー

「遠慮はしませんよ！」

先程より隙が見えてくる。それなりの時間　戦ったのだろう、鐵のエネルギー残量も少なくなっている
「うらあぁぁぁ！」

スカッ・・・スカ？手応え無し。水？――――っ！？振り向く先に遠い所に浮かぶ楯無さん。
「残念♪」
「水で作った偽物、ですか」
分身と本物を入れ替えたのはいつなのか、全く分からない。ホントすごいですよ…。

「いつのタイミングで入れ替えを？」
「刹那くんに一撃を入れられた後、かな」
「ならエネルギーは減ってるんですね。次で決めますよ」
互いに残量は少ない筈。後、2～3撃で勝負はつきそうだ。

「けど、その前に刹那くん」
「なんですか？」
「刹那くんの周り、少し暑くない？」
「・・・？」

「温度ってわけじゃなくて、刹那くんの体感温度が」
「なんか・・・逃げろって直感がビシビシ来ますね」
その場から離れる準備を始め――
「でも、遅いわよ」

ぱちんっ、と楯無さんが指を鳴らす。俺の周囲が爆発する。
まずっ！エネルギー残量なんか気にする暇なんて無い！
エネルギーが切れたら俺の負けだ。
楯無さん・・・ここまでやるなんてバケモノですかっての！

―――――――

「ふぅ…これで終わり、かな？」

ＩＳより伝達されたエネルギーを霧を構成するナノマシンが一斉に熱に転換し、対象を爆破する能力
『清き熱情（クリア・パッション）』その能力は絶大だった。
煙が舞う中、楯無は息をつく。あの爆発からは逃げられないだろう…と確信してしまったからだ。
―戦いの中で過信は禁物ですよ？楯無さん―

「――――っ！？」
「俺の勝ちですよね？」
背後より黒月を向け問う。
「はぁ・・・そうね。私の負けよ。けど刹那くん？」

「はい？」
「どうやって私の後ろに？」
「『瞬時加速』ですかねー…。使ったら有り得ない位のスピードが出ますけど、エネルギー消費が…」
『霧纏の淑女』エネルギー残量０『鐵』エネルギー残量１３

ギリギリの勝負だったわけだ。
「今日は有難う御座いました、楯無さん」
「こちらこそ。いい経験だったわ」
俺の戦闘法を見直すには最適の相手だった。

「ねえ、刹那くん」
「はい？」

「一緒にシャワー浴びる？」
「ちょ！？な、何言ってるんですか！？」

「あはっ♪これは私の勝ち、かな」
勝ち誇った笑顔を向けられる。
・・・この人に勝つのは色んな事に関して無理なのかも、と思えたのだった。

同室の人と戦闘（後書き）

次回より原作3巻ですねー。

感想、待ってます（・ロ・）ゞ

水着を買いに。（前書き）

海に行くのは次回ですね。今回は水着を求める　お話です。

水着を買いに。

朝食を早めに済ませ、早い時間から教室にいる俺。
原因は隣の隣の隣の隣部屋より波乱と殺気が発生しそうな感じだったから…。
つまり一夏の部屋から嫌な予感が感じたのだ。
その嫌な感じに首を突っ込むと面白そうだが命に関わる気が…平和が一番と信じ、早く教室へＧＯ

よく解らない理屈だが、朝早くに目が覚めたのも１つの理由だ。
ザワザワザワ。クラスメイト達が教室に入ってくるので挨拶をしながら談笑へ移る。
――――――――キーンコンカーンコーン・・・。
あ、予鈴がなった。今日は千冬さんのＳＨＲだというのに一夏、シャルロット、箒、ラウラがいない

ギュンッ！小規模の風が発生したかと思うと――
「到着っ！」ＩＳ部分展開状態のシャルロット。ＰＩＣで飛んだのか
「おう、ご苦労なことだ」千冬さんのお待ちかね
まったく御苦労様だよ。――あ、箒とラウラが後ろからこっそり入って来た

「本学園はＩＳの操縦者育成のために設立された教育機関だ。そのためどこの国にも属さず、
故にあらゆる外的権力の影響を受けない。がしかし――」
すぱぁんっ！今日も響く出席簿攻撃の音。最近は俺にｆｌｙｉｎｇ出席簿が来なくて平和だ。
「敷地内でも許可されていないＩＳ展開は禁止されている。意味は分かるな？」

「は、はい……。すみません…」
クラスの皆の顔は唖然とした表情だ。優等生（シャルロット）が規律を破ったからだろう。
「デュノアと織斑は放課後教室を掃除しておけ。二回目は反省文と特別教室だ」
「「はい・・・」」

「さて…今日は通常授業の日だったな。ＩＳ学園生といえお前たちは高校生だ。赤点など取るなよ」
そう。授業自体は少ないが一般教科もある。期末テストで赤点を得ると夏休みを無にしてしまう
「それと、来週から始まる校外特別実習期間だが、全員忘れ物などするなよ。
三日間だが学園を離れることになる。自由時間では羽目を外しすぎないように」

7月頭の校外実習――すなわち、臨海学校なのだ
最近、女子と会話をするとその話題が出てくる。海・・・少し楽しみだ
水着を持ってないから買いに行かないといけないなま、日曜日くらいに出掛けるか――――

「ではＳＨＲを終わる。各人、今日もしっかりと勉学に励めよ」
「あの、織斑先生。今日は山田先生はお休みですか？」
クラスのしっかり者こと鷹月　静寐さんの質問だ。真耶ちゃん先生、寝坊か？クビになったか？
「山田先生は校外実習の現地視察に行っているので今日は不在だ。なので山田先生の仕事は私が今日一日代わりに担当する」

「ええっ、山ちゃん一足先に海に行ってるんですか！？いいな～！」
「ずるい！私にも一声かけてくれればいいのに！」
「あー、泳いでるのかなー。泳いでるんだろうなー」
咲き乱れる十代女子、話題があれば一気に賑わう

「あー、いちいち騒ぐな。鬱陶しい。山田先生は仕事で行っているんだ。遊びではない」
はーい、と揃った返事をする1組女子。チームワークは相変わらずだ。

――――――――

「さて、と」
日曜日。そろそろ臨海学校なので水着を買いに行こう。ついでにぶらついてくるかー。
部屋のドアを開き外に出ようと――
「あら、刹那くん。どこかにお出かけ？」同室の人が戻って来た

「えぇ買い物を。それじゃ失礼しまぐぇ！？」
楯無さんの横をすり抜ける様に通ると後ろ首を掴まれた。
「ゴホッ…何するんですか？」
「私も一緒に行っていい？」

「Ｗｈｙ？」
「んーなんとなく？」
最近の楯無さんの行動は不思議だ。
「別に構いませんけど、水着を買うくらいですよ？」

「おねーさんの？」
「なんで俺が楯無さんの水着を買う必要あるんですか…」

「一緒にシャワー浴びる為？」
「何ですかその理由…そしてなんで疑問形――いや、もういいです」

ツッコミするのが億劫だ・・・。
「着替えるから待っててねー」
楯無さんが部屋に入って数分・・・
「おまたせー」

部屋から出てきた楯無さんの格好――ふむふむ…なんでさ
「楯無さん」
「なあに？」
「自分の格好見直せぇぇぇっ！！！」

お・か・し・い・だ・ろ・！
なんで！？なんでメイド服！？ついでに極が付く程のミニスカート！なにがしたいの！？
「あら、気に入らなかったかしら？」
「気に入るとか気に入らないとかの問題じゃねぇーんだよぉぉ！」

確かに、普段着でそんな格好するヤツはいないだろう…いたなら不思議な人と呼ばせてもらう
「兎に角、着替え直してください」
「刹那くんのいけずー」
ぶーぶー言いながらも部屋に戻り――数分

今度は白いオーバースカート付きの黒いハーフパンツに水色のタンクトップ。
うん。全然大丈夫だ。ついでに似合っている。素直に可愛いと思うね
「それじゃ行きますよ？」
「はーい」

――――――

水着売り場へ到着。駅前のショッピングモールの二階に位置している
「さて、シンプルに黒色の水着を買いますか」
男の水着なんて種類は少ないからな。逆に女性の水着は種類がありすぎるけども
「刹那くん刹那くん」

男物コーナーにて楯無さんが色々と見て回っている。
「なんです？」
「これ似合うんじゃ――」
「似合いません。そして嫌です」

誰が褌（ふんどし）を着けて泳ぐヤツがいるか。大体なんで褌なんて売って――ぐるりと店内を見渡す。５：４：１の割合で水着がある…けど５割が普通のタイプ。１割が逆三角のタイプ。残り４割は色んな褌コーナー・・・
この店…何が楽しいのだろうか・・・理解に苦しむ

俺はさっさと黒色の水着を購入。これで用事は半分済んだ
「じゃあ次は私の水着ね」
「必要無いでしょうに」
「あら、新しい水着で一緒にシャワー浴びないの？」

色々と頭大丈夫ですか？通り掛かった人に変な目で見られたじゃないですか
「まあ私も水着が欲しいから買うわね」
言いながら女性用のコーナーへ向かって行――あれ？
「俺も行くんですか！？」

腕を掴まれて引きずられていた・・・

――――――――――

「これで今日の用事はお終い？」
「ええ。でもまさか楯無さんが本気で水着を買うとは」
あの後、楯無さんは水着を選び、試着室に入って行き。着替えては見せつけてくる。
かなりの眼福だったがスタイル抜群の楯無さんを見るのは妙にドキドキした。

最終的に水色波柄ビキニ＋パレオの水着が気に入ったらしく、購入していた
「私も臨海学校に行って泳ごうかなーと思ってね」
「アナタは学校でしょうが。生徒会長がサボタージュですか？」
「生徒会長権限でどうにかするわ」

「絶対無理だと思います」
「冗談よ♪」
無邪気な子供の様な笑顔をむけてくる。ドキッとしてしまうが、本当にこの人は不思議だとも思ってしまうのだった。

水着を買いに。（後書き）

なんだろう・・・。最後の方がｇｄｇｄだったかな？
後、楯無さんの服装面…大丈夫ですかねー？
変だったら指摘してくださいね（・。・）ｙ

感想、その他、待ってますｂ

臨海学校、初日。（前書き）

gdってるかも・・・

臨海学校、初日。

「海…見えたぁっ！」
トンネルを抜けたバスの中で誰かが声を上げた。
臨海学校初日、天気は快晴。微かに潮の香りが漂う
「――――――ＺＺＺ～ぅ…」

眠い・・・てか寝てた。断じて前日にテンションが上がって寝付けなかったワケじゃない。
天気が良いうえ、俺の席は窓際なので太陽の光を受ける。ついつい眠くなる。
さっきウトウトしている時に顔の近くで写メを撮る音が聞こえたが、何か珍しいモノでもあったのか
女子達は撮った写真を見ては笑顔になっている。見せてもらいたいが見せてくれないのだ。なんで？

「そろそろ目的地に着く。全員ちゃんと席に座れ」
千冬さんの言葉で全員がそれに従う。指導能力は抜群だ。
ほどなくしてバスは目的地の旅館前に到着。四台のバスからＩＳ学園１年生が出てきて整列。
「それでは、ここが今日から三日間お世話になる花月荘だ。
全員、従業員の仕事を増やさないように注意しろ」

「「「よろしくおねがいしまーす」」」
「はい、こちらこそ。今年の１年生も元気があってよろしいですね」
ここの女将さんだろう。歳は３０位でしっかり大人の雰囲気が漂っている。
「あら、こちらが例の・・・？」

俺と一夏を見た女将が千冬さんに尋ねる
「ええ、まあ。今年は2人男子がいるせいで浴場分け難しくなってしまって申し訳ありません」
「いえいえ、そんな。それに、いい男の子じゃありませんか。しっかりしてそうな感じを受けますよ」
「感じがするだけですよ。挨拶をしろ馬鹿者共」

誰が馬鹿者共だ。馬鹿は一夏1人で十分だ。さて、挨拶挨拶
「お、織斑　一夏です。よろしくお願いします」
「黒時　刹那です。今日から3日間よろしくお願いします」
「うふふ、ご丁寧にどうも。清洲　景子です」

女将さんは丁寧にお辞儀をする。
大人な女性の対応だ。気品―というモノを感じる。
「不出来の弟と学習能力皆無な奴でご迷惑をおかけします」
何で!?俺の扱い酷いよ千冬さん!?このっブラコ――――ヒュン・・・

「言った通りだろう?」
「ゴメンナサイ……」はい、読心。
久しぶりに飛んで来たよ出席簿…相変わらず頸動脈狙いは怖いって…
「あらあら織斑さんったら、弟さんと黒時さんには厳しいんですね」

「いつも手を焼かされていますので」
・・・俺、そんなに迷惑掛けてない。寧ろ俺が被害にあって――――…る?
「それじゃあみなさん、お部屋の方にどうぞ。海に行かれる方は別館の方で着替えられるようになっていますから、そちらをご利用なさってくださいな。
場所がわからなければいつでも従業員に訊いてくださいまし」

生徒一同は、はーいと返事をし、旅館の中にへ向かって行った。
初日は終日自由時間。食事は各自、食堂でとるとの事。
「ね、ね、ねー。おりむ～、くろち～」
この呼び方、間違いなくのほほんだ。スーパースロー並の速度で近づいてくる。

「2人の部屋どこ～？一覧に書いてなかったー。遊び行くから教えて～」
その言葉で周りにいた女子が一斉に聞き耳を立てるのがわかった。
「いや、俺も知らない。刹那は？」
「俺も知らん。まさか――床で寝ろ！とか？」

「わー、それはいいね～。私もそうしようかなー。あー、床つめたーいって～」
「冗談だから真に受けんな」
「織斑、黒時、お前らの部屋はこっちだ。ついてこい」
千冬さんに呼ばれ、のほほんと別れ、ついていく。

「えーっと、織斑先生。俺たちの部屋ってどこになるんでしょうか？」
「黙ってついてこい」
黙ってついて行くしかないようだ。
「ここだ」

「え？ここって…」
ドアに張り付いている紙に『教員室』と書かれている。何故に？
「最初はお前達の2人部屋という話だったんだが、それだと絶対に就寝時間を無視した女子が
押しかけるだろうということになってだな」

はぁ、とため息をついて千冬さんが続ける。
「結果、織斑は私と同室になったわけだ。これなら女子はおいそれと近づかないだろう」
「あれ?俺は同じ部屋じゃないんです?」
「・・・・・お前は個室だ」

ほへ?なんで?
「最初は山田先生と同室という話だったんだが、山田先生が何やら動揺してな・・・。
だから他の先生に頼んでみると同じく動揺されてだな・・・」
「えー…と?意味が掴めないというか、なんというか…。はい?」

「分からなくてもいい。とにかくお前は個室だ。が、女子を連れ込むんじゃないぞ?」
面倒だからな。と言い、浴場の時間帯が書かれた紙を渡してきて教員室に入って行った。
なんで俺は個室?ぁ、イジめ?
・・・まぁ個室ばんざーい…って喜んでおこう。・・・ばんざーい

・・・・・海、行ってみるか
バッグに着替えなどを詰め込み、更衣室へ向かう。

―――――――――――

「あ、黒時くーん!」
「え、うそっ!わ、私の水着変じゃないよね!?大丈夫だよね!?」
「わ、わ~。体かっこい~。鍛えてるね~」
「後でビーチバレーやろーねー」

更衣室から出てきたであろう女子と軽い会話を交わす。
「暇だったらねー」
まずは――海に入る。深い所まで泳いでいく。潜る。鐵を展開する。
海の中を猛スピードで突っ切り、人気のない場所で浮上。鐵を解除。
そして――

「（ただ浮かぶ～）」
何もせずに浮かぶって何か気持ちいいじゃないか。
何も考えず、ただただ浮く。あ～寝たい。でもここで寝たら沈む。
ふぅー……んぁ？今、上空にオレンジ色の――にんじん？が旅館目指して飛んで行った様に見えた

「（まぁ…気のせいだろ）」
心地良くなってきて本気で眠くなってきたので一旦、ビーチに戻るとしよう。

――――――――――

ゆっくり泳いでビーチに戻り、第一に俺が目にしたのは――
「実の姉に対して鼻の下を伸ばすやつがいる・・・」
一夏だ。近くまで行ってみるか
「一夏、鼻の下伸びてる」

シャルロットも俺と同じ感想を持った様だ。
「確かに伸びてたな」
「刹那？シャルも…そ、そんなわけないだろ」
「さぁそれはホントかねぇ？」

この後軽く一夏をからかってたら昼飯に誘われたので一緒に食堂へと向かった。

―――――――

「うん。美味い」
昼食を終えた後、女子達とビーチバレーなどで遊び、夕方。夕飯の時間だ
「でも食事の時に浴衣着用って・・・普通、逆だろ」
隣の女子達と軽く談笑をしつつ、ふと周りを見渡すと

シャルロットがワサビの山を食べて、涙目になっていたり。
一夏の隣にいるセシリアが正座をしているからだろうか、刺身を何回も取り落としたり。
皆が皆、この時間を楽しんでいるようだった。
そんなこんなで臨海学校初日は過ぎて行った――――

臨海学校、初日。（後書き）

感想、その他、待ってますm（＿＿）m

専用機　『紅椿』

合宿二日目。
今日は午前中から夜まで丸一日ＩＳの各種装備試験運用とデータ取りに追われる。
特に専用機持ちは大量の装備が待っているのだから大変だ。俺と《鐵》には関係無いけど。
「ようやく全員集まったか。――おい、遅刻者」

「は、はいっ」
千冬さんに呼ばれ身をすくませたのは意外や意外ラウラだった。
ラウラが寝坊をしたせいで集合時間に５分遅れてやってきた。
「そうだな、ＩＳのコア・ネットワークについて説明してみろ」

「は、はい。ＩＳのコアはそれぞれが相互情報交換のためのデータ通信ネットワークを持っています。
これは元々広大な宇宙空間における相互位置情報交換のために設けられたもので、現在はオープン・チャネルとプライベート・チャネルによる操縦者会話など、通信に使われています。
それ以外にも『非限定情報共通（シェアリング）』をコア同士が各自に行うことで、さまざまな情報を自己進化の糧として吸収していることが近年の研究でわかりました。
これらは製作者の篠ノ乃博士が自己発達の一環として無制限開放を許可したため、
現在も進化の途中であり、全容は掴めていないとの事です」
「流石に優秀だな。遅刻の件はこれで許してやろう」

ここで説明が不十分だったら、ラウラは何かしらの罰が下されてい

ただろう。
「さて、それでは各班ごとに振り分けられたＩＳの装備試験を行うように。
専用機持ちは専用パーツのテストだ。全員、迅速に行え」
はーい、と一同が返事をする。さすがに一学年全員がずらりと並んでいるので、かなりの人数だ
ちなみに現在位置はＩＳ試験用のビーチで四方を切り立った崖に囲まれている。
ドーム状になっているのが学園のアリーナを連想させる。
「ああ、篠ノ乃。お前はちょっとこっちに来い」
「はい」
打鉄用の装備を運んでいた箒は千冬さんに呼ばれてそちらへ向かう。
「お前には今日から専用――」
「ちーちゃ～～～～～～ん！！！」
ずどどど……！砂塵を上げながら人影が走ってくる。
ＩＳか何かを装備でもしているのだろうが・・・問題はその人影が――
「（この声、あの見た目・・・！）」
「…束」
――だということ。
「やあやあ！会いたかったよ、ちーちゃん！さあ、ハグハグしよう！愛を確かめ――――ぶへっ」
飛びかかってきた束（バカ）を片手で掴む。しかも顔面。思いっきり指が食い込んでいた。
「うるさいぞ、束」

「ぐぬぬぬ……相変わらず容赦のないアイアンクローだねっ」
そしてその拘束から抜け出す束（コイツ）もただ者ではない。
よっ、と着地した束は、今度は箒の方を向く。
「やあ！」

「……どうも」

「えへへ、久しぶりだね。こうして会うのは何年ぶりかなぁ。おっきくなったね、箒ちゃん。
特におっぱいが」

がんっ！

「な、殴ってから言ったぁ……し、しかも日本刀の鞘で叩いた！ひどい！箒ちゃんひどい！」
頭を押さえながら涙目になって訴える束。そんな2人のやりとりに
「え、えっと、この合宿では関係者以外――」

「んん？珍妙奇天烈なことを言うね。ＩＳの関係者というなら、一番はこの私において他にいないよ」
「えっ、あっ、はいっ。そうですね・・・」
真耶ちゃん轟沈。てか、束（コイツ）に何を言っても無駄だ。
「おい束。自己紹介くらいしろ。うちの生徒たちが困っている」

「えー、めんどくさいなぁ。私が天才の束さんだよ、はろー。終わり」
その場でくるんと回ってみせる。ぽかんとしていた一同も目の前の人物が誰か気づいたらしい。騒がしくなった
「はぁ……もう少しまともにできんのか、お前は。そら一年、手が

止まっているぞ。こいつのことは無視してテストを続けろ」

「こいつはひどいなぁ、らぶりぃ束さんと呼んでいいよ？」

「うるさい、黙れ」

・・・もう、本題に入るまで意識を放棄しておこう。

束の話を聞くのは第三者であっても疲れるというか、何というか・・

・

「ん～？おや？あー！久しぶりだねぇせっちゃん！」

ブチィィィッ！こ、束（こいつ）っ・・・！

「せ、せ、せ・・・」

「せ？どうした刹――」

「せっちゃん言うなあああああああ！！！」

「へ？」今、俺の周囲――いや、多分、このビーチにいる全員（千冬さんと束を除く）は頭の上に『！？』を浮かべただろう。『！』は赤色。『？』は青色だった事だろう…。

「せ、刹那？なんでいきなり大声あげてんだよ」

「黙れ……黙ってくれ……俺の…俺の過去（トラウマ）に触れる事にっ…！」

「？なに言ってんだ？というより束さんと知り合いだったのか」
…俺が自由に生き始めた頃の嫌な話だ。一度、深呼吸をして落ち着く。すぅー…はぁー。
「いや、悪い。なんでもない。織斑先生話を進めてください」
辺りを見回したが、全員がぽかーんとしていた。

「むー。ひどいなぁ、せっちゃん。束さんの事を無視するなんて」
む、無視だ。無視。無視、絶対。
「あ、あの、それで、頼んでおいたものは・・・？」
空気を読んだのか、箒が躊躇いがちに訊く。

「うっふっふっ。それはすでに準備済みだよ。さあ、大空をご覧あれ！」
びしっと直上を指さす束。その言葉に従って皆が空を見上げる

ズズーンッ！！

「うわっ！？」
いきなり激しい衝撃を伴って、なにやら金属の塊が砂浜に落下してきた。
銀色をしたそれは、次の瞬間正面らしき壁がばたりと倒れてその中身を俺たちに見せる。
そこにあったのは――――
「じゃじゃーん！これぞ箒ちゃん専用機こと『紅椿（あかつばき）』！全スペックが現行ＩＳを上回る束さんお手製ＩＳだよ！」

真紅の装甲に身を包んだその機体は、束さんの言葉に応えるかのように動作アームによって
外へと出てくる。
全スペックが現行ＩＳを上回る・・・あまり良い響きではないように感じる。
最新気鋭にして最高性能機ってことか。

「さあ！箒ちゃん！今からフィッティングとパーソナライズをはじめようか！
私が補佐するからすぐに終わるよん♪」
「……それでは、頼みます」
「堅いよ～。実の姉妹なんだし、こうもっとキャッチーな呼び方で――」

「はやく、はじめましょう」
とりつく島もないってトコロか・・・
「ん～。まあ、そうだね。じゃあはじめようか」
ぴ、とリモコンのボタンを押す束

すると紅椿の装甲が割れて、操縦者を受け入れる状態に移る
「箒ちゃんのデータはある程度先行して入れてあるから、後は最新データに更新するだけだね。
さて、ぴ、ぽ、ぱ♪」
コンソールを開いて指を滑らせる束。

「近接戦闘を基礎に万能型に調整してあるから、すぐに馴染むと思うよ。
あとは自動支援装備もつけておいたからね！お姉ちゃんが！」
「それは、どうも」

箒と束の間には何かあったような感じだ。

「ん～、ふ、ふ、ふふ～♪　箒ちゃん、また剣の腕前あがったねぇ。筋肉の付き方を見ればわかるよ。やあやあ、お姉ちゃんは鼻が高いなぁ」

「・・・・・・」

「えへへ、無視されちった。――はい、フッティング終了～。超早いね。さすが私」

無駄話をしながらも束の手は休むことなく動き続けている

それはもうキーボードを打つと言うよりもピアノを弾いているかのような動きだ。

「（束（コイツ）が作った最高性能機――紅椿。近接戦闘を主としたＩＳ…ってだけじゃなさそうだが…）」

左右に一本ずつの日本刀型ブレード以外、目立つ装備は見当たらない。

「あの専用機って篠ノ之さんがもらえるの……？身内ってだけで」

「だよねぇ。なんかずるいよねぇ」

群衆の中からそんな声が聞こえる。その声に素早く反応したのは束だった。

「おやおや、歴史の勉強をしたことがないのかな？有史以来、世界が平等であったことなど一度もないよ」

ピンポイントに指摘を受けた女子は気まずそうに作業へと戻って行った。

だが、まあ、世界が平等であったことなど確かに無い。事実なのだ。

「（平等なんてモノは無い。今までも誰かの上に誰かが立ち続けてきた。

そして、これからの世界が全て平等になるなど・・・ただの戯言（ざれごと）だ）

」

自分の生きてきた境遇を思い出しながら皮肉ってると――――
ドドドドドッ！！！
（恐らく、束が呼び出し（コール）したであろう）ミサイルポッドから十六発のミサイルが放たれた。
それは紅椿を纏い、二刀の持つ箒へと飛ぶ。

「――――やれる！この紅椿なら！」
言葉通り、右脇下に構えた刀を振るい、ミサイルを撃墜した。
ふと、千冬さんの方に目を向けると、厳しい目つきで束を睨んでいた。
・・・警戒をしているんだろう。この紅椿の性能と束の考えている事に。

「たっ、た、大変です！　お、おお、織斑先生っ！」
いつもの慌てっぷりよりも遥かに慌てている山田先生。
「どうした？」
「こ、こっ、これを！」

渡された携帯端末を見た千冬さんの表情が変わる。
「特命任務レベルA、現時刻より対策を始められたし……」
「そ、それが、その、ハワイ沖で試験稼働をしていた――――」
「しっ。機密事項を口にするな。生徒たちに聞こえる」

「す、すみませんっ……」
「専用機持ちは？」
「ひ、1人欠席していますが、それ以外は」
何やら小声で会話をしていたのだが、生徒たちの視線に気づいてか、手話に切り替えていた。

「（二時間前…ハワイ沖…第…三世代…軍用…ＩＳ『銀の…福音』…制御下…離れ…監視…空域…離脱）」
千冬さんと山田先生の手話から読み取れた事を途切れ途切れにまとめる。
ぶっちゃっけ、俺は軍関係の暗号程度、簡単に読める。
「そ、それでは、私は他の先生にも連絡してきますのでっ」

「了解した。――全員、注目！」
「現時刻よりＩＳ学園教員は特殊任務行動へと移る。今日のテスト稼働は中止。
各班ＩＳを片付けて旅館に戻れ。連絡があるまで各自室内待機すること。以上だ！」
「え……？」

「ちゅ、中止？　なんで？　特殊任務行動って……」
「状況が全然わかんないんだけど……」
不測の事態に女子一同はざわざわ騒ぎ始める。
「とっとと戻れ！以後、許可無く室外に出たものは我々で身柄を拘束する！いいな！！」

「「「は、はいっ！」」」
千冬さんの一喝で全員が素早く片付けを始める。
「専用機持ちは全員集合しろ！織斑、オルコット、黒時、デュノア、ボーデヴィッヒ、凰
――それと、篠ノ之も来い」

「はい！」
「（専用機を手にして間もない箒を作戦に参加させるつもりなのか・・・？）」

正直、不安に駆られるが・・・千冬さんを信じてみよう・・・。
こうして、専用機持ち全員は教師について行った。

専用機　『紅椿』（後書き）

風邪をひいて頭がズキズキ・・・。（；・▽・）
けど、気合いで治した！

刹那クンのトラウマ（笑）はいつか出てくるでしょう（・ω・）b

感想、その他、待ってます～。

『特殊任務行動』　開始。

「では、現状を説明する」
旅館の一番奥に設けられた宴会用の大座敷・風花の間では、専用機持ち全員と教師陣が集っていた。
照明を落とした薄暗い室内に、ぼうっと大型の空中投影ディスプレイが浮かんでいる。
専用機持ちの面々が呼び出され、千冬さんが口にしたのは

「二時間前、ハワイ沖で試験稼働にあったアメリカ・イスラエル共同開発の第三世代型軍用ＩＳ『銀の福音（シルバリー・ゴスペル）』が制御下を離れて暴走。監視空域より離脱したとの報告が入った」
先程読み取った手話と同じ内容だ。一夏と箒を除く専用機持ちは厳しい顔持ちになっていた。

「その後、衛星による追跡の結果、福音はここから二キロ先の空域を通過することが分かった。
時間にして五十分後。学園上層部の通達により、我々がこれを対処することになった。
教員は学園の訓練機を使用して空域及び海域の封鎖を行う。よって本作戦の要は専用機持ちに担当してもらう」
軍用ＩＳ・・・普通のＩＳを遥かに凌駕する機動性、エネルギー量を備えている化け物だ。

そんな化け物を相手にするのだ。まぁ…俺の鐵も化け物じみたＩＳだけど…
「それでは作戦会議を始める。意見があるものは挙手するように」
「はい」

「目標ＩＳの詳細なスペックデータを要求します」

「わかった。ただし、これらは二ヵ国の最重要軍事機密だ。けして口外はするな。
情報が漏洩した場合、諸君には査問委員会による裁判と最低でも二年の監視がつけられる」

「了解しました」

俺達に『銀の福音』のスペックデータが出される。

「広域殲滅を目的とした特殊射撃型。……私のＩＳと同じく、オールレンジ攻撃を行えるようですわね」

「攻撃と機動の両立を特化した機体ね。厄介だわ。しかも、スペック上ではあたしの甲龍を
上回ってるから、向こうのほうが有利……」

「（銀の福音・・・あぁ、鐵のデータを元に作った機動性が高い機体だったか？
広範囲殲滅――この装備は未知数だな）」

「この特殊武装が曲者って感じはするね。ちょうど本国からリヴァイヴ用の防御パッケージが来てるけど、連続しての防御は難しい気がするよ」

「しかも、このデータでは格闘性能が未知数だ。持っているスキルもわからん。偵察は行えないのですか？」

皆が真剣に意見を交わしているが、一夏と箒は話に入っていない。

――やはり初めての緊急事態に頭が回らないのだろう。仕方のない事だ。

「無理だな。この機体は現在も超音速飛行を続けている。最高速度は二四五〇キロを超えるとある。
アプローチは一回が限界だろう」

「一回きりのチャンス……ということは、一撃必殺の攻撃力を持った機体で当たるしかありませんね」

山田先生の言葉に全員が一夏へと目を向ける。

「え……？」

「一夏、あんたの零落白夜で落とすのよ」

「それしかありませんわね。ただ、問題は――」

「どうやって一夏をそこまで運ぶか、だね。エネルギーは全部攻撃に使わないと難しいだろうから、移動をどうするか」

「しかも、目標に追いつける速度が出せるＩＳで無ければいけないな。超高感度ハイパーセンサーも必要だろう」

「一夏には超音速下での戦闘時間がないからな…痛い所だ」

「ちょっ、ちょっと待ってくれ！お、俺が行くのか！？」

「「「「「当然」」」」」

５人の声が見事に重なった。

「織斑、これは訓練ではない。実戦だ。もし覚悟が無いなら、無理強いはしない」

千冬さんにそう言われて、一夏の雰囲気が変わった。やる気を帯びた雰囲気へと。

「よし。それでは作戦の具体的な内容に入る。現在、この専用機持ちの中で

最高速度が出せる機体はどれだ？」

「それなら、わたくしのブルー・ティアーズが。ちょうどイギリスから強襲用高機動パッケージ

『ストライク・ガンナー』が送られてきていますし、超高感度ハイパーセンサーもついてます」
超音速下での戦闘訓練時間は二〇時間を超えている、とセシリアは付け加えた。
「ふむ…ならば――…ん？そう言えば黒時、お前の鐵の最高速度は――」

あ、千冬さんには鐵の最高速度を教えてるんだっけ。
「ええ。恐らく高機動パッケージを装備したブルー・ティアーズよりは速いかと」
俺とＩＳ戦闘をした事のある奴らは驚きの表情でこちらを見てくる。
「わ、わたくしのブルー・ティアーズより速いなど…どういう事なんですの？」

何せ、どの専用機持ちの奴にも鐵のトップスピードは見せた事が無いのだから。
「今までお前ら相手にトップスピードを出した覚えは無い。それだけだ」
「黒時、超音速下での戦闘訓練時間は？」
「セシリアの二〇時間よりは遥かに多いかと」

「そうか、それならば適任――」
だな、と言おうとしたであろう千冬さんを、急に明るい声が遮る。
「待った待ーった。せっちゃんの鐵はとっても速いけど、その作戦はちょっと待ったなんだよ～！」
声の発信源――天井。見上げると束の首が逆さに生えていた。

「……山田先生、室外への強制退去を」
「えっ！？はっ、はいっ。あの、篠ノ乃博士、とりあえず降りてきてください……」

「とうっ★」
くるりと空中一回転、着地。サーカスのピエロも顔負けな身のこなしだ。

「ちーちゃん、ちーちゃん。もっといい作戦が私の頭の中にナウ・プリンティング！」
「……出て行け」
「聞いて聞いて！ここは断・然！　紅椿の出番なんだよっ！」
「なに？」

「紅椿のスペックデータ見てみて！パッケージなんか無くても超高速機動ができるんだよ！」
束の言葉に応えるように数枚のディスプレイが千冬さんを囲むように現れる。
「紅椿の展開装甲を展開して、ほいほいほいっと。ホラ！　これでスピードはばっちり！」
何時の間にやらメインディスプレイも乗っ取ったらしく、説明が始まる。――が、

「（何故、束（コイツ）が福音を止める為に態々出しゃばってくるのか…コイツは興味が沸かなければ、とことん興味が無い筈なんだが…）」
俺は展開装甲の説明を聞く事より、束に対しての不信感が募る。

「ちなみに紅椿の展開装甲はより発展したタイプだから、攻撃・防御・機動と用途に応じて切り替えが可能。これぞ第四世代型の目標である即時万能対応機（リアルタイム・マルチロール・アクトレス）ってやつだね。
にゃはは、私が早くも作っちゃったよ。ぶいぶぃ」
説明を半分くらい聞いてなかった所に――第四世代の言葉。

・・・第四世代の登場、束が紅椿を作戦に進める事、なにかがありそうなので警戒を怠らないでおこう

――作戦の内容は一夏と箒による目標の追跡、及び迎撃を目的とされた。

作戦開始は三〇分後。

一夏と箒意外の専用機持ちは出る幕が無さそうだった・・・。

作戦結果・・・（前書き）

自分でもちょっと、う～ん…どーだろ、コレ？
って感じなので、最後の方が分かりにくいかな・・・。

作戦結果・・・

時刻は十一時半。
『銀の福音』の追跡及び、迎撃作戦開始時刻。
俺は作戦会議を行っていた大広間より抜けだし、個人通信（プライベート・チャネル）を開く。
『・・・楯無さん。今、大丈夫ですか？』

通信先の相手は楯無さん。
『刹那くん？えぇ大丈夫よ。何を聞きたいのかしら？福音の事はある程度調べたわよ』
流石、更識家・・・仕事がお早い事で。
『話が早くて助かります。聞きたいのは福音が暴走を開始した原因…ですかね？』

『二時間半前に連絡が入ったと思うけど突然暴走開始。暴走原因は不明よ』
『そうですか…。　操縦者ってナターシャ・ファイルスですよね？』
『ええ、その通りよ。資料を見る限り、優秀で問題を起こす様な操縦者ではないのね』
・・・・・これは、外部から何者かがハッキングが起こしたのだろう。

『そうですか・・・ありがとうございました。時間取っちゃって』
『いいのよ。何か新しい情報が入り次第、連絡するわね』
『ええ、お願いします。それじゃ失礼します』
楯無さんとの通信を切る。そして風花の間へと戻る。

―――――――――

大広間に戻る途中ふと、柵に腰掛ける束の姿を見かけたので静かに近寄る。
束のその手には携帯型ディスプレイ、その中には現在戦闘中の一夏と箒の映像が写されていた。
「んー。まだまだだなぁー。展開装甲の力はそんなモノじゃないんだけどなぁ」
独り言を言いつつ、一夏と箒…いや、箒と紅椿を見ているようだ。

「箒ちゃんなら、これくらいの敵なら簡単に倒せるハズなんだけどなぁー。
やっぱり、まだ稼働時間が少ないからかな?」
「例え紅椿が第四世代で、相手が第三世代だからって簡単に倒せる訳じゃないだろう?
そして福音の操縦者は軍人だ。それなりに苦戦はするさ」

ついつい束に話しかけていた。
「おや、せっちゃん。んー…そうだねぇ、敵さんがちょっと強すぎたかな?」
見誤ったかな。と束が呟いた気がする。
「…まさか、お前が福音の暴走を引き起こしたのか?」

「んー?それはどうだろうねぇー」
・・・・・話を逸らしたな。コイツが犯人の可能性が９９％になった・・・
「なんで福音を暴走させた?」
「私が犯人だと決まってないのに犯人扱いとは、せっちゃんは酷いなぁ」

「・・・例え話として聞け。妹にＩＳを渡したのは妹を華々しくデビューさせるつもりか?」

束は答えない。・・・別にいいか。ま、俺には関係ない事だと解釈する。

「ところで、せっちゃん」

「なんだ？」

「いっくんが危ないね。そろそろ白式のエネルギー切れの時間だよ」

そう言って俺に携帯端末の画面を見せつけてくる。

画面内に写る光景――

――――――――――

「一夏！私が動きを止める！」

「わかった！」

言うなり、箒は二刀流で突撃と斬撃を交互に繰り返す。しかも、腕部展開装甲が開き、

そこから発生したエネルギー刃が攻撃に合わせて自動で射出、福音を狙う。

「はあああっ！！」

箒の猛攻により、隙が出来た福音に一夏が突っ込む。

「Ｌａ……♪」

甲高いマシンボイス。福音のウィングスラスターに仕組まれた砲門が開いた。

数は――三十六。全方位に向けての一斉射撃。銀色の翼に装備された特殊武装だ。

「やるなっ……！だが、押し切る！！」

箒が光弾の雨を紙一重で躱し、迫撃する。――――隙が、出来た。

「！」

突然、何かを見つけたであろう一夏が福音と逆の方向へ向かった。
何をやってるんだ?今のはチャンスだっただろう。
「うおおおっ!!」
瞬時加速(イグニッション・ブースト)と零落白夜。その両方を最大出力で行い、
一発の光弾に追いついた一夏。そしてそれをかき消す。
「何をしている!?せっかくのチャンスに――」
「船がいるんだ!海上は先生たちが封鎖したはずなのに――ああくそっ、密漁船か!」
一発の光弾をかき消した後、《雪片弐型》の光刃が消え、装甲が閉じる。エネルギー切れだ。
今の行動により、最大のチャンスを失い、作戦の要が無くなった。
「馬鹿者!犯罪者などをかばって……。そんなやつらは――――!」
「箒!!」
「ッ――――!?」
「箒、そんな――そんな寂しいことは言うな。言うなよ。力を手にしたら、弱いヤツのことが見えなくなるなんて……どうしたんだよ、箒。らしくない。全然らしくないぜ」
「わ、私は、は……」
箒は明らかな動揺をその顔に浮かべ、それを隠すかのように手で覆う。
その時に落とした刀が空中で光の粒子へと消えた。
具現維持限界(リミット・ダウン)…。つまりエネルギー切れ。ここは実戦だ。
「箒ぃぃぃっ!!」
一夏は刀を捨て一直線に箒へと向かう。恐らく最後のエネルギー全てを使っての瞬時加速(イグニッション・ブースト)。

画面の奥では福音が再び一斉射撃モードへと入っていた。しかも、今度は箒に照準を絞っている。
エネルギー切れのＩＳアーマーは恐ろしくももろい。それは第四世代型とはいえ変わりないはずだ。
絶対防御分のエネルギーは確保していたとしても、あの連射攻撃を一度受けるのはアウトだ。
「ぐあああああっ！」

箒を庇う様に抱きしめた一夏の背に光弾が一斉に降り注ぐ。
「ぅ……ぁ……」
一夏の体は海へと落下していった。
ここで束は端末のディスプレイを閉じる。

束は特に焦った様でも、一夏を心配した様でも無い顔をしているが、俺は作戦会議室へと戻る。千冬さんからの指示を待たなくては。

――――――――――――――――

『作戦は失敗だ。以降、状況に変化があれば召集する。それまで各自現状待機しろ』
一夏と箒が海から引き上げられ、戻って来た所に千冬さんの言葉。
そして現在、一夏は堕とされて三時間以上目を覚ましていなかった。
教師陣は福音の捜索を行っているとの事だが、まだ見つかってはいない。

「作戦は失敗で、福音は捜索中。一夏は重傷。箒は敗北。これが待ち望んでた光景か？」
誰に言うでもなく、この事件を引き起こした犯人に尋ねてみたくな

った。

――――――――――

「……」

一夏の傍らに控えている箒は、もうずっとこうしてうな垂れている。

（私のせいだ・・・）

不意に思い出した思い出の中の一夏は笑っていた。けれど、今はその笑顔は無い。

（私が、しっかりとしないから、一夏がこんな目に――――！！）

ぎゅうっとスカートを握りしめる。自らを戒めるかのように、強く。ただただ強く。

バンッ！という音に一瞬驚いた箒だったが、その方向に視線を向ける気力はない。

「あのさあ」

話しかけてくる鈴に、けれど箒は答えない。答え、られない。

「一夏がこうなったのって、あんたのせいなんでしょ？」

「……」

「で、落ち込んでますってポーズ？――――っざけんじゃないわよ！」

突然烈火の如く怒りをあらわにした鈴は、うなだれたままだった箒の胸ぐらを掴んで無理矢理立たせる。

「やるべきことがあるでしょうが！今！戦わなくて、どうすんのよ！」

「わ、私……は、もうＩＳは……使わない……」

「ッ――――！！」

バシンッ！
頬を打たれ、支えを失った箒は床に倒れる
そんな箒を再度鈴は締め上げるように振り向かせた。
「甘ったれてんじゃないわよ……専用機持ちっつーのはね、そんな
ワガママが許されるような
立場じゃないのよ。それともアンタは――」

鈴の真っ直ぐな、怒りに似た、赤い感情を持つ瞳が、箒の瞳を直視する。
「戦うべきに戦えない臆病者か」
その言葉で箒の瞳、その奥底の闘志に火がついた。
「――ど……」

「どうしろと言うんだ！もう敵の居所もわからない！戦えるなら、私だって戦う！」
ようやく自分の意思で立ち上がった箒を見て、鈴は一息つく。
「やっとやる気になったわね。……あーあ、めんどくさかった」
「な、なに？」

「場所なら分かるわ。今ラウラが――」
「出たぞ。ここから三十キロ離れた沖合上空に目標を確認した。ステルスモードに入っていたが、
どうも光学迷彩は持っていないようだ。衛星による目視で発見したぞ」
「流石ドイツ軍特殊部隊。やるわね」

「ふん…。お前の方はどうなんだ。準備は出来ているのか」
「当然。甲龍の攻撃特化パッケージはインストール済みよ。シャルロットとセシリアの方こそどうなのよ」

「あぁ、それなら――」
「たった今完了しましたわ」

「僕も準備オッケーだよ。いつでもいける…けど」
「けどなによ？」
「刹那がこの作戦には参加しない…って言ってて」
「はあ！？なにフザけた事を言ってんのよアイツは！」

「僕も説得してみたんだけど絶対に行かないみたいなんだ…」
「はぁ！？ったく、参加しないなら、もういいわ。――――で、あんたはどうするの？」
シャルロット、セシリア、ラウラ、鈴の視線が箒へ向けられる。
「戦う…戦って、勝つ！　今度こそ、負けはしない！」

こうして、刹那を除く専用機持ち五人が『銀の福音』撃墜作戦会議を始めたのだった。

――――――――――

「・・・・・・」
俺は携帯端末を衛星とリンクさせ、福音の撃墜をしに行った五人の行動を見る。
だが、見ている…というよりは、眺めながら考え事をしていた。
福音と、その操縦者「ナターシャ・ファイルス」の事…。

福音と彼女（ナターシャ）は空を飛ぶ事が好きだ。
福音の事を『子』として扱っているのだ。
だが、このような事態を引き起こして、福音が堕とされたら…
空を飛ぶ為の翼は二度と戻ってこない事だろう。だがやらなければならない。

そんな相手を暴走に追いやった犯人の目的は恐らく――
「（ただ一人の妹の為に福音と彼女を犠牲に――いや、実験体にしたのか……）」
こんな壮大で馬鹿な話は正直、ウンザリする。
「（全ての原因の姉が演出、何も知らない妹の演じる茶番じゃねーか）」

だが例え馬鹿らしくても、必ず福音の暴走を止めなければならないのだ。
今止めなければ、操縦者の生命状態も危うくなってくる。
「はぁ・・・アレを使う羽目になったな」
俺は一息つき、外に出る。

そして鐵のデータを開く。
そこには――――
『Ｅｘｅｃｕｔｉｏｎ・ｍｅｃｈａｎｉｃａｌ・ｆａｉｌｕｒｅ』
唯一使用特殊能力（ワンオフアビリティー）の文字。

『強制執行機能停止（エクセキューションメカニカルフェアリアー）』

「俺がお前の『子』の翼を消す。・・・やらなければならない事なんだよ。でなけりゃ、
お前たちの暴走は止められない」
独断行動を先行して行った五人が発って時間はそこそこ経過した。
「早く終わらせるとしますか」

鐵を展開。福音のいる方向へ加速を始めた。

―――――

刹那が行動を起こす、少し前。

とある一室で眠っていた筈の一夏の姿が消えていたのはまだ誰も知らない・・・。

作戦結果・・・（後書き）

うむん。束さんのキャラおかしいかな？

刹那クンのワンオフアビリティ出ました！

その能力は次回に先送り～。

ちょっとgdってましたよね？

感想、その他、待ってます（p―・）

無断撃墜作戦――開始。（前書き）

刹那クンの登場場面――――
――――
――――
――
―
……無！

無断撃墜作戦――開始。

刹那が行動を開始する前――――
先行して行った専用機持ち五人の戦闘――――

「・・・・・・」
海上二〇〇メートル。
そこで静止していた銀の福音は、まるで胎児のような格好でうずくまっている。
膝を抱くように丸めた体を、守るように頭部から伸びた翼が包む。

――――？

不意に福音が顔を上げる。次の瞬間、超音速で飛来した砲弾が頭部を直撃、大爆発を起こす。
「初弾命中。続けて砲撃を行う！」
五キロ離れた場所に浮かんでいるＩＳ『シュヴァルツェア・レーゲン』とラウラは、
福音が反撃に移るよりも早く次弾を発射した。

砲撃を行った『シュヴァルツェア・レーゲン』は砲撃パッケージ『パンツァー・カノーニア』を装備している
（敵機接近まで……四〇〇〇……三〇〇〇――――くっ！予想よりも速い！）
あっという間に距離は一〇〇〇メートルを切り、福音がラウラへと迫る。
その間もずっと砲撃を行っているものの、福音は翼から放たれるエネルギー弾によって半数以上撃ち落としながらラウラへ接近していた。

機動力に特化した福音は三〇〇メートル地点からさらに急加速を行い、ラウラへと右手を伸ばす。
――避けられない！
しかし、ラウラはにやりと口元を歪めた。
「――セシリア！！」

伸ばした腕が突然上空から垂直に降りてきた機体によって弾かれる。
青一色の機体――強襲用高機動パッケージ『ストライク・ガンナー』を装備した、
ブルー・ティアーズによるステルスモードからの強襲だった。
『敵機Ｂを認識。排除行動へと移る』

「遅いよ」
セシリアの射撃を避ける福音を、真後ろから別の機体が襲う。
それは先刻の突撃時にセシリアの背中に乗っていた、ステルスモードのシャルロットだった
ショットガン二丁による近接射撃を背中に浴び、福音は姿勢を崩す。
けれどそれも一瞬のことで、すぐさま三機目の敵機に対して《銀の鐘（シルバー・ベル）》による反撃を開始した。
「おっと。悪いけど、この『ガーデン・カーテン』は、そのくらいじゃ落ちないよ」
リヴァイヴ専用防御パッケージは、実体シールドとエネルギーシールドの両方によって攻撃を防ぐ。
防御の間にシャルロットの『高速切替（ラピッド・スイッチ）』

加えて、セシリアの高速機動射撃、ラウラの砲撃により、福音はじわじわと消耗をはじめる。
『……優先順位を変更。現空域からの離脱を最優先に』

全方向にエネルギー弾を放った福音は、次の瞬間に全スラスターを開いて強行突破を計る。
「させるかぁっ！！」
海面が膨れあがり、爆ぜる。
飛び出してきたのは真紅の機体『紅椿』と、その背に乗る『甲龍』であった。
「離脱する前にたたき落とす！」
福音へと突撃する紅椿。その背から飛び降りた甲龍は機能増幅された衝撃砲を開き、放つ。
『！！』
肉薄していた紅椿が瞬時に離脱、その背後からの衝撃砲の弾雨が降り注ぐ。
「やりましたの！？」
「――まだよ！」
『《銀の鐘》最大稼働――開始』
両腕を左右いっぱいに広げ、さらに翼も自身から見て外側へと向ける。
――刹那、眩いほどの光が爆ぜ、エネルギー弾の一斉射撃がはじまった。
「くっ！！」
「箒！僕の後ろに！」
前回の失敗を踏まえて、紅椿は機能限定状態である。展開装甲の自動多用を防ぐため、
設定をし直したのだ。そう設定できたのは防御をシャルロットに任せられるからだ。
しかし、弾雨を防ぐ中、実体シールドが一枚、破壊される。

「ラウラ！セシリア！お願い！」
「お任せになって！」
後退するシャルロットと入れ替わりにラウラとセシリアがそれぞれ左右から射撃をはじめる。
「足が止まればこっちのもんよ！」

直下からの鈴の突撃。双天牙月による斬撃の後、至近距離からの衝撃砲を浴びせる。
――狙いは、福音の頭部のマルチスラスター《銀の鐘》
「もらったあああっ！」
エネルギー弾を全身に浴びながら、鈴の斬撃。かなりの消耗をしながら斬撃は福音の片翼を奪う。

「はっ、はっ……！どうよ――ぐっ！？」
片翼を失ってもまだ、姿勢を立て直し、鈴へと回し蹴りを叩き込み、海へと墜とす。
「鈴！おのれっ――！！」
箒は両の手に刀を持ち、福音へ斬りかかる。刃は福音の右肩へと喰い込んだ。

（獲った――！）と確信した所、信じられない事に左右両方の刃を手のひらで握りしめる。
「なっ！？」
刀身から放出されるエネルギーに装甲が焼き切れるが、構わず福音は両腕を最大まで広げる。
刀に引っ張られ、無防備の箒に片翼だけ残った砲口を向ける。

「箒！武器を捨てて緊急回避をしろ！」
しかし、箒は武器を手放さない。

（……ここで引いて、何のための……何のための力かっ！！）
エネルギー弾が触れる寸前に、ぐるんと紅椿は一回転をする。
その瞬間、爪先の展開装甲が箒の意志に答えるように開き、エネルギー刃を発生させる。
「たあああああっ！！」
かかと落としのような格好でエネルギー刃の斬撃が決まる
ついに両方の翼を失った福音は、崩れるように海面へと墜ちていった。

「はっ、はぁっ、はぁっ……！」
「無事か！？」
珍しくラウラの慌てた声を聞きながら、箒は乱れた呼吸をゆっくりと落ち着けていく。
「私は……大丈夫だ。それより福音は――」

「私たちの勝ちだ」と誰かが言おうとしたその瞬間、海面が強烈な光の珠によって吹き飛んだ。
「！？」
球状に蒸発した海は、そこだけが時間の流れの無いような空間に青い雷を纏った福音がいる。
「これは……！？一体、何が起きているんだ……？」

「！？まずい！これは――『第二形態移行（セカンド・シフト）』だ！」
ラウラが叫んだ瞬間、まるでその声に反応したかのように福音が顔を向ける。
無機質なバイザーに覆われた顔からは何の表情も読み取れない。けれど、
そこに確かな敵意を感じて、各ＩＳは操縦者へと警鐘を鳴らす。

しかし――遅かった。
『キアアアアアア……！！』
まるで獣の咆哮のような声を発し、福音はラウラへと飛び掛かる。
「なにっ！？」
あまりの速さにその動きに反応できず、ラウラは脚を掴まれる。
そして、切断された頭部から、ゆっくり、ゆっくりと、まるで蝶がサナギから孵（かえ）るかのようにエネルギーの翼が生えた。
「ラウラを離せぇっ！」
シャルロットはすぐさま武器を切り替えて近接ブレードによる突撃を行う。
けれど、その刃は空いた方の手で受け止められてしまった。
「よせ！　逃げろ！　こいつは――」
その言葉は最後まで続かず、ラウラはその眩いほどの輝きと美しさを合わせ持った
エネルギーの翼に抱かれ、エネルギー弾を零距離で喰らい、海へと墜ちた。
「ラウラ！　よくもっ……！」
ブレードを捨て、シャルロットはショットガンを呼び出す（コール）。福音の顔面へと銃口を当て、引き金を引いた。
ドンッ！
しかし、その爆音はショットガンのものではなかった。
胸部から、腹部から、背部から、装甲がまるで卵の殻のようにひび割れ、小型のエネルギー翼が生えてくる。それによるエネルギー弾の迎撃がショットガンを吹き飛ばし、シャルロットの体も吹き飛ばした。

「な、何ですの!?　この性能……軍用とはいえ、あまりに異常な――」

再び高機動による射撃を行おうとしていたセシリアの、その眼前に福音が迫る。

『瞬時加速（イグニッション・ブースト）』――それも、両手両足の計四ヶ所同時着火による爆発加速だった。

「くっ!?」

長大な銃は接近に弱い。距離を置いて銃口を向けるが砲身を真横に蹴られてしまう。

そして、次の瞬間には両翼からの一斉射撃。セシリアは蒼海のへと沈められた。

「私の仲間を――よくも!」

急加速によって接近した箒は、続けざまに斬撃を放ち続ける。

「うぉおおおっ!」

互いに回避と攻撃を繰り返しながらの格闘戦。徐々に出力を上げていく紅椿に、わずかに福音が押され始める。

（いける!　これならっ――）

必殺の確信を持って、雨月の打突を放つ。しかし――

キュゥゥゥン……。

「なっ!また、エネルギー切れだと!?――ぐあっ!」

その隙を見逃さず、福音の右腕が箒の首を捕まえる。

そして、ゆっくりとその翼が箒を包み込んでいった。

（すまない。一夏……!）

絶望的な状況の箒に、白が近づいていた。
その白は雪羅という守る為の力を纏いながら――

無断撃墜作戦――開始。（後書き）

原作の一部を書いただけになりますた・・・。

福音撃墜作戦――終了。（前書き）

前々回の内容を変えました。
この話を書いてると「あれ?どーしよ…」
と、悩んだのです・・・

まずは前々回の最後を見直してから――
――
――
どうぞっ

福音撃墜作戦――終了。

「ぐっ、うっ……！」

ぎりぎりと締め上げられ、圧迫された箒の喉から苦しげな声が漏れる。

福音の手は硬く箒の首を掴んで離さない。

さらにはエネルギー状へと進化した『銀の鐘』が紅椿の全身を包んでいた。

（これまでか……。情けない……）

ぽうっと光の翼が輝きを増していく。一斉射撃への秒読みが始まる中、

箒の頭の中にはただ一つのことだけが浮かんでいた。

――会いたい。

――一夏に、会いたい。

――すぐに会いたい。今会いたい。

――ああ、ああ、会いたい。

「いち、か…」

「一夏…」

さらに輝きを増す翼に、箒は覚悟を決めてまぶたを閉じる。

ィィィィンッ……！！

『！？』

突然、福音は箒を掴んでいた手を離す。

いきなりの出来ごとに混乱している箒が、瞳を空けた時に見たのは

強力な荷電粒子砲による狙撃を受けて吹き飛ぶ福音の姿だった。

（な、何が起きて――）

戸惑う箒のっ身に届いたのは、さっきからずっと願い思って止まない声だった。

「俺の仲間は、誰一人としてやらせねぇ！」

箒の潤んだ視界に写るのは――

白式第二形態・雪羅を纏った一夏であった。

――――――――――

「（？　新しい反応…？福音と先に行った五人以外で誰がＩＳを――）」

ＩＳのコア・ネットワーク情報によって位置情報を確認している刹那の鐵に、

新しいＩＳ反応が出現する。このＩＳは――

「（一夏!?なんで動ける?あんな重傷でどうやって…）」

白式が福音のいる位置に達したみたいで、恐らく戦闘が始まったと予測できる。

「（・・・ちょっと急ぐか）」

何故、一夏が動けるのか、今はいい。

無理をして戦闘に参加するなら、それをサポートしてやらなければ。

――――――――――

「逃がさねえ！」

一メートル以上に伸びたクローが福音の装甲を斬る。シールドエネルギーに阻まれはしたが、

その一撃は確実に福音を捉えていた。

『敵機の情報を更新。攻撃レベルＡで対処する』

エネルギー翼を大きく広げ、さらに胴体から生えた翼を伸ばす
そして次の回避の後、福音の掃射反撃がはじまった。
一夏は避けようとはせず、左手を構えて前へと飛ぶ。
――雪羅、シールドモードへ切り替え。相殺防御開始。

キンッ！　という甲高い音を鳴らして、左腕の雪羅が変化。
光の膜が広がって、福音の弾雨を打ち消していく。
光の膜――つまり、零落白夜のシールドだ。
「うおおおっ！」

強化された白式は大型四機のスラスター―は二段階瞬時加速（ダブル・イグニッション）を可能とする。
これで福音のスピードに十分追いつける。
『状況変化。最大攻撃力を使用する』
福音の機械音声が告げると、回転しながら翼の砲口が全て開き、全方位への弾雨を降らせる。

全方位・・・それはダメージを負った仲間達にも被害が及ぶという事。
仲間の盾に走ろうとする一夏に
「何やってんのよ！あたしたちは腐っても代表候補生よ？余計な心配してないで、
さっさと片付けちゃいなさいよ！！」

「鈴……わかった！」
一夏は仲間を信じ、雪片と雪羅、それぞれから光刃を作り、福音へと向かって言った。

――――――――――

（私は、ともに戦いたい。あの背中を守りたい！）

強く、強く願う箒。

そして、その願いに応えるように、紅椿の展開装甲から赤い光に混じって黄金の粒子が溢れ出す。

「これは……？」

ハイパーセンサーからの情報で、機体のエネルギーが急激に回復していくのが分かる。

――『絢爛舞踏』、発動。展開装甲とのエネルギーバイパス構築……完了。

項目に書かれているのはワンオフ・アビリティーの文字だった。

（まだ、戦えるのだな？　ならば――）

一夏から渡されたリボンで髪を縛り、気を引き締める箒。

（ならば、行くぞ！　紅椿！）

赤い光に黄金の輝きを得た真紅の機体は、夕暮の空を裂くように駆けた。

――――――――――――

「ぜらあああっ！！」

白式の零落白夜の光刃がエネルギー翼を断つ。

しかし、両方の翼を斬るのは至難の業で、またしても二撃目を回避されてしまう

そうしている間に失った翼は再度構築されて、こちらへと強力無比な連続射撃を行ってきた。

――――エネルギー残量二〇％

予測稼働時間、三分。

（くそっ！このままじゃ……）
「一夏！」
「箒！？お前、ダメージは――」
「大丈夫だ！それよりも、これを受け取れ！」
「な、何だ……？　エネルギーが――回復！？箒、これは――」
「今は考えるな！行くぞ、一夏！」
「お、おう！」
「うおおおっ！」
福音への横薙ぎ。回避して光弾を発射する準備をする事は想定済みだ。
「箒！」
「任せろ！」
白式に向けられた翼を紅椿の斬撃で断ち切る。
そして、追い打ちの回し蹴り。
体勢を崩した福音へ突き進む一夏。
「おおおおおっ！」
――――――
「『強制執行機能停止（エクセキューションメカニカルフェアリアー）』…発動」
黒月の刀身が割れ、その中から蒼黒い雷を纏ったエネルギー刃が具現する。
刹那は目標の福音と、今まさに福音に突き進む一夏を見つけた。
「ん？これは――俺が出る必要は無さそうか？」
零落白夜の刃を福音の胴に突き立てている所を見ると刹那の出番は――――

体勢を崩していた福音がエネルギー翼を使い強引に一夏の腕を払う。
「なっ！？」
驚愕した一夏、その体勢は無防備。そこへ福音が翼を向ける。

「ちぃいっ！！」
『瞬時加速（イグニッション・ブースト）』。刹那は福音に突撃する。
放たれた光弾を打ち消し、黒月の光刃でエネルギー翼を断ち切る。
『！？　敵機より未知のエネルギー攻撃。右エネルギー翼再生不能』

「刹那！？助かっ――」
「いいから、福音を止めるぞ！片翼はもう再生しない。俺がもう片翼を消す」
その後は、お前がトドメを刺せ。と付け加え、福音へと向かう。
「お、おう！」

福音は片翼でもバランスを崩さない。体を丸め、全方位攻撃の準備に移行する。
「させねえよ！」
一気に肉薄し、唯一使用能力（エクセキューションメカニカルフェアリアー）――通称エクセキューション――の光刃で福音の残った翼を切る。・・・これで、福音は二度と飛べない。

「一夏っ！今だ！」
「ああ！」
零落白夜の刃を腰に構え、福音に突き立てる。
「おおおおっ！！！」

飛べなくなった福音の抵抗だろう、動ける限界の状態で一夏の首へ手を伸ばす。
その指先が喉笛まで辿り着くギリギリで、銀のＩＳは完全に動きを

止めた。
ＩＳアーマーが消え、操縦者のナターシャが海へと墜ちる…が海面に触れる直前、
鈴がナターシャを拾った。・・・

周りにいた仲間たちと目線を交わし合い、頷く。
これで『銀の福音』撃墜作戦は終了。

「…終わったな」
誰かの一言が終わりを告げた。

福音撃墜作戦――終了。（後書き）

次回（恐らくかなり短いであろう話）で三巻内容は終わります。
色々ｇｄった感がハンパ無いですが、ね…。ｂ

感想、その他、待ってます（・３・）

ところで、ミリリットルって漢字で書けたんですね！
《竕》って書くらしいですよ～。
唐突に何言ってんだ？俺は・・・

36話（前書き）

前回、言った通り短めですねー。
では、どーぞー。

36話

「作戦完了――と言いたいところだが、お前達は独自行動により重大な違反を犯した。
帰ったらすぐ反省文の提出と懲罰用のトレーニングを用意してやる」
「・・・・はい」
戦士たちの帰還…それはそれは冷たいものだった。帰って直ぐに正座。三十分は経った。

「特に黒時、お前は先に行った五人を止めようとしなかったのでプラスで罰を与えるからな」
・・・・・理不尽。いや…妥当、か。
「あ、あの、織斑先生。もうそろそろそのへんで……。け、怪我人もいますし、ね？」
「ふん……」

怒り心頭の千冬さんに対して、山田先生はおろおろわたわたとしている。
さっきから救急箱を持ってきたり、水分補給パックを持ってきたりと忙しい。
「じゃ、じゃあ、一度休憩してから診断しましょうか。ちゃんと服を脱いで全員見せてくださいね。
――あっ！　だ、男女別ですよ！　分かってますか、織斑くん、黒時君！」

俺、今、変態扱いされた気がする・・・。
「それじゃ、皆さんまずは水分補給をしてください。夏はそのあたりも意識しないと、
急に気分が悪くなりますよ」

先生からドリンクを受け取り、口に含む。

「……」

「どうかしたんですか？織斑先生」

一夏をじーっと見ていた千冬さんに声をかけた。

「……しかしまぁ、よくやった。全員、よく無事に帰ってきたな」

千冬さんなりに心配をしてくれていたのだろう。照れ隠しだろう、後ろを向いて顔を逸らした。

あ、さっさと部屋出とこう。女子の診断があるんだ。

早めに部屋を出る。

「「「「さっさと出てけ！」」」」

後ろから大きな声が聞こえ、一夏が慌てて出てくる。

「ははっ」

俺は楽しく笑っていた。

――――――

「んー、ん～。」

月明かりの下、何かの鼻歌混じりに岬の柵に束はいた。

「・・・どうだった、今回の事件の犯人さん？良い結果は取れたか？」

突然、背後から声をかけられる。声の主は――

「やあ、せっちゃん」

刹那だった。

「ん～？犯人は束さんで決定なのかな？」

「いや？誰も事件を起こした張本人が束（おまえ）だなんて言ってないぞ」

「そっか～。まぁ私が犯人かは分からないけど、良い結果は取れたんじゃないかな？」

「どこかの誰かが作った機体（紅椿）のデータか？」

「さぁねぇ？それは　せっちゃんの御想像にお任せ♪」

「はいはい。・・・てか今日の昼に言い忘れてたが、せっちゃん言うな」

「え～？あんなに髪が長くて女の子みたいだったら、せっちゃんでしょ？」

「だからその事を思い出すから止めろって言ってんの」

・・・幼い頃、ＩＳ適合者になった俺は束（コイツ）に会った。

女性だけでなく、男でもＩＳを動かせる事が出来る。と束に俺を紹介――

いや、実験材料の提供をした奴に連れらて。

最初、束は少し興味が沸いたらしく、俺に会いに来たのだが…

如何せん、俺の顔立ちと髪型――かなりの長髪――のせいで

『え～男の子じゃなくて、女の子だよー？』

と、言われたのだ。『女の子なら――はい、これ！』

束に手渡されたのはフリフリヒラヒラスカートの女物の服だった。

…女装、という事だ。

その頃は特に意識をしていなかったが、

歳を重ねるにつれ（俺が実験体としての生活を止め、普通の男子として生き始めて）

昔、何とも思っていなかった行為がトンデモなく恥な行為だと知った。

そこまでならまだいい？馬鹿を言うな。
束は『この服は男の子が着る服なんだよ～』と、俺を騙し、女物の服を渡してきた。
俺を玩具にしてやがったんだ・・・。

「まぁ、せっちゃんって呼び方が慣れてるから変えれないけどねー」
「・・・・・・・・」
だから、だから俺は『せっちゃん』と呼ばれると、昔を思い出す。
何の躊躇いも無く、女物の服を着る――女装――をしていた自分をっ――！

「・・・はぁ・・・・」
深い深い溜息を吐き、束に向く。
「んじゃーな、束。また会う時があったら呼び方を変えといてくれ」
「それは無理かなぁー。ん、じゃあね、せっちゃん。」

それ以上は言葉を交わさず、俺は旅館へと戻って行った。

――――――――――――

翌日。臨海学校最終日。
ＩＳ及び、専用装備の撤収を十時くらいに終え、今はクラス別にバスへと乗り込んでいる。
『『『『はい、どうぞ！』』』』という大きな声が聞こた。
バスの前にいる一夏が何かやったんだろう。

そう思い、ふと、窓の外へ視線を向ける。そこには千冬さんと福音（ナターシャ）の操縦者がいた。
なにか会話をしているみたいだが、声は聞こえない。

2人の会話が終わり、千冬さんがバスに戻ってくる。
その顔を見る限り、案の定、いい話ではなさそうだ。

まだ外にいたナターシャと目が合ったので窓越しに軍用手話で
『悪かったな。福音の事』
『いいえ。あの子を止める為には仕方なかったことだもの』彼女も
手話で返してくる。
『…そうか。今回の事件の犯人を追うのは構わないが、暫くは大人
しくしておけよ?』

『ええ。キミに言われなくても分かっているわよ。』
『OK。なら――』
『ええ。それじゃ――』
『『また、いつか』』

バスが動き出す。
俺は先程までの張り詰めた空気を消し、気分を入れ替える。
「よしっ」
そろそろ夏休みに入る。

夏休みに何をするか、今のうちから考えとこう。

――――――
――――――
――――――
――――――
――――
――

お昼ご飯の為に寄ったサービスエリアで千冬さんから、
学園に帰ったら『お話』と書いて、『武術組手』と読む地獄の宣告

をされたのだった・・・。

36話（後書き）

もうちょっと、刹那クンのトラウマ《笑》を上手く表現したかった…。
文才が欲しいですなぁー。

次回からＮＡＴＵＹＡＳＵＭＩですよっ！

感想、その他、待ってます（・▽・）ｙ

Ｌｅｔ、ｓ帰宅＆訪問者１（前書き）

ｇっっっｄｇｄのｇｄｇｄになってますね・・・

Ｌｅｔ、ｓ帰宅&訪問者１

「暑い・・・」
俺は自室にてクーラーを眺める。・・・うん、壊れたらしい。何でか知らないけども・・・
教室で涼もうとしても授業が無いので――
「暇だ」ついでに暑すぎる

あ～・・・学生の大半が帰省してるし…俺も家に帰ろうかな？
「っと、まぁそんなことよりっ」
体を起こして学食に昼飯を喰いに行こう。
ガチャリ。

「あら、刹那くん。どこに行くの？」
「おや楯無さん。お昼を食べに行く所です。一緒にどうです？」
「そうね。ご一緒させて貰うわ」
楯無さんと昼食をとる事になった。

――――――

「ねえ刹那くん」
「はい？」
今日の日替わり定食を頬張っていると話を掛けられた。
「刹那くんは夏休み、帰省するの？」

「あー…そうですねー。クーラーが壊れてる部屋で過ごすのはキツいですからね…」
ちなみに職員室へクーラーの故障を伝えに行き、帰ってきた言葉が――

『ふむ・・・我慢しろ。貴様以外にも故障届を出しに来た奴が多くてな』
――である。誰が言ったかって？千冬（鬼さん）だよ千冬（鬼）さん。

「・・・よし、明日から家に帰るとします」
一刻も早く快適温度の空間で過ごしたいからな。
「ふーん…。私も明日から実家に戻るのよ」
「そうなんですかー。何日くらい帰省を？」

「まだ分からないわね。一学期はかなり事件が多かったから、その調査や報告をしないと」
「大変ですね」
「そうねー」
こんな会話をしながら翌日、俺と楯無さんは各々の実家に帰省したのだった。

――――――――――――――――

「ふぅー・・・」
俺は自室でクーラーの風を受けながら呟く。
ここは自室。だが――
ピーンポーン

家の玄関のベルが鳴る。
ここはＩＳ学園ではない。
そう、ここは『黒時』の表札が掲げられた我が家だ。
さてさてー。誰かがインターホンを押したらしい。

「どちら様ですかー？」
玄関はマイク付きのドアホンだ。訪問者を確認する為に受話器を取る。
新聞屋か？それとも郵便かな？まぁセールスとかなら即刻、帰ってもらうが――
「はい、どちら様で――

「はーい、刹那く――

ガチャンッッ！（受話器を思いっ切り叩きつける音）

「ふぅ…」
大丈夫。そう、大丈夫。
楯無さんは今日、実家に帰ってる筈だ。
今、ここに、いる、筈が、無いッ！

今一度、カメラを確認。
よし、誰もいない。幻覚と幻聴だったんだ。
そうと分かればアイスでも食べにキッチンへ――
「兄さん、誰か来たようですよ？」

「ん？あぁ…誰もいなかったぞ。誰かがピンポンダッシュでもした

んだろ」
妹が二階から降りてきて、声をかけてくる。
「そうですか。でも一応、確認くらいはしておきます」
そう言って、玄関へ向かって行った妹。

誰もいなかったんだ。無駄足だ――
「おや？お客様ですよ？兄さん」
「客？俺は誰も呼んでない」
「ですが、兄さんを知ってるみたいです」

むむむ？誰だ？誰も呼んだ覚えは無い。ついでに誰にも俺の家の住所を教えてもいない。
「あー…」
誰だろうか？と考えつつ（現実逃避中）玄関に向かい、ドアを開ける。
そこには――

「はーい、刹那くん」

・・・・・・・・・・・・

ガチャン。誰・も・い・な・か・っ・た
「刹那くーん、何で閉めるのー？」
あれぇ？楯無さん、今日は実家に帰るんじゃ？
あぁ…やっぱり幻覚幻聴だな。うん。さっさと部屋に戻って寝るとしよう。

玄関にいたであろう、幻の楯無さんを放っておいて階段を上がる。
寝て、起きたら幻聴覚は消えるんだー。

（現実逃避中）

ガチャリ。
「兄さんのお知り合いの方でしたか。兄が失礼をしました。どうぞこちらへ」

「いえいえ、お邪魔します」
妹が勝手に玄関を開けて楯無さんを家に上げやがった。
「何やってんだテメェはぁぁぁ！」
「いえ…ここで家に上げなければイロイロと話が続かない気がしたので」

「ワケの解らん電波を受信すんな」
「失礼ですね。私は機械ではありません」
「そんな意味で言ってねえよ…」
と、まぁ、玄関先でキョトンとしておられる？楯無さんに

「ところで楯無さんは帰省されたんじゃ？」
「実は数日前に帰宅してたのよ」
「はぁ？」
「で、帰ってきたら暇だったから刹那くんの家にでも遊びに行こうかなーって」

と、いう事らしい。
「別に構いませんけど…特に何もする事ありませんよ？家（ウチ）」

うーん・・・。娯楽道具の一つくらいは探せばあるかもだが、如何せん何も無い気がする。
「困りました。我が家には一通りの家電製品くらいしかないですね」

「確かに何も無いよな…って、挨拶したっけ？お前（妹）」
「あぁ、いえ。すみません。自己紹介がまだでしたね、私はコイツ（刹那）の妹です」
「兄をコイツ呼ばわりすんな」
「更識　楯無よ。学園では刹那くんと同室なの。よろしく黒時　――」

「妹です」
「いや、えっと名前の方は」
「妹です」
「適当に呼べって事ですよ楯無さん」

断じて黒時　妹などという名ではない。
「そう、じゃあよろしくね妹さん」
「はい。よろしくされましょう楯無さん」
・・・何というか、家に楯無さんが来た。

Ｌｅｔ、ｓ帰宅&訪問者１（後書き）

妹さん登場。
楯無さん来訪。
話がグダってる・・・。

えっと…頭の中では話は纏ってるんですが、
それを文章にするのが難しいっ！
頭の中では妄そ――――妄想が爆発してるんですが・・・。

次回からはグダらせない様にします（；Ｔ―Ｔ）

38話（前書き）

どーして…こーなった？

38話

「ふぅー…ご馳走様でした」
楯無さんが両手を合わせて合掌。相変わらず礼儀正しい。
「お粗末さまでした」
俺と妹は合わせて合掌。礼儀正しいのは良いことだ。

「まさか刹那くんがこれ程までに美味しい料理を作れるなんてね～」
お昼ご飯が未だだったので俺と楯無さんと妹を含む3人で食事をしたのだった。
「ですよね。刹那(コイツ)は私よりも料理上手なんですよ」
「コイツ言うな。てか、お前の料理なんて暗黒物質しか見た事ねえ」

そんなこんなで食事を終えたのだった。

「さて、一体何をしましょうか」
楯無さんに希望を取ってみる。
「ん～…特に何かしたいってワケじゃなくて、ただ　ゆっくりしたいのよ」
「なら俺の家(ウチ)じゃなくても出来たんじゃ・・・？」

じーーー・・。楯無さんと妹がジト目で見つめてくる。なんだ？
「はぁ…乙女心は全く理解してないですもんね兄さん(おまえ)」
「これ程までに鈍感にされると　おねーさんショックだなぁ」
非難を浴びている気がするが・・・何を言ってる？

「そーだ」

楯無さんが急に何かを思い付いた様に口を開く。
「刹那くんのお部屋、見せてもらってもいいかしら？」
「俺の部屋？構いませんけど…行って何するんです？」
「いいからいいから♪」
楯無さんに引っ張られながら俺の部屋へと向かった。

――――――――――――――――――――

「これはまた…」
俺の部屋に到着した途端、楯無さんはドアを開き、中を見渡す。
「特に面白いものなんてありませんってば」
何せ、俺の部屋は――――
机・ベッド・クローゼット・本棚（ＩＳ学園に入る前に渡された分厚い本とその他数冊のみ）
白い壁紙。窓が二つ。それが広い部屋の隅っこに集結しているだけだ。
「おじゃましまーす」
楯無さんが言うなり、入室。イロイロと物色を開始する。

「ふむふむ」
「何故に俺の机の中を見るんです」
「ん～えっちな本は無いかなーって」
「持ってません」何を見に来たんだこの人は…。

ぶー。とか言いながら次はクローゼットへ向かう。
「兄さん余裕ですね。普通は女子が自分の部屋に来ると隠すモノがあったりなかったり？」
「無いもんは無い」
「ちっ…あ、楯無さーん、兄（コイツ）さんのエロ本は机の中にカバーでカムフラージュしてますよ」

「持ってないって言ってるのに、何で嘘を教える！？」
「あーあー聞ーこーえーなーいー。ノリですよーノリー」
コイツ殴りてぇ・・・
「刹那くん」

「あ、はい？」
「クローゼットの中身だけど」
特に変なモノは無いはず。あるのは私服くらいだぞ？
「なんで全部の服が黒色オンリーなの？」

「え？何か問題でも？」
色なんて別にいいじゃないか。何と無くですよ。
「問題でも？って、…ああ、確かに寮でも黒い服しか見た事無かったわね。
他の色の服は無いの？」

黒色以外の服？そんな物は――
「ありませんね。ええ、全く」
「刹那くん、後で服を買いに行きましょう」
え、いや別にいいですよ。と告げる前に

「決まりね」
決定された。私服なんて休日以外、特に着る事あんまりないのに…。

ピンポーン

ドアホンが鳴った。『宅配便でーす』何が来たのだろうか？
「すみませんが兄さん、行って来てください」
楯無さんはまだ俺の部屋でイロイロ見て回ってるからその間に行けばいいと思い、
お客を放っておいて、玄関へと降りる。

――――――――――

「うーん…刹那くんってばホントに何も持ってないわねえ（えっちな本とか）」
私は刹那くんの部屋にあった本棚を探り終え、彼に話しかける。
「兄さんなら郵便物の受け取りに行きましたよ楯無さん」
刹那くんの妹さんが教えてくれる。

「あら。気付かなかったわ」
「そうなんですか？貴女ほどの実力の持ち主が気付かないなんて」
突如、妹さんを纏う空気が変わった。そして、声のトーンを少し落として言う、
「更識　楯無。更識家当主。ＩＳ学園生徒会長。そんな貴女が兄さんに何の用で来たんですか？」

「……私、更識家の当主なんて一言も言ってないわよ？」
「そこは気にしたら負けです。色々な意味で」
・・・この子…何者？
「ああ、すみません。そう身構えないでください。少し聞きたい事があるだけです」

「…聞きたい事？」
一応、向こう（妹さん）は普通の態度に戻ったけど、私は警戒をしておく。
「ええ、兄さんと接触する理由は何ですか？男性ＩＳ操縦者としての興味？
それとも裏の人間である兄さんの監視？それとも好意？その答えが聞きたいだけです」

「それだけ？」
「ええ」
間も無く頷く妹さん。
・・・・・正直、答えるのは恥ずかしいんだけど。

ここは答えておこう。
自分の気持ちをハッキリさせる為にも。

――――――――

「すみませんね、ちょっとばかし量が多くて…！」
「ちょっとってレベルじゃないですけどねっ！」
郵便配達員の人と大きな大きな段ボール箱を一緒に抱える。
中身？妹がネット通販で購入した本――数にして何百冊を超える――だ。

ったく…なんでこんなに購入するんだ。本の内容は全く知らんが、勉学方面では無いと思われる。

しばらく、この荷物を運ばないといけないので部屋に戻るのは遅くなりそうだ。

―――――――――――――

「最初はただ単に興味が沸いて刹那くんに近づいたわ」

そう。最初は興味本位で接触してみただけ。なんだけど

「でもだんだんと刹那くんを見てたら最初の興味と違う興味が沸いてきたの」

「違う興味？それは何でしょう」

・・・なんで妹さんにこんな事言わないといけないのだろうと思うけど…。

「私は刹那くんが自分の意思で何かをしている、って事があんまり無いと思ってるの」

彼は必要最低限（生活面などに置いて）な事以外は特に何をするでもなく、

何もせずに過ごしているだけだ。

「自分が何をしたいのか、自分自身を分かってないような感じなのよね」

「そうですね。その通りですよ。…成程、そこまで気付いてるんで

すか・・・」
そう言って妹さんは脚立を持って来て刹那くんの部屋の天井を開けた。
「どうぞ」
妹さんが私に天井裏から取り出した本を数冊手渡してくる。
一体何の本なのだろうかとタイトルを見た。
「これって…」
「ええ。ご覧のとおりです」
タイトルを見る。全て同じ本ではなかったけど、書いてある事はどれも似たような物だった。
『人間とは』『自分自身を見つめる』『今、自分が何をしたいのか』
そのような言葉が数多く見られた。
「兄さんは昔、《兵器》としか己の事を思っていませんでした。けれど今は《人》として生きています
《人》として生きるとは何かを考えています。人として生きる…そんなモノは誰にだって
分かりはしません。どんな生き方をしても人は人なんです」
そう、その通りだ。例えどんな無様で救いようの無い人生を歩んでいても、人に変わりわないのだ。
「けど、刹那くんはその答え(人とは何か)を見つけようとしている」
「はい。全く…無意味で馬鹿らしいですよ。
それで?大きく話が逸れましたが、楯無さんが兄さんと接しているワケは何でしょう?」
「そうね…――――――

「ぜぇ…はぁっ！…はっ！はっ！…」
「お、お疲れ…さま…でし…た…」配達員は去って行った・・・。
配達員の人とダンボールを運んでいると、ダンボール箱は一箱だけでなく、
数十箱くらい運ばれてきていた。中身は知らん。でも薄くて高い本だとヤツは言っていた。

つーか…アイツ…こんなに本を買っても全部読めねえと思うぞ、この冊数…。
家には使ってない部屋があるけども、こんな量の本、何処に置くんだ…？
そして残り一箱を運ぶ時に気付いたが…鐵を展開して運べば楽だったのに・・・。
気付かなかった自分が憎い。

さて、結構時間かかったけども部屋に戻るか――
ガチャリ。玄関のドアが開き、楯無さんと妹が出てくる。
「楯無さん、コイツの事、面倒見てやってくださいね」
「ええ、任せてちょうだい」

2人はニコニコ笑顔で家から出てきた。何か楽しい事でもあったのだろうか？
「と、いう事なので兄さん。楯無さんと買いものでも行ってきてください」
「は？」
「それじゃ刹那くん、一緒にお買い物に行きましょ♪」

「はぁ？」
「さっき言ったでしょ。ほら、早く行きましょ」
「はぁ…分かりました…」
楯無さんに引き摺られて出掛ける事になってしまった。

38話（後書き）

・・・・・・・・まぁ…次回からは、ね？

正直、こんな展開になるとは自分でも予想していなかった…。

＼（ ゜ロ＼）ドーシテコーナッター（／ロ ゜）／

とある喫茶店にて（前書き）

久し振りの投稿ですっ！
どんな話にするかを考えた結果、この話になりました。

では、どうぞっ！

とある喫茶店にて

楯無さんと出掛けている時・・・。

――――――――

偶々通り掛かった店（確か名前は@クルーズだったっけ？）に二人で入って休憩中。

「それにしても楯無さん」

「？」

「買い過ぎでしょう・・・」

「あら？　刹那くんが『適当に選べばいいですよね服なんて』とか言うから私が選んであげたのに」

「それもそうですけど。そっちじゃなくて、楯無さんの服ですよ」

俺の服だけでなく、楯無さんまで服を買いだした。

「そんなに何着も買ってどうするんですか？」

「女の子なんだから可愛い服を着てみたいのよ」

「？・・・俺にはよくわかりませんね」

服なんて着れればいい。機能性があればいいのではないかと思うけどなぁ。

「っと、まぁ…何か注文しましょう・・・すみませーん」

店員さんを呼ぶ間に期間限定のパフェ（二五〇〇円）を二つ食べようか三つ食べようかを考えておく。

「楯無さんは何頼みます？　俺は期間限定パフェを三つほど頼みますけど」

「…糖分の取り過ぎじゃないかしら？　私はアイスコーヒーでも頼

むわ」
ちょっとお手洗いに行ってくるわね、と席を立つ楯無さん。

ふむ。ってか、糖分の取り過ぎ？・・・これくらい普通じゃないか？
「ご注文はお決まりでしょうか？　お客…さ、ま？」
「はい、期間限定のパフェを三つ。後、アイスコーヒーを一つ。以上で…す？」
・・・おかしいな。この店にはシャルロット似の美少年《執事服Ｖｅｒ》でもいるのだろうか？

「いやいやいやいやいや。シャルロット？」
ビクゥッ！っと怯えた様に肩を震わせる店員。（シャルロット？）
「な、なにを仰られるのでしょうか？ぼ、僕はシャルロットなんて名前ではありません」
「・・・（挙動不審過ぎるだろ）。ふむふむ。ま、いいや」

「何がいいのかしら？」
店員の背後から声が掛かる。（シャルロット？）
「あぁ楯無さん。いや、俺のクラスのシャルロットに凄い似てる奴が、ほらここに」
「シャルロットちゃん？　ああ、あの？」

どれどれ？とシャルロットの顔を覗き込む楯無さん。
「確かにソックリね」
「あ、あの…僕はシャルロットって名前じゃないです。きっと人違いなんじゃ……」
「らしいですよ楯無さん？」

「と、いうより…どちら様でしょう？」
俺じゃなくて楯無さんの方に言ってるんだろうと思うけど。

「知る必要は無いですよね？シャルロットじゃないんでしょう？貴方は」
「そ、その通りですけど…」

「そうだ。シャルロット似の美少年がいるってクラスの皆に伝えてみるか」
「そうね。私もシャルルくん似の美少年がいるってクラスの皆に――」
「わぁぁあああ！　待って！　待って刹那！」
携帯電話を取り出した俺と楯無さんの手を押さえるシャルロット（確定）

「で、ここで何やってんの？」
「ちょっとお昼に@（ここ）クルーズの人に頼まれて…。それに僕だけじゃないよ、ラウラも…ほら」
辺りを見渡すとメイド服姿のラウラもいた。

「刹那こそ何やってるの？　こちらの方は？」
「買い物だ。それとこの人は――」
「私の名前は更識　楯無。ＩＳ学園の生徒会長よ。よろしくねシャルロットちゃん」
「あ、はい。僕はシャルロット・デュノアです。よろしくお願いします更識先輩」

「つーかシャルロット、注文頼む」
「あ、うん。期間限定パフェ三つ、アイスコーヒー一つだよね。それじゃあ待ってて」
カウンターに向かって行った。
「まさかシャルロットにラウラがいるとは」

「なかなか可愛らしい二人ね。でもなんでシャルロットちゃんは執事服なのかしら？」
「ラウラはメイド服なのにシャルロットは執事服…なんででしょうね？」
少しばかり楯無さんと雑談をしているとメイド服のラウラがトレーを持ってきた。
「よおラウラ。一夏でも呼んでくればよかったか？」

「なっ！？　や、やめろ！　この様なフリフリヒラヒラな姿を見せるわけには！」
「冗談だ。だからトレーを静に置け。パフェが崩れる」
「くっ！　……というより、コイツは誰だ？」
「一応先輩なんだからコイツって言うなよ…この人は――」

「私は更識　楯無。ＩＳ学園の生徒会長よ。よろしくねラウラちゃん」
「ラウラ・・・ちゃん？」
何故かラウラが、ちゃん付けで呼ばれた事で？不思議な顔をしている。
何故だろうかね？　知ったこっちゃないけども。

ともあれ、頼んだ物も来た事だし、頂くとしよう。
トレーを持ってきたラウラは仕事に戻って行った。
少しばかりシャルロットとラウラの仕事振りを見させてもらおうかね。
シャルロットは――――――――

「お待たせいたしました。紅茶のお客様は？」
「は、はい」
「お砂糖とミルクはお入れになりますか？　よろしければ、こちら

で入れさせていただきます」
「お、お願いします。　え、ええと、砂糖とミルク、たっぷりで」

「わ、私もそれでっ」
・・・なんつーか。客の態度がおかしい気がする。
お次にラウラは――――――――
「ねえ、可愛いね。　名前教えてよ」

「・・・・・・」
「あのさ、お店何時に終わるの？　一緒に遊びに――」
ダンッ！　とテーブルへと垂直に半ば叩き付けられたコップが大きな音と共に滴を散らかす。
「水だ。　飲め」

「こ、個性的だね。　もっと君の事をよく知りたくなっ――」
台詞の途中でオーダーも取らず、ラウラはテーブルを離れる。
そしてカウンターに着くなり何かを告げ、少しして出されたドリンクを持って行った。
「飲め」

先程よりは多少優しめに（多分、ソーサーが割れるからだと思うが）カップをテーブルに置く。
多少優しく置いても、中身は遠慮無くこぼれた。
「え、えっと、コーヒーを頼んだ覚えは…」
「何だ。　客で無いのなら出て行け」

「そ、そうじゃなくて、他のメニューも見たい訳でさ…例えばモカとかキリマンとか――」
「はっ。　貴様ら凡夫に違いが分かるとでも？」
「いや、その……すみません……」

ラウラの絶対零度の視線に男たちは小さくなりながらコーヒーをすすった。

「飲んだら出て行け。邪魔だ」

「はい…」

・・・接客業ってなんだっけ……。

ラウラの接客態度を見ていると疑問が浮かぶ。

など。

ラウラが担当したテーブルからは――

「あ、あの子、超いい…」

「罵られたいっ、見下ろされたいっ、差別されたいぃっ！」

シャルロットが担当したテーブルからは――

「あ、あのっ、追加の注文いいですか!?　出来ればさっきの金髪執事さんで！」

「こっちにも美少年執事さんを一つ！」

などなど。

・・・・・・

「…楯無さん」

「なにかしら？」

「@(ここ)クルーズって　どんな店でしたっけ？」

「喫茶店だった気がするわよ」

正確にはメイド&執事喫茶だった気がするが…。

どっかの変態共が集まる店じゃなかったよな？

と、まぁそれは置いて。楯無さんと雑談を小一時間程度。

そろそろ休憩を終えて、店を出ようとする時、事件は起こった。

「全員、動くんじゃねえ！」
ドアを破る様に雪崩れ込んできたきた男が三人、怒号を発する。
一瞬、何が起こったのか理解できなかった店内の全員が、次の瞬間の銃声により悲鳴が上がった。

「きゃあああああっ！？」
「騒ぐんじゃねえ！　静かにしろ！」
男たちの恰好は――顔に覆面、手には銃、バッグには紙幣が何枚か飛び出していた。
「（見るからに強盗だな）」

店内の誰もが男たちの格好にぽかんとしたが、そこはそれ。
銃を持つ凶悪犯の言う事は聞かない訳にはいかない。
『あー、犯人一味に告ぐ。君達は既に包囲されている。大人しく投降しなさい。繰り返す――』
窓から見える店外にライオットシールド装備の警官達が見える。

中々に警察の対応は迅速だ。
「……なんか」
「……警察の対応も」
「……古……」

数名の客がそう呟いた。
「ど、どうしましょう兄貴！　このままじゃ、俺たち全員――」
「うろたえるんじゃねえ！　焦る事はねえ。こっちには人質がいるんだ。
強引な真似は出来ねえさ」

リーダー格であろう体格の良い男がそう告げると、後の二人も自信をつけ始める。

「へ、へへ、そうですよね。俺たちには高い金払って手に入れたコイツがあるし」
ジャキッ！　と音を立てショットガンのポンプアクションを行う。
そしてその瞬間、威嚇射撃を天井に向け撃つ。

「きゃあああっ！！」
蛍光灯が破裂し、パニックになった女性客が耳を塞ぐ。
「大人しくしてな！　俺達の言う事を聞けば殺しはしねえよ。わかったか？」
女性は顔面蒼白になって何度も何度も頷く。

「おい、聞こえるか警官ども！　人質を安全に解放したかったら車を用意しろ！
勿論、追跡車や発信器なんかつけるんじゃねぇぞ！」
威勢よく言い、警官隊に向かって発砲する。
幸いパトカーのフロントガラスが割れたようなので怪我人は無いが、野次馬がパニクっただろう。

「へへ、ヤツら大騒ぎしてますよ」
「平和な国ほど犯罪はしやすいって話、本当ッスね！」
「まったくだ」
暴力的な笑みを浮かべる男達。

（はぁ…どうします楯無さん？）
（まずは状況を冷静に分析することね）
俺と楯無さんは小声で話す。
一人はショットガン、一人はサブマシンガン、一人はハンドガン。

（見た所武器はそれだけですけど、他にも隠し持っているかもぉっ！？）

「・・・・・・」
店内で強盗意外に立っていたのはラウラ。
銀髪に眼帯、そして美少女とくれば誰の目にも止まってしまうだろう。

（アイツは一体何考えてるんだよ…）
正直マジで驚いた。何やってんだ?と。何か考えがあっての行動なんだろうが。
男達三人の内、リーダーがラウラにメニューを持ってこいと言った。
カウンターに行き、取って来たのは氷が満載の水だった。

「……なんだ、これは?」
「水だ」
「いや、あの、メニューを欲しいんスけど…」
「黙れ。飲め。――飲めるものならな」

ラウラは突然トレーをひっくり返す。当然、氷水が宙に舞うが、
それらを回転するような動作で掴み――弾いた。
氷の指弾。それをトリガーから離れていた人差し指に。
突然の出来事に反応できず、瞼に、眉間に、喉に、一瞬で当てる。

そして犯人の怒号より早く、男の懐に膝蹴りを叩き込む。
「ッざけやがって! このガキ!」
リーダーがハンドガンを放つがラウラには当たらない。
ソファを、テーブルを、観葉植物を、イロイロな物を楯にして店内を駆ける。

「あ、兄貴っ!? こ、こいつッ――」
「うろたえるな! ガキ一人、すぐに片付けて――」
「――一人じゃないんだよねぇ、残念ながら」

リーダーの背後から迫る男装の美少女シャルロット。
「なっ！？　このっ――」
「あ、執事服で良かったかな。うん。思いっきり足上げても平気だし」
そう口にしながらシャルロットはリーダーの拳銃を手ごと蹴り上げる。
その後は振り上げた足がショットガン男の肩へ。
ゴギンッという音がして男の腕は力なく垂れた。
「（流石、ＩＳ専用機持ち。『ありとあらゆる事態』を想定して訓練済みだからお手の物だな）」
「目標2、制圧完了。――ラウラ、そっちは？」
いつの間にか下っ端のもう一人を倒していたラウラが
「問題無い。目標3、制圧完了」

意識及び行動力の喪失（つまりは気絶）を確認して、リーダーへ目標を向ける。
「ふっ、ふざけるなぁぁっ！　お、俺がっ、こんなガキどもにっ……！」
ハンドガンを構え、ラウラに標準を向けた。
だが身を捻って初弾をかわした。そして足元にあったトレーを踏み付け――
トレーに乗っていた『物体（黒く鈍く光る物）』――つまり拳銃（ハンドガン）を旬中に投げる。
それを手に収めて、リーダーの眉間へ突き付ける。
「遅い。死ね」
「えっ。ラウラ、待っ――」

ガツンッ！と銃弾で無く、グリップを額に叩き込まれ、男（リーダー）はその場に倒れて伏せた。
「全制圧、完了」
「…はぁ。一瞬びっくりしたじゃない…」
「ったく…まったくだ。いきなり二人揃って飛び出すんじゃねえよ」

「まあ、終わったんだからいいじゃない」
楯無さん…確かにそうですけどね。
ラウラなら撃ちかねない。と内心は思ったんだ。
しーん、と静まり返る店内。

「お、終わった…？」
「助かったの、私たち…」
「い、一体何が…」
危機を脱した事は理解できたようだが、まだ状況の把握が出来ていないようだ。

「お、俺達助かったんだ！」
「やった！　ありがとう！　メイドさんに執事さん、ありがとう！」
状況把握ができた人達が声を上げる。
騒がしくなった店内の様子に気付いた警官隊が詰めかけてくる。

「ふむ、日本の警察は優秀だな」
「つーかお前ら、代表候補生で専用機持ちなんだから公になるのは避けなくていいのか？」
「…それもそうだな。このあたりで失敬するとしよう」
警察の張った立ち入り禁止のロープを乗り越えるマスコミ関係者が目に入った所で一変。

「捕まってムショ暮らしになるくらいなら、いっそ全部吹き飛ばしてやらあっ！」
気絶したと思われたリーダーが立ちあがり、革ジャンを左右に広げる。
そこにあったのは、軽く四〇平方mは吹き飛びそうなプラスチック爆弾の腹巻。
起爆装置はリーダーの手の内にある。

「わー…」
「最後まで古～…」
そんな言葉を漏らしたのは誰だか知らんが、すぐさま店内は先刻以上のパニックに。しかし――
「あきらめが悪いな。…さっきはお前らの出番だったから今度は俺達かな？」

俺は「楯無さん！」と叫ぶと
「了解！」
そう返された。連携って素晴らしい。つーか以心伝心か？
床に転がっていた銃二丁を軽く蹴り上げ、手に収める。

ダダダダダンッッ！
五連×２の連射で爆薬の信管と起爆装置、そして導線『だけ』を撃ち抜く。
そして俺はリーダーへ向けてダッシュ。
楯無さんの動きに合わせて――

「「ＴＨＥ・ＥＮＤ」」
俺は二丁の銃を男の眉間と喉へ突き付ける。
楯無さんは持っていた扇子の紙の部分で男の頸動脈を押さえる。
「まだやるのかしら？」

「やるならアンタの顔面を吹き飛ばそうか？」
「す、すみっ、すみませんっ！　も、もうしまっ、もうしませんっ。い、命ばかりはっ！」
無様な敗北宣言を聞く事無く、俺と楯無さん、シャルロットとラウラは颯爽と立ち去ったのだった。

とある喫茶店にて（後書き）

いやー…久し振りに適合者の更新です。
これからは更新スピードを上げて行こうと思います。
ではっ＼（。ロ＼）

～～～～
／，・ω・）

４０話（前書き）

後半がｇｄってますね…。

40話

夕方。　強盗事件から二時間くらいが経過した。

「あー……」

やってしまった。…やってしまった。

先程の店『@クルーズ』でパフェを…パフェを喰い損ねた。

糖分だ。糖分が欲しい。

パフェが食えなかったのはあの強盗共のせいだっけ…？

…今から留置所に乗り込んで強盗共（ヤツら）、叩きのめしてやろうか…。

「……やっぱメンドーだからいいや…」

「何が面倒なの？」

楯無さんだ。

「ええ…強盗共を血祭りにあげようと思ったんですけどね。やっぱりやめました」

「刹那くんには何の被害も無かったでしょう？」

「大アリですよ…甘い物が食べたかったのに…」

「二五〇〇円もするパフェを三つも頼んでいたわね」

「値段は特に関係ありませんよ。　問題なのは糖分です糖分」

値段なんて特に気にしない。だって――

「そもそも俺は金ならある程度持ってますしね」

ほら。と、俺の財布を楯無さんに見せてみる。

「かの有名な諭吉さんが数十人もいるわね。どうしてこんなに持ってるのかしら？」

「昔、研究所とかで過ごしてる時とかに入った金があってですね」

身体を弄られていた頃に、研究者たちは俺に『実験体料』として金を払っていたんだ。

（ＩＳ適合の為に）

その時に払われた金が半端無い金額だったので使いきる事無く、銀行に預けている。

「…そう。　ちなみにどれくらい持ってるの？」

「財布の中は――十四万で。銀行の預金は――えっと……確か一億…ちょいですかね」

「高校生が持つ金額ではないわね」

そうなのか。一般の高校生はどれ位持っているのか分からないんだけど。

「それはいいとして、刹那くん。向こうの公園に行ってみましょう？」

「公園ですか？」

「そう。城址公園。元はお城だった場所よ」

へえ。面白そうなので、楯無さんと一緒に公園へ向かう。

と、なんだ？　さっきから後ろを付いて来るヤツがいるんだが…。数は三人。コソコソ隠れるように俺達の後ろをつけてくる。（ＩＳのハイパーセンサーで確認した）

つーか、足音も消せていない。気配も消せていない。

追跡の仕方が素人すぎて簡単に気付いたぞ。

（楯無さん。後ろの三人、知り合いですか？）

（違うわ。私たちに何か用事でもあるんじゃないのかしら？）

（なら――――）

立ち止り振り向く。そして

「何か用でもあるのか？　隠れてるお前ら。ストーカー行為は楽しいか？」

声をかけると三人の男達が木の影から出てきた。

「ちっ！　バレてやがったのか。　ま、別に関係無いけどな」

「用事っつーか。ちょっとお前の持ってる物が欲しくてな」

「持ってる物？なんだ？俺が何を持ってるって？」

「ふひひ。しらばっくれてんじゃねえよ。テメェの持ってる金が目当てなんだけどよぉ」

「あらカツアゲかしら。刹那くんも大変ね」

ホントだよ。何で俺が標的（ターゲット）なんだっつーの。

「あとそこのカノジョにも用があるんだけどな！」

「俺達とちょっと遊ぼうぜ。楽しい所に連れてってやるからさぁ」

「おや楯無さん、お誘いですよ」

「残念ながらお誘いは断らせて貰うわ」

あーあ。現れた三人（バカ共）、拒否られちゃったな。

「まずはテメェだ。テメェの持ってる財布――金を渡してもらおうか」

「さっき財布の中身を偶然見ちゃってなぁ」

「ちょっとばかし俺達に恵んでくれよ」

最初から俺からカツアゲする気だったな。コイツら。

「どうするのかしら刹那くん？」

「俺は今、さっきから溜まってた苛々を発散させたい所でしたし…」

「そんなに甘い物が食べたかったのね…」

「ええ…だからちょっと…ストレス発散（ヤってしまい）しましょうか」

「あ〝ァ！？」
「さっきからテメェらで話してんじゃねえぞコラ！」
「さっさと金を渡せばいいんだよ！」
自己中乙。

ヤっちまえ！
そんな声が聞こえた瞬間、三人（バカ）は俺目掛けて殴り掛かってくる。
「まずは一人目」
突っ込んでくる先頭（トップ）。隙だらけだ。

ゴッ！
腹部に一撃。続いて強張った身体全体にドガッ！
脇腹に回し蹴り。　おお！クリティカルヒットだったと思うぞ、今の一撃。

「――――！」
声も出せずに気絶（堕ち）する一人目。
「なっ！？　て、テメェ！」
懐から刃渡りが長いナイフを取り出す二人目。

「おいおい、銃刀法違反じゃねえの？」
別に俺には関係ないけどさ。ナイフまで出して金を求めるなよ。
こんなことするより働けって…。
バシッ！――ドゴッ！

ナイフを持つ手を払い、左の拳を顔面へと放つ。
「二人目終了――次は……」
最後の三人目を見ると、楯無さんが柔術で腕を捻り上げていた。
「なっ！？　って！・・・痛たたたたっ！！」

「近寄らないでもらえるかしら？　目付きがいやらしいわよ」
ゴキュ！
と、三人目の男の肩からそんな音がした。
「ぎゃあああああああ、ぐぎゃあああああああ！！！」

・・・恐らく脱臼した筈だ。
つーかなぁ……
「てい」
「って痛ぁっ！？」

ぎゃあぎゃあ　と煩かったのでビンタをかましておく。
「…これ以上続けたいか？」
「い、いやっ！いい！もういい！悪かった！」
「よし。　全く…、他人から金を捕ろうなんて思うな。働けバカ」

「は、はいぃぃ！」
残った三人目は気絶する二人を引きずりながら去って行った。
「怪我とかないですか？」
「ええ、心配してくれて　ありがとう。全然大丈夫よ」

「ですよねー」
昼過ぎの強盗共といい、さっきの三人といい…
相手が悪すぎたにも程があるな。国家代表に候補生二人が相手とか。
話にならない。
「それよりも、刹那くん」

「はい？」
「甘い物が食べたいなら――アレを食べましょう」
公園の中はクレープ屋があり、その店を指指す楯無さん。

「クレープ屋？　何でクレープなんです？」

「あら、嫌だったかしら？」

「いえいえ。嫌じゃないですよ？　是非食べましょう」

バン車を改造した移動型店舗であるクレープ屋へと向かう。

「すみません、クレープを二つくださいな。ミックスベリーで」

そう言うと、お店の主であろう二十代後半の男性が、無精ヒゲにバンダナという風体でありながら人懐っこい顔で頭を下げてくる。

つーか楯無さん、何故にミックスベリー？　別に美味しそうだからいいけど。

「あぁー、ごめんなさい。今日、ミックスベリーは終わっちゃったんですよ」

「あら。そうなんですか。残念ね…。刹那くん、別のにする？」

「え？　・・・あ、そうですね。ならイチゴとブドウを注文しますね」

二つ、お願いしますと付け加える。そして料金も全額払う。

「刹那くん、わたし、自分の分は自分で払うわよ？」

「構いませんよ。奢りってやつですって」

しばらくして出来たてのクレープがやってくる。

「楯無さんはどっちがいいですか？」

「ならイチゴを貰うわね」

俺達は店から離れたベンチに並んで腰かけて出来たて（クレープ）をかじる。

「はむっ。んー…ｇｏｏｄ。　美味しいですね、これ」

「はむはむ。――ん。とっても美味しいわね」

楯無さんがミックスベリーが欲しかったみたいだけど、イチゴ味のクレープを食べて笑顔になっている

「はい、楯無さん。どうぞ」
俺のクレープ《ブドウ》を差し出す。
「えっ？　ど、どうしたの刹那くん。急に差し出されても」
「はい？　えっと、コレ美味しいですよ？だから楯無さんにも」

「え、あ、えっと…い、いただきます」
妙に落ち着きの無い楯無さんが　あーんとクレープを食べる。
「た、確かに美味しいわね」
「これで目的の味が食べれましたね」

「え、え？」
「あの店にはミックスベリー味なんてメニューにありませんでしたよね」
「え、そうなの？」
「はい。厨房の奥も見てみましたけど、それらしい色のソースは無かったですし」

「よく見てるのね」
「初めてクレープ屋に入ったから興味が沸きましてね」
結構新鮮な作りだったなーあのバン車。
「という事で、ミックスベリーが食べれましたよ？」

「？」
「俺のクレープって何味でしたっけ？」
「確かブドウ味――ああ。ストロベリーとブルーベリー、ね」
ピンポン。正解です。

「って…刹那くん。ブルーベリーはブドウじゃないわよ？」
「ゑ・・・マジですか？・・・まぁ、ブドウみたいなものですって」

美味しかったからそんなこと関係無いけども。

――――――――――

まさか…まさか　刹那くんが自分の食べている分を差し出してくるとは思わなかった。
「（そして男の子の刹那くんの方が女の子(わたし)の感性より…女の子らしい）」
ちょっとばかりヘコむわね・・・。
い、今思えば…か、間接キス…しちゃったのよね。

刹那くんは特に気にする事――いや、彼の態度からして全く気付いて無いのだろうけど。
なんだか私だけが恥かしい思いをした様で　何とも言えない感じね・・・。

――――――――――

そろそろ俺と楯無さんのクレープも無くなる頃だ。
さっきから楯無さんが黙々と食べているから、何だか話しかけ辛い。
隣に座る楯無さんを見つめてみる。
「（んー…――――）」

小さい口で　ちょこちょこクレープを食べる姿はとても可愛らしい。
あ、目が合った。
「ど、どうしたの？　刹那くん」

「へ？　いや、なにも？」

「そ、そう？」

「ええ。ただクレープ食べてる楯無さんを見てただけですよ」

「！？……あ～…う～…」

何で唸った様な声を出すんですか。そして何でそっぽを向くんですか。

まさか、も一つ食べたいなぁ…。って思ってたり？

「・・・今、刹那くんが考えてる事は多分違うわよ？」

「むむむ。失礼しました」

違ったらしい。ってか読心されたよ久し振りに。何で出来るの？読心。

そんな事を考えていると、

「刹那くん」

名前を呼ばれ、楯無さんの方へ振り向く。

「もぐっ？」

口の中に広がるイチゴ味。どうやら楯無さんが食べていたクレープを俺の口に捻じ込んだらしい。

「もぐっ！　もふふ、ふふふん（ちょ！　いきなり何するんですか）」

「こ、これで刹那くんもミックスベリーが食べられたわよ？」

「もふぉぉ。――――おお、確かにその通りですね」

クレープを飲み込む。うん、美味しかった。

「ご馳走様でした」

手を合わせて合掌。礼儀って大切だぞ？

「じゃ、じゃあ刹那くん。私はこの辺で学園に帰るわね」

「いきなりですね。学園までご一緒しましょうか？」
「ううん。大丈夫よ、ありがとう」
「そうですか。なら気を付けて帰ってくださいね」
俺が言うが早いか、楯無さんは少し足早に去って行った。

…？何か急ぎの用事でもあったのかな？
そんな事を考えつつ、俺は楯無さんが見えなってから家への帰路へと付いた。

４０話（後書き）

多少…いや、かなり強引に楯無さんのキャラを弄った気がするなぁ…。

次回は楯無以外の原作キャラ達との夏休みです。

感想、その他、待ってます（・□・）ｙ

41話（前書き）

今回の話・・・原作をちょっと弄った程度です。

41話

「暇…ヒマ…ひま…」
俺こと黒時　刹那は只今絶賛、暇である。
って、意味の解らない事を考える位、暇だ。
IS(ガッコー)学園に戻ろうかとか考えていると――

pipipi!!!
携帯の着信音だ。
「もすもす？　終日(ひねもす)～？」
今のは束(アイツ)が使ってるネタだった気がする。

『なんだ今の…？　って、おっす刹那』
「お、一夏か。どーした？　遂に夏の暑さで頭がヤられたか？」
『とっても失礼だろ　お前』
冗談。ジョークだって。

「で？何か用か？」
『ああ、今いつものメンバーが俺ん家に来てるんだ。刹那も来ないか？』
いつもの――箒にセシリアに鈴にシャルロットにラウラの五人か。
「行く行く。今ちょうど暇してたんだ」

『OK。じゃあ待ってるからなー』
「はいよ。何か持っていく物あるか？」
『特に無いと思うぞ？』
「了～解。じゃあ数分したら行く」

『あいよ』

ブツッ！――ツー、ツー、ツー…。
電話を切り、出掛ける準備。
夏休みに入る前に知った事だが、一夏の家と俺の家は結構近い距離にあるみたいなのだ。

歩いて数分で着いてしまう距離だ。
机の上に置いてあった《鐵》の待機状態であるネックレス（唯一の武装、黒月のミニチュアサイズ）を首にかけ、携帯と財布をポケットに入れる。
よし、これで準備完了。

夏の日差しを浴びながら一夏の家へと向かった。

目的地へ到着。目標（一夏）を呼び出そう。

ピーンポーン。ピーンポーン。ピンポンピンポンピンポン・・・
「うるせえよ！？　聞こえてるって！」
あ、一夏が出てきた。
「来たぞー。ほれ土産のアイスだ。お前の分だけレンジで温めたぞ」
言いながらここに来る途中にコンビニで買った人数分のアイスを渡す。
「温める必要無いだろ！？　アイス溶けただろ絶対！」
「溶けただろうな。ここに来る道中が暑かったからな。ノリでやった」
「いい迷惑だよ！」

「落ち着け落ち着け。冗談だ冗談。ちゃんと全員分用意してるから」
「サンキュ。なんか…お前のせいでかなり疲れた」
そうか。こっちはかなり楽しませてもらった。
「それじゃ、入ってくれよ」

一夏の後に続き、家の中へと踏み入れる。
「ｈｅｌｌｏ～」
リビングに着き、先にいたメンバーに挨拶をする。
すると直ぐに挨拶を返された。

「さて、刹那も来た事だし、この後どうする？」
おい。何をするか決めて無かったのかよ・・・。
「今までお昼ご飯を食べてたんだよ」
キッチンから出てきたシャルロット。一夏の手伝いでもしてたのかな？

「ふーん。で？これから何するんだ？」
「うちはあんまり皆で遊べるものとか無いぞ」
「まー、そういうだろうと思って、あたしが用意してきてあげたわよ。はい」
そう言った鈴が広げた紙袋には、トランプや花札。モノポリーに人生ゲーム、

その他様々なカードゲームやボードゲームが溢れていた。
「じゃあ、これで遊ぶとするか。みんなは希望とかあるか？」
一夏に言われ、俺達も紙袋を覗き込む。
「あら、日本のゲーム意外にもありますのね」

「あ、これやったことある。材木買うゲームだよね」
「ほう、これが日本の絵札遊びか。なかなかにミヤビだな。

今度、帰国する時には部隊に土産として買って行くとしよう」
「私は将棋がいいのだが、あれはふたりでしかできないしな」
「ふむふむ、なるほど。どれも知らないモノばっかりだ」

皆で何をするかで盛り上がる。
「じゃ、全員でやれそうなやつから行くか」
そう言った一夏が取り出したのは、バルバロッサという名のゲームだった。
バルバロッサ？第二次世界大戦のナチス・ドイツの奇襲攻撃作戦か？

「ほう、我がドイツのゲームだな」
ドイツ国旗を見たラウラが腕組みをしながら少し嬉しそうにする。
「それで、これはどういうゲームなの？」
「このカラー粘土で何かを作って当てていくゲームよ。質問とかしていいわけ」

「え？　それでは、作る人間の技量に左右されるのではなくて？」
「そんな事はないわよ。寧ろ逆。上手く作り過ぎると、すぐに正解されてポイント入んないから。
適度にわからないくらいがいいわけ」
「んん？　と言う事はつまり、下手過ぎるとやはり不利なのではないか？」

「いや、質問次第なんだよ。答えに当たりを付けて、質問で埋めていけば大丈夫だ。
どっちかって言うと、造形どうこうより上手く質問する方がこのゲームの鍵だぞ」
よく解らなかったけど、要するに
『何か作って、質問に応えて当ててもらえばＯＫ』って事か？

経験者の一夏と鈴が最初に説明役に回り、ゲームが始まった。
・・・・・・・
何か、この粘土で作ればいいんだよな？
何を作ろうかを考えていると、自分の首元に視線が向いた。　あ、これにしよう。

「できたっ」
「それじゃ、スタートね」
シャルロットからサイコロを振り、ゲーム開始。
「えーと、一、二、三、と」

「あ、宝石を得ましたわ」
「私は…質問マスか。よし、ではラウラの粘土に質問するぞ」
「受けて立とう」
「因みに回答は『はい』『いいえ』『わからない』よ。
『いいえ』を出されるまで質問は出来るから、最初は大分類で始めるとお得ね」

鈴の説明を聞いた箒がラウラの粘土を見る。
その粘土は『ゴゴゴ…』と静かな威圧を放つ円錐状の何かで、見当が付かない。
俺以外だけじゃなく、ラウラ以外の全員が『あれは何だ？』と思っている筈。
「それは地上にあるものか？」

「うむ」
「よし…。では、それは人間より大きいか？」
「そうだ」
ふむ。なら、道具の類じゃないんだな。

「それは都会にあるものか？」
「どちらともいえないな。あると言えばあるが、ないと言えばない」
え？　どーゆ事？それって東京タワーじゃなかったのか。
「人間の作ったものか？」

「ＮＯだ」
質問終了。ここで箒はこのまま回答できるが――
「そうだな。外しても失点は無い様だし、答えよう」
正式なルールでは答えは紙に書いて制作者に渡すのだが、今回はお試しと言う事でルール変更。

「じゃ、答えをどうぞ」
「油田だ！」
「違う」
膝を地面に付き、うな垂れる箒だったが　俺達は全員『なぜ油田？』といった表情だ。

そんなこんなでゲームは進んでいく。あ、因みにラウラの作ったのは『山』らしい。
「次は俺が質問される側か」
「そうよ。回答はさっき言った通りだからね」
質問者は一夏。回答者は俺という番だ。

「刹那のソレは…ＩＳか？」
「ｙｅｓ…つーか何故分かったんだよ」
俺は自分のＩＳ《鐵》を粘土で作ったのだ。バレないようにテキトーに作った筈なんだけど。
「…答え言っていいか？」

なんだと？　一夏め、もう分かっただと？そんなバカな――

「じゃあ答えは？」
「刹那のＩＳ《鐵》だ」
「あれ？なんで分かったんだ？」

「そりゃ、見たらわかるって」
「どこからどう見ても鐵にソックリだよ」
「アンタはさっきの話聞いてたの？直ぐに答えが分かられない様に作るのよ？」
「・・・めっちゃくちゃ、テキトーに作った筈なんだけどなぁ」

まだ翼の部分とか、非固定遊部位（アンクロユニット）の翼も作って無いのに。
俺の順番が終わり、次々に質問＆回答が始まる。
セシリアの作った造形物は『原初細胞体』や『藻』、『ボロ布』などの答えが出たが、
「我が祖国、イギリスですわ！」

と、言われた時には全員が沈黙した。
何度か俺の順番になって、『打鉄』や『ラファール・リヴァイブ』などを作った。
俺自身は解られない様にテキトーに作ったのだが、ことごとく即正解される。
ＩＳから離れようと頭を回転さえ、何を作ろうか考える。

「（あ、そーいや　この家（ここ）って千冬さんも住んでるんだっけな……そうだ！）」
素早く手を動かし、造形する。
「できた」
「「「「「・・・・・・」」」」」

何で皆して黙るんだよ。今回のは難しいぞ？

「じゃあ、あたしが質問ね。それはかなり恐ろしいわよね？」
ん？　もう答えに気付いたのか？
「ああ。確かに恐ろしいな」

「じゃあ、次。いつも手に金属的な何かを持ってるわよね？」
いつも持ってるっけ？　・・・いつもは持ってないだろ。てか金属・・・？
「ＮＯだ」
『え？』と俺以外の全員の顔が驚きに変わる。

「どうする？答えを言うのか？」
「そうね……よし、答えるわ」
「正解は？」
「鬼よ」

は？鬼？正解っちゃ正解だが、鬼と書いて読み方が違うぞ？これは。
――ガチャ。バタン。ん？何の音だろうか？
「ってか、残念。不正解」
「はぁあああ！？　なんでよ？　どっからどう見てもツノを生やした鬼でしょうが」

「鬼は鬼でも鬼（オニ）とは読まないぞ」
「ほう？　なら鬼と書いて何と読むんだ？」
「え？ああ、鬼と書いて『ＩＳ学園の教師』と読むんです」
「そうかそうか。ところで、その教師とやらは誰なんだ？」

おい、頭の中で『危険信号（アラート）』が鳴るんだが。それに背後から殺気を感じる。
ってまてまて皆。なんで俺から遠ざかる様に離れるんだ？
ギギギギッ！っと、首を真横に九〇度傾ける。

視界の中に映る人物は普段持っている出席簿は無く――――

「へ、ｈｅｌｌｏ…千冬さん」

「ああ、挨拶は大事だな。だから私も挨拶を返してやろう」

スッっと握った拳を構える千冬さん。

「教師に対して敬意を持て馬鹿者めが」

ゴチンッ！

俺が粘土で作った鬼は――

鬼（千冬さん）だった。俺が作った造形物の鬼と、後ろに立つ鬼は実にそっくりだった。

41話（後書き）

楯無さんの出番無し…。

楯無さんの話書きたいんだけど、ネタがないなぁ…。

感想、その他、待ってます（一。一）ｙ・・・ｚｚｚ

夏祭り（前書き）

…gdってる。
…更に急展開。
・・・まぁ、大目に見てくれれば嬉しいです。

夏祭り

夏休みも残り僅かだ。
近所の夏祭りがもう少ししたら、始まるみたいで、
祭りの終わりには花火もあるとの事だ。
「どーするかなぁ…行くか、行かないか」

頭の中で考える。

行かない↓暇継続。(つまらない)
行く↓暇終了。(たのしめる)

よし。行こう。
「（一人で行くか？　それとも誰か誘って行くか？　ん～……）」

――――考えた結果、俺はケータイで一人、誘ってみた。
誘ってみた人物は――――

「ま、まさか…刹那くんから誘ってくるなんて……」
楯無さんである。
「？」
場所は篠ノ之神社。篠ノ之といえば、箒や束の実家なのだろうか？

先程見た舞を踊っていた巫女さんは箒に見えた気がする。
恐らく見間違いではない筈だろう。
と、まぁ、そんな事よりも、…だ。

「浴衣なんて久し振りだったけど、変じゃないかしら？」

そう、浴衣。今の楯無さんの格好である。

水色をメインとした色。所々に水玉模様。隠れた所に小さい華の柄。

「かなり似合ってますよ」

浴衣を着た楯無さんはいつもと違う雰囲気を纏っていた。

「ぁ……。ぅう～…」

率直に『似合っている』と言ったのに唸り声を上げられた。なんで？

「っと、早速回ってみましょう？楯無さん」

「そ、そうね。」

さて、夏祭りを楽しもうか。

「刹那くんって、甘い物が好きよね」

「糖分を摂取しないと生きていけない気がする位、好きですね」

手に持つリンゴ飴を舐めながら答える。

「ところで楯無さんは何処から回りたいですか？」

「そうね～。今のところは特に無いわね」

「そうですか？　ならこのままテキトーに見てまわ――――危なっ」

前方より突如飛来してきた何かを首を捻って避ける。

飛んできた方向を見ると、

「射的？」

射的屋だった。

よく見ると店主のオヤジが誤って弾（コルク）を発砲してしまったみたいだ。

「悪ぃ悪ぃ。銃に弾を詰めようとしたら失敗しちまってな」

謝罪の変わりに、と無料で射的(ヤ)をらせてくれるらしい。
「じゃあ先に楯無さん、どうぞ」
「そう？　なら先にやらせて貰うわね」
店主(オヤジ)から銃を受け取り、楯無さんは狙いを定める。

何と無く、楯無さんを見ていると
「あれ？　なんか構え方が・・・」
構えている銃はスナイパーライフルと同じ形で――。
「楯無さん。ちょっと失礼しますねー」

「？　なにかしら――――ひゃぁ！」
「うわっ、ビックリした！」
「わ、私の方がビックリしたわよ…？　えっと、なにかしら？」
「ああ。えっと…楯無さんって射撃苦手ですか？」

さっき思った事、それは楯無さんの銃の構え方について。
あまり安定してない構えだったので気になったんだ。
「苦手って訳じゃないけれど、得意って訳でもないわよ」
「ふむ。普通ってことでしょうか？　銃の構え方が気になったもので」

姿勢がおかしかったから、手を取って直そうとしたんだ。
「そうなの？」
「はい。だから、もう一度構えてもらっていいですか？」
「え？　ええ…」

そう言って銃を的へ向けて構える楯無さん。
「ああ、そこで脇を閉めて――ここはこうで…引き金(トリガー)を引く手は――」

手を取って構えを調整する。
「ＯＫですね。じゃあどうぞ」

「ぁぅ～～～…」
顔を真っ赤にしながら頷く楯無さん。何かあったのかな？
「お、準備できたか。さぁ一発目だ」
店主のオヤジに促され、楯無さんが引き金（トリガー）を引く。

パンッ。
――――べしっ。
コルクの弾が飛んで行き、獲物（景品）へ当たる。
――――しーん・・・。

「あ～」
「惜しいなお嬢ちゃん」
弾が当たったのは液晶テレビと書かれた木札。
当たり所は良かったのだが、札が倒れなかった。どうしてだろうか？

「惜しかったですね。次は倒してみましょう。まだ後、四発もあるんですし」
「そ、そうね。でも次は他のを狙ってみるわね」
再度、銃を構え直して発砲。今度は液晶ＴＶの隣のノートＰＣと書かれた札へ。
パァン。――べしん。――しーん・・・。

先程と何の変わりも無かった。
「はっはっはっ。惜しいな嬢ちゃん。あと三発だ」
「・・・・」
構えは乱れて無い。景品名が書かれた札への当たり所も悪くない。
これって――

（楯無さん）小声で声をかけてみる。
（何かしら？）
（もう一回、さっきの札のどっちかを狙ってみてください）
（？　別に構わないけれど）

新しい弾を装填し、発砲。そしてヒットする。だが結果は先程と同じ。
（やっぱりか）
（何がやっぱりなの？）
（二つ（アレ）の札、固定されてると思うんですよね）

只の札なら普通に倒れていた筈だろう。
（どうします？　他の景品に狙いを変えます？）
（いいえ。このまま狙いましょう）
見事に言い切った楯無さん。

（倒れない札を倒してみるのって何だか燃えてくるわね）
おお、ちょっとした闘志が芽生えた様だ。
「狙い（ターゲット）は液晶ＴＶで行くわ」
「了解です。なら全弾使って倒しましょうか」

四発目――――失敗。
「さあ後一発だぜ、お嬢ちゃん」
店主（オヤジ）がニヤニヤした顔で眺めている。その顔はこう語っている。
『その鉄の札が倒せる訳が無い』と。

そんな余裕顔を挫いてやろうと銃を構えた楯無さん。
視線を目標へ向け、引き金（トリガー）へと指をかける。
「すぅー…はぁー」

どれだけ気合入ってるんですか、と言いたくなるような緊張感が漂う。

――――パァンッ。

「あ」

「あーあ」

「あー、残念だったな…って！？」

べしんっ。――ばしっ。べしんっ。

着弾した所が景品が置かれる棚の角。

そこへ当たった弾が跳ねた。跳弾というやつだ。

一度目に跳ねた弾は液晶ＴＶの札へ。

当たり所が最良だったのか、札は倒れる。

そしてまたも弾は跳弾。隣のノートＰＣへ。そして倒れる。

・・・・・奇跡か？ギャグか？　跳弾って実弾で起こると危ないんだぞ？

「そ、その鉄の札二枚を倒すとは…！　え、液晶ＴＶにノートＰＣ当たり～～～っ！」

「え？」

「すげえな、お嬢ちゃん！　絶対に誰にも倒せない様に――――ああ、なんでもない」

やっぱり倒れないように細工してたのか。

「はぁ…」

「やりましたね～。まさか２つとも狙うなんて」

店主から赤字だコノヤロウ。と商品を貰うが、今は邪魔になるので後で貰う事にした。

―――――――――――――

「～♪」

「ば、バカなっ…！」

とある店――――金魚すくいの露店で敗北を味わう俺。

楯無さんが偶々発見した金魚すくいの店。

事の始まりは数分前――――――

「刹那くん、アレをやってみましょう」

「アレ？」

楯無さんが指差す先は『金魚すくい』。

「金魚すくい？」

おお、やった事は無いけど知ってるぞ、アレ。

「ああ、知ってますよ。金魚すくい。モナカってので金魚をすくうヤツですよね」

「あら？　刹那くんは初めてなの？」

「はい」

そりゃ初めてですよ。夏祭り自体、数えるほどしか来た事無いんですし。

「なら勝負は止めておきましょうか」

「勝負？」

「そう。負けた方が食べ物を奢るっていうのは、どうかしら？」

「別に奢らなくても俺が払うんですけど？」

「まあいいじゃない。やってみましょう？」

ま、いいか。初めてだけど面白そうだし。

「でも初心者には難しいわよ？」

「む。なら俺が勝って見せましょう。コツさえ掴めればイケる筈ですから」
「むむ。言うじゃない」
俺達は二人で金魚すくいの露店へ進んだ。
先客がいたので、金魚すくいのやり方を観察する。

うむむむ。案外難しそうだぞ。
そう考えていると店主に呼ばれ、俺と楯無さんにモナカとお椀が渡される。
「それじゃあ…」
「ええ…」

「「始めましょう（か）」」

モナカが破れない様に水へ付ける。そして金魚をすくう。
・・・一匹目。なんだ、簡単じゃないか。これなら余裕だ。
「ふっ。余裕ですね」
「あら。やるじゃない」

隣の楯無さんから掛かる声。手元を見ると既に一匹目を終え、二匹目をすくっていた。
「やりますねっ！」
と、まぁ…そんなこんなで白熱していたのだが……。

――――――

「まさか…ね。　ったく金魚の奴め、裏切りとは大した度胸でした

よ」
もうそろそろでモナカが破れる頃、俺と同点だった楯無さん。
二人同時にモナカが破れたので、勝負は中断。
お椀に残っている金魚を数える所で、

ばしゃっ！
――は？
――え？
ひゅるるる…。

ばしゃっ！
俺が持っていたお椀から一匹が跳び跳ねる。
そのまま空に向かって飛翔。
滞空時間は何秒だったか…。金魚（ヤツ）は楯無さんのお椀へｉｎ．

――――――

で、俺の負け。
これは勝負の最中に起こった事だから文句は言わないけど。

「イレギュラーな金魚でしたね」
「確かに型破り（イレギュラー）だったわね」
露店から出て、他の所を回りに行く。
二人で祭りを楽しんでいると、花火が始まる時間が近づいてきた。

「そろそろ花火始まるようですし、移動しましょうか」
「どうしてかしら？」
「花火を見るには良い場所があるんですよ」
幼い頃に一度だけ見た時に発見した場所である。

「でもその前に」
「？」
「楯無さん、何が食べたいですか？」
さっきの勝負で負けたら云々だ。
「ああ、その話ね。　そうねなら――」

――――――

ここは他の場所よりも少し薄暗い。
神社より少し離れた場所で、寝転がれる程広い開いた空間。
辺りは木々が囲っており、静かで落ち着く所だ。
「そろそろ始まりますねー」

「そ、そうね」
カキ氷を手に頷く楯無さん。
そわそわしているのは花火が楽しみなのだろうか。
「と、ところで刹那くん？」

「はい？」
空を見上げるのを止め、楯無さんへと向く。
振り向いた楯無さんの顔は何故だか真剣な瞳でこちらを見ていた。

――――――――

今日は刹那くんの急な誘いから始まった。
「（いきなり『夏祭り行きませんか？』なんて驚くわよ…）」
突然の事だったから、言われて直ぐには言葉の意味が分からなかっ

た。
浴衣を着るは久し振りでサイズが変わってないか心配だった。
・・・・・最近、刹那くんと話をする時にかなり緊張している気がする。
「（やっぱり妹（刹那くんの）さんに言われたからかなぁ…）」
彼の家へ押し掛ける形でお邪魔した時、妹さんと話した事――

――――

『――好き、だから刹那くんと一緒にいたいのよ』
言ってしまった。
『うわー…ハッキリと言いましたね。恥かしくありません？』
『……何故かしら。貴女と刹那くんと話してるとペースが乱されるわ』

話の主導権をいつの間にか握られている感じね。
『そうでしょうか？　っと、まあ、楯無さんの気持ちは分かりました』
ですが、まだまだですね。と付け足される。
『まだまだ？』

『楯無さん、あなたは兄さんが好きなんですよね？』
『え、ええ』
『恋愛対象としてですよね？』
『そ、そうね』

この子…相手にするのが少し辛い。
『まだまだです』
何がかしら？
『恋愛経験の無い刹那（ヤツ）を落すには、まだまだ。と言ってます』

え？
『好きなら好きって言う…告白とかしないんですか？』
『！？』
『それを躊躇ってたら刹那（バカ）は何時までも気付きませんよ』
簡単に言うけれど……ねぇ？
『と、言う事で。これから買い物でも行ってきて、好感度ｕｐとか狙ってください』

――――――

という流れで買い物（ショッピング）に行ったのだけれども。
今は誰もいない場所にいる。二人きり。
もしかしてチャンス…？これってチャンスなのかしら？
誰に問うたのか、と訊かれれば、
その問の答えはこうだ。『答え（ファインド・アウト・マイ・マインド）は自らの中にある』、と。

すぅー…はぁー。
深呼吸をして、気持ちを落ち着かせる。
よし、言おう。　このまま黙っているのは私らしくない。
「刹那くん」

――――――――

・・・さっきから何故に楯無さんは黙っているのだろうか？
俺の名前を呼んだ後、じっ。と見つめたまま黙られた。

どうかしましたか？　と声をかけようと――
「せ、刹那くん！」

「はい？」
大きな声でまた名を呼ばれる。
「私は…刹那くん。あなたの事が、す――」
ドォーーーーン！

「お？　始まりましたよ楯無さん」
「・・・・・・」
楯無さんが黙ったままコチラを見てくる。
「・・・・・・」

「・・・・・」
無言で見つめ合うまま時間が過ぎていく。
「ほ、ほら。綺麗ですよ花火」
俺がそう言うと、楯無さんは間をおいて、何時も通りの笑顔になる。

「――そうね。本当に綺麗ね」
何とも言えないまま俺達は夜空へ放たれる花火を眺めていた。

―
―
―
―
―
―

夏祭りが終わり、楯無さんと別れて、俺は家に戻ってくる。
自室のベッドに寝転がる。

「・・・・・・・・」

聞こえた。

花火が始まった瞬間に楯無さんが口にした事。

『私は…刹那くん。貴女の事が、好きなの』

と、楯無さんは言った。絶対にそう言った。

『好き』……？どういう意味だ？好き？　人が、人の事を、好きに、なる？

なんだよ、それ。

『あの食べ物が好き』と『あなたの事が好き』…。

その二つは違うモノだと理解できる。

でも……

「さっきの『好き』ってどんな意味なんですか？　楯無さん…」

その答を知りたかったが、俺の疑問に答えてくれる楯無（その人）さんはいない。

夏祭り（後書き）

ど・う・し・て・こ・う・な・っ・た・！

後悔はしていない。己の信じた道を進むのだっ！

感想、その他、お待ちしてます＼（。ロ＼）（／ロ。）／

俺は…。（前書き）

ど・う・し・て・こ・う・な・っ・た・！

ホントにどうして　こうなった！？

俺は…。

夏祭りの日から数日経った日の夜。

「・・・」

『好き』

その意味が解らない。

解らないから答えを知る必要は無い？

否、知らなければいけない事なんだと思う。

でも……。

「なんなんだよ『好き』って」

考える。　考える。　考える。　けれど解らない。

もうすぐ二学期…。

楯無さんと会う事になるだろう。

そこで楯無(彼女)さんに『好き』とは何か、訊いてはならない気がする。

・・・・・・

「あああああああああああああああ！！！」

何なんだよ…このモヤモヤ。

「畜生…」

俺は言い表せない気持ちで意識を闇へと沈めていった。

――――――

「・・・・・」
ガギィンッ！　と鋭く重い金属音を響かせ、俺と一夏は刃を交えて対峙する。
先程の鈴と一夏の試合後、一夏が俺と模擬戦を挑んできた。
二つ返事でＯＫし、今は俺が優勢。一夏の絶望的な状況だ。

「・・・・・」
今の俺は酷く無表情な顔だろう。己の意思を持ってない感じだ。
「くっ！」
「『強制執行（エクセキューション）・機能停止（メカニカルフェアリアー）』…発動」

自分でも何をしているのか驚いたが、いつの間にか唯一（ワンオフ）使用能力を使っていた。
「！？　なんだよそれっ！」
危険を察知したのか、一夏が刃を交えずに回避する。
「……っ！？」

俺は慌てて黒月から出てくる、鈍く、蒼黒いエネルギーの刃をしまう。
「一夏…中止だ」
「は？」
「…授業っつても、ダルいから休憩。他の奴と模擬戦してくれ。な？」

「お、おう」
「いやぁー身体がダルいんだよ。夏バテってやつだ、うん」
「そうなのか？　水分はしっかり摂らなきゃ駄目だぞ？」
「あいよー」

アリーナの地面へ着陸。《鐵》をネックレスへと戻す。
「黒時」
ん？千冬さん？
「はい？」

「先程使ったモノは？　それに今日の態度は何だ。だらけているぞ」
…ですよねー。
「ふぅー。今日は…ってかヤル気が無いのは夏バテです」
実際は違うけど。

「さっき出したのは…すみません、迂闊でした」
「いや、私はあれは何か？と説明を求めているんだ」
「へ？　知りませんでしたっけ？」
「知らん。聞いた事も無い」

「そうでしたっけ？　あれはワンオフ。『強制執行（エクセキューション）・機能停止（メカニカルフェアリアー）』です」
そう、全ての機械類に対しての天敵。
「鐵のワンオフだと？　まだ一次移行（ファーストシフト）だろう？」

ちょ、え？　あのー…
「一夏だってそうでしたよ」
「…まさかお前もだと思わなくてな」
「あらら。そうですか。あぁ、えっと能力はですね――」

黒月の刀身が割れて、出てきたエネルギー刃。
（刀身が割れるのは第四世代の展開装甲だからしい。束が言っていた）
そのエネルギー刃が機械に触れると、その機械はもう二度と使えな

くなる。
以前、『銀の福音』のエネルギー翼を斬りおとした時、再生しなかった様に。

しかし、二度と使えなくなると言っても、黒月で斬った場所だけなので、
機械の『核』に触れなければ、機械の全てを止める事は不可能。
あくまで斬った部分、一部だけ。だ。
その説明を千冬さんへする。

「それがお前の言っていた黒月が必要と言う事か？」
「ええ。ですが、今の様に戦闘で使用するつもりはありません。
俺は目的の為だけに使うだけです。先程のは…スミマセン」
自分でも無意識に使っていたのだ。

「…分かった。今後は気をつけろ、いいな？」
「はい」
ふぅ…何やってんだか、俺。
授業終了の鐘が鳴る。次は昼飯の時間か。

――――――

「朝は特に何にも無かった様にしてたからなぁ…楯無さん」
何時も通りの態度でいられると、聞きたい事が聞き辛い。
「ふぅーむむむ」
「――――刹那はどう思う？」

昼食のデザートを食べていると、声がかかった。
「んあ？　何が？」
「いや、だからなんで俺の白式が第二形態移行（パワーアップ）したのに負けたんだろうって」
ああ、その話か。

「元より燃費の悪い機体なんだ。それにシールドエネルギーを削る能力なのに、
それが二つに増えたら尚更だっての」
「うーん……」
唸りながら考え込む一夏。……エネルギー運用を上手くすればいいだけだと思うぞ？

そもそも一夏は無駄な動きが多すぎる。
相手からの攻撃には防御じゃなくて回避すればスピードを落とす必要も無いものを。
考えていると箒、セシリア、鈴、シャルロット、ラウラと一夏が話していた。
昼食を終え、午後の実習へ向けて再度アリーナへ向かった。

――――――

「やっぱり無駄に広いもんだ…」
「何を今更。そんなこと考えてるなら、白式の調整でもしとけ」
俺に言われた通りに白式のコンソールを呼びだす一夏。
それを見ていると、俺の視界は暗くなる。…ゑ？

「なっ！？」

誰かの指が、俺の視界を塞いでいる。気配を感じなかった…。
「だーれだ？」
この声は…。それに、この感覚…。

視界をふさいでいる指はさらさらとして、すこし冷たいのが気持ちいい。
やっぱり…後ろの人は――――
「楯無さん、何やってるんですか？」
「はい、正解」

予想通り、楯無さん。…特に何か変わった様には見えない。
こんなにも何時も通りの表情でいられると、『あの事（好き）』が聞き難い。
「誰？」
一夏が疑問を口にする。　ああ、初対面だっけか。

「この人は――」
ＩＳ学園生徒会長だぞ。と言う前に人差し指で口に蓋をされる。
教えちゃ駄目、と言う事だろう。
「んふふ」

「なぁ刹那、この人は？」
「何で俺に聞く？　本人に聞けばいいだろ？」
「あ、そうか。――あの、あなたは――」
「あっ」

俺達の後ろに楯無さんの視線がずらされる。
何だろう、と一夏が振り向く。…バカめ。何も無いっつーの。
そう簡単に背後を許すな――――…あ、俺、今さっき背後捕られたばっかだ。
「引っかかったなぁ♪」

そこで一夏へ扇子を突き出し――むにっ。…ゑ？　俺？

え？そこは、こう、一夏にやるトコロでは…？

何とも言えない空気の中、楯無さんが口を開き。

「それじゃあね。刹那くん達も急がないと、織斑先生に怒られるよ」

「「え？」」

嫌な予感→壁の時計へ視線を→授業開始、三分経過…。

「だあああっ!?　や、やばい！　まずい！」

「一夏ぁっ！　走れ！」

「お、おうっ！」

走りながら後ろを確認。元凶の楯無さんは既にいなかった。

――――

「ふぃー…」

授業へ遅れた時、一夏はシャルロットによる『高速切替（ラピッド・スイッチ）』の実演と言う形で、遅刻の罰は許されていた。

俺はそれに巻き込まれたんだけど…。

「にしても…」

楯無さん、いつも通りだったな。と思い返す。

朝に楯無さんと会ったが、昼に見た時と同じく、いつも通り。

・・・・・これって。

「俺の気にし過ぎ…？」

いや、違うと思う。そんな事は無い筈。

ガチャリ。おや？
「ただいま～」
楯無さん。
「お帰りなさい。今日は新学期の始めですし、忙しかったんですか？」
極力、今は何も考えず、普段通りにしよう。
「そうねー。もうすぐ学園祭だから、生徒会の方で話し合いをね」

「お疲れ様です。で？学園祭って何をするんですか？」
「…相変わらず人の話を聞いて無いわね」
「スミマセン」
いや、だって、ＨＲ（ホームルーム）とか寝てるし（バレない様に）

「各クラス毎に催し物をするの。それで、最も――」
と、そこまで言って黙る。
「最も――何ですか？」
「内緒、よ。　楽しみにしておいてね」

「はぁ」
別にそれなら詳しく聞かないけど。
・・・・・話が途切れた。
いかん。何故だか話しかけ辛い。　なんでだ！？

「あ、あの…楯無さん」
何とか話を続けようと、俺が発した言葉――
「夏祭りの時の…『好き』って、どういう…意味ですか？」
「…え？」

……後悔した。

なんで…なんで、その話を持ちだしたんだよ、俺…。

――――

沈黙。　静寂。　その言葉の通り、静かだ。
数十分か、それとも数分か。　兎に角、長時間が経過したと感じる。
実際はほんの数分かもしれないが。
「……」
「……聞こえていたの？」
静寂を破ったのは楯無さん。　その双眼は彼女には似合わない…怯えた様な眼。
「ええ…」
「そう…」

またしても沈黙が始まる空気となるが、今度は俺が話しかける。
「…聴こえました。『好き』って言葉」
聴こえたのだが、意味が解らない。
「けど、俺にはよく解りませんでした」

「それは――どういう意味、かしら？」
「楯無さんが俺に言った『好き』って言葉の意味、です。
好き、それが人――――俺に向けられた言葉なのは理解しました…けど」
「…けど？」

「人が人を好きになるって、何ですか？」
「え？」
そんな驚いた顔をしないで下さいよ。
「それは…愛情ってヤツですか？」

愛情…辞書で意味を調べてみた事があったが、結局理解不能だった。
親が子へ注ぐ愛。異性に対しての愛。
「なんなんですか、愛って…」
「それ、って…」

「親から注がれた愛？　それは俺にもあるんですか？　あれが愛なら…俺は」
過去を思い返す。
…親との記憶。
己の為に…息子と娘をカネの為に差し出す両親…。
人を人とも思わない態度。

そこにあったのが愛なら…
俺は……。

「俺は…愛情なんていらない！」

「――――ッ！」
その言葉が楯無さんにどれ程の重みがあったのかは知らない。
だけど、その言葉が彼女の心に大きな傷を負わせた事は分かる。
薄らと浮かべた涙を零しながら、部屋を出ていった楯無さん。

俺は……何も感じる事も無く、開いたままのドアを眺めていた。

俺は…。（後書き）

話がどんどん難しく…。
一応…この先の展開は考えてるんですけど…ね。

この先の話を考えるので、更新が遅くなるかもです…。

感想、その他、待ってます／（ ゜ロ／）（／ロ ゜）／

４４話（前書き）

今回は…一体、何を書いたんだろうか？

４４話

翌日。全校集会が行われた。
内容は学園祭の事だろう。
「（あの後、楯無さん　部屋に帰ってこなかったな…）」
いや、朝には戻って来たが、すぐに出ていってしまったのだ。

「それでは、生徒会長から説明をさせていただきます」
生徒会役員の一人であろう人の声で、騒がしかった空気が消えていく。
「やあみんな。おはよう」
楯無さん…。

作り笑顔で話している感じ…。
何ヶ月も一緒にいるのだ。　それ位は感じ取れる…否、俺がそう思っているだけか？
「さてさて、今年は色々と立て込んでいて　ちゃんとした挨拶がまだだったわね。
私の名前は更識　楯無　君たち生徒の長よ。以後、よろしく」

にっこりと微笑んだ楯無さんに、熱っぽい溜息を洩らす一部の生徒たち。
「では、今月の一大イベント学園祭だけど、今回は特別ルールを導入するわ。
その内容というのは――」
慣れた手つきで扇子を取り出し、横へとスライドさせる。

それに応じた様に空間投影ディスプレイが浮かび上がった。
「名付けて、『各部対抗織斑一夏&黒時刹那争奪戦』！」

ばばぁんっ！と小気味のいい音を立て、扇子を開く。
それと同時に俺と一夏の写真が映っていた。

「…は？」
「え……」
「えええええええええ～～～っ！？」
全校生徒による驚愕音声（ソニックウェーブ）。ホールが…揺れた。

何を考えているのか考えていると、一斉に俺と一夏に視線が集まる。
「静かに。学園祭では毎年各部活動ごとの催し物を出し、それに対して投票を行って、
上位組は部費に特別助成金が出る仕組みでした。しかし、今回はそれではつまらないと思い…」
びしっ、と扇子で俺達を指す楯無さん。

「織斑一夏と黒時刹那を、一位の部活動に強制入部させましょう！」
再度、雄叫びが上がる。
「うおおおおおおおおっ！」
「素晴らしい、素晴らしいわ会長！」

「こうなったら、やってやる…やぁぁぁってやるわ！」
「今日から直ぐに準備始めるわよ！　秋季大会？　ほっとけ、あんなん！」
色々と大丈夫なんだろうか？　今叫んでいたヤツら。
けどなぁ…部活、か。　何をやればいいのか解らんぞ。

「というか、俺の了承が無いぞ…」
前から一夏の声が聞こえる。　諦めろ。愚痴っても何も変わらないから。
一度火が付いた女子の勢いは止まらない。

熱く燃える女子達を余所に、全校集会は終わった。

――――

同日。教室の放課後の特別ＨＲ。

今はクラスの出し物を決める為、ワイワイと盛り上がっていた。

「……おい、一夏」

「あぁ…分かってる…」

クラス代表と俺（千冬さんに命令されて）は皆の意見を纏めなければならないが…

内容が…

『織斑一夏と黒時刹那のホストクラブ』『織斑一夏＆黒時刹那とツイスター』『織斑一夏＆黒時刹那とポッキー遊び』

「「却下！」」

最初はどんなモノか知らなかったが内容を知らされて、却下した。

「ふざけんな！　誰が嬉しいんだよ、この企画！」

ええええええー！！　と大音量サラウンドでブーイングが響く。

「そうだ！　誰が嬉しいんだ、こんなもん！」

「私は嬉しいわね。断言する！」

「そうだそうだ！　女子を喜ばせる義務を全うせよ！」

「ウチのクラスの男子二人は共有財産である！」

「他のクラスからいろいろ言われてるんだってば。ウチの部の先輩も煩いし」

「助けると思って！」

「救世主（メシア）気取りで！」
うん、意味が解らねえ。　というか、俺に何をしろってんだ？
千冬さんは職員室へ行っていて、この場にいない。
なので、
「山田先生、許可できませんよね？　やっぱり真面目に考えるべきですよね？」
「えっ！？　わ、私に振るんですか！？」
コラ、副担任だろうがアンタ。

「え、えーと…うーん、わ、私はポッキーのなんかが――」
「はい、もういいです。先生に訊いた俺が愚かでした」
頬を赤らめながら言わないで、副担任…。
「刹那の言う通り、真面目に考えてだな！」

「メイド喫茶はどうだ」
突然響く声。ラウラだ。
「客受けは良いだろう。それに、飲食店は経費の回収が行える。確か、招待券制で外部からの客受けはいいだろう？　それなら、休憩場としての需要も少なからずあるはずだ」

「ふむむ…。　みんなはどう思う？」
クラス中の俺とラウラ以外がぽかんとしていたので訊いてみる。
「いいんじゃないかな？　一夏と刹那には執事か厨房を担当してもらえればＯＫだよね」
シャルロットの押しの一言は皆の心にｈｉｔする。

「織斑君、黒時君、執事！　いい！」
「それでそれで！」
「メイド服はどうする！？　私、演劇部衣装係だから縫えるけど！」

覚醒する女子一同。何がそんなにテンションを高くするんだ？

「メイド服ならツテがある。執事服も含めて貸してもらえるか聞いてみよう」

またもやラウラ。そしてまた、クラスのみんなは「え？」となる。

「――ごほん。シャルロットが、な」

「え、えっと、ラウラ？　それって、先月の…？」

「ああ、夏休みにお前らが二人で――むごぉ」

バイトしてたヤツか。と言おうとしたら、ラウラのＡＩＣで黙らされた。

まあ、そんなこんなで我がクラスの出し物は『ご奉仕喫茶』となった。

――――

「ねーねー黒時君」

「んー？」

一夏は今、職員室へ行って学園祭の出し物について報告へ。

俺はクラスの女子達に話しかけられた。

「あ、あのさ…『ご奉仕喫茶』の練習しない？」

「練習って？」

「たっ…例えば！　『お帰りなさいませお嬢様』って私達に言ってみるとか！？」

「ゑ、『ご奉仕喫茶』って、そんな事言うの？」

「そ、それはそうだよ！『ご奉仕喫茶』なんだもん！」

そう言うモノなのか…？　…ならやってみるか。

「じゃあ…――お帰りなさいませ、お嬢様」

ニコリ。作り笑顔１２０％の営業スマイル。これでいいのか？

「「「・・・・・」」」

…周りの女子達は顔を赤くして、黙っておられた。

何故？

――

教室を出て、ふらついていると――

ｐｉｐｉｐｉ．

ケータイが鳴る。

「なんだ？　長閑」

『おや、兄さんが私の事を名前で呼ぶとは珍しい』

妹の黒時　長閑（のどか）。何の用だよ。

『楯無さんと何かありました？』

「なっ！？」

『「何故知っている！？」とは訊かないで下さい。で？　今の心境は？』

「……何故お前に言う必要がある？」

『はぁ…どうせ「なんなんだよ」とか「愛ってなんだよ」とかでしょう？』

何故分かる？

『この際です。ご託はいいです。黙って聞いてください。ＯＫですね？』

ぉ、おぉ・・・・・

長閑は一息ついて――――

『答えなんてありません』

「は？」

『それじゃ、失礼しますね。　あ、学園祭のチケットを送ってくださいねー』

「はぁ！？　ちょっと待ちやが――」

ブツッ！と一方的に切りやがった。

「……」

『答えなんて無い』

その言葉が頭の中で響き渡っていた。

――

そんな事を考えながらも、放課後の学校を歩き回る。

放課後は部活動をする生徒が多く見られる。

偶々、部活動を見て回っていると、畳の道場へと足が向いた。

そこで見た光景は――

「楯無さん…と一夏？」

二人は白胴着に紺袴という格好で、向かい合っていた。

「お？　刹那」

一夏の言葉に楯無さんも俺に気付く。

「刹那くん？」

「こ、こんにちは？」

何だろうか、こう、言い表せないモノがあるぞ？

「刹那は何やってんだ？」

「ん？　暇だったからな…この辺を歩いてただけだ」
「そうなのか」
「って、お前は何やってんだよ？　楯無さんと一緒に」
俺が尋ねると説明が始まる。

聞けば、一夏と楯無さんが生徒会室で話をしていたらしい。
そこから――よく話を聞いて無かったので覚えて無いが――勝負する事になったらしい。
・・・ふむふむ。
「一夏」

「なんだ？」
「俺が相手をしてやろう」
「はぁ？」
「遠慮はするな。あぁ…本気で構えとけよ？　じゃないと――――」

脚に力を込めて、踏み込む。
「！？」
「一撃で終わるからな」
ドゴォッ！

一夏の腹へと一撃。
「――っ！？」
「んー？　お？　耐えたのか？」
「はっ…！はっ…！はっ…！　あ、当たり前だ…。ってか、いきなり何しやがる」

「何って…特訓？」
「訳分かんねえよ！？」
いやぁ…なーんか、楯無さんとお前が一緒にいるのを見ると、何か

殴りたくなった。
自分でも何をやってるんだろうか、と自分でも疑問に思った行動だ。

「よし。次は一瞬で終わらせる。痛みは無いと思うから…まぁ――」
大人しく気絶してろ。と言いつつ、再度の踏み込み。
「ざけんなっ！」
反撃してくんなって。俺は楯無さんと話がしたいだけなんだ。

一夏が戦いの構えをとるが、遅い。
俺は一夏の目の前で急ブレーキ、そして――
トンッ…。
「！」

首筋へと手刀を打ち込む。
そして一夏は崩れ、気絶（堕ちる）する。
「ふぅ」
「一体、何をしてるの？」

「ちょっと話しません？　楯無さん」
「え？」

４４話（後書き）

どうしよう…。

自分でも何を書いてるのか分からなくなった。
恐らく、この話は書き直すかも…。

この先の展開…？　全く考えて無いｏｒｚ
何かいいアドバイスがあれば教えてほしいです（懇願）

それでは～（；・―・）

45話（前書き）

gd gd！

短っ！

これからどうしよ！？

ってな訳で、どーぞ。

45話

「話？」
「え、ええ…」
・・・ヤバい、何を話そう？　何にも考えて無かったのに。
「あのですね……――」

いや、ホントに何を言おうかね？

「・・・・？」
「・・・・・」
「・・・・？」
「・・・・・」

ほら見た事か。　沈黙が生まれたぞ。

沈黙が始まって数分。楯無さんが口を開いた。
「刹那くん」
「はい？」
「なんで急に一夏くんと戦ったの？」

えーっとですね…何でしょうか？　俺にも意味不明です…けど――
「一夏が楯無さんと一緒にいたから？」
「へ？」
「いや、だから、楯無さんが一夏といたから？」

「・・・・・」
「俺…何か変な事言いました？」
「い、いいえ？」

ふむ？　ならいいけども…。

「あの、楯無さん」

「？　何かしら？」

「さっきは何してたんですか？」

とっても気になってるんですが。

「え？　ああ、それは――」

――――――

聞けば、一夏の特訓…と言う事らしい。

「楯無さん、一夏の特訓…俺も混ぜて貰ってもいいですか？」

「ど、どうしてかしら？」

んー…？

「駄目…ですか？」

何と無く、だ！

「だ、駄目じゃないけれど…？」

「じゃあ、決まりですね」

有無を言わせない様に強引に決めてしまった気がするが…

「まぁいいや」

そう思っておこう。

――

二日後。

俺は楯無さんと一夏の特訓を開始した。

が、

「俺は…無力だっ…」

膝をついて嘆く俺（実際にやってるワケじゃなくて心の中で）

いや、だって人にＩＳの事を教えるって初めてだし？どうやって教えればいいのかさえ…。

と、こう言った有様なので――

「一夏くん、スピードが落ちてるわよ。　もっと集中しなさい」

楯無さんに任せてしまう羽目に。

現在、一夏が行っている事は、

第二形態移行になり、手にした力――雪羅――を鍛える事。

俺は普段からＰＩＣをマニュアル制御にしているのだが、一夏は違ったらしい。

ので、今は雪羅を撃つ時の反動を自分で相殺しないといけないらしい。（カノンモード）

反動制御は少しのミスで背後に吹き飛ぶ事になる。

格闘戦メインだったヤツがいきなり射撃型の戦闘方法をやれってのは辛いだろう。

だから――

「オッケー。速度上がってきてるね。　それじゃ、そこで瞬時加速（イグニッションブースト）してみようか」

「え？」
「瞬時加速。シューター・フローの円軌道から、高直機動にシフト。相手の弾幕を一気に突破して、零距離で荷電粒子砲」
「ちょ、ちょっと待ってください！　いきなり、そんな…」
「急ぐ！」
「わ、わかりましたっ！」
急かされた一夏。…あ～…何か、この後の展開が予想できる。
ドゴーーーン。
「うっわ…」
シューター・フローを途中で止めたからだろう。
制御を失って壁に背中から突っ込んだぞ。
「こらこら、瞬時加速のチャージしながらシューター・フローも途切れさせないの」
「む、難しいです」
「ダメよ。ちゃんと覚えて。箒ちゃん以外はみんなできるんだから」
「え…？　刹那は出来るのか？」
・・・失礼なヤツめ。
「何を言うか。遠距離武器は持ってないけど出来るぞ」
「そ、そうだったのか」
何でそこで『ゑ？マジで？』みたいな顔をしてやがる一夏め。
「はい、起きて。もう一回」
……楯無さんの指導は厳しいみたいである。

――――

「刹那くん」
「？」
一夏の特訓が終わり、自室へ戻ろうとすると楯無さんに引き留められた。
「どうかしましたか？」

「その、ね？　この前の事で刹那くんも色々言いたい事があると思うの」
「はぁ…？」
「それに…ちょっと事情があって、少しの間、一夏くんの部屋に住む事になったの」
「は？　…それってどういう――――」

俺の言葉を最後まで聞く事無く、楯無さんは足早に去って行った。
「えーと・・・」
何故にそんな急な話を…。
んー…？

…あれ？　俺って――楯無さんに嫌われてる？
「・・・」
いやいやいやいや。
それは……嫌だな。

「んー？」
あれ？　俺、今、楯無さんに嫌われたくないって思ったのか？
なんでだろ？

全然　納得と理解が出来ないまま、俺は渋々と自室へ戻って行った。

――

45話（後書き）

これからの話をどうしていこうか…（思案中）

恐らく次回は学園祭の開始からでしょうかね。

風邪をひいてダウン中なので、更新スピードが落ちまする。

感想、その他、待ってますゝ（・ω・）ゝ

学園祭（前書き）

んー…。なんとか書いてみた感じです。

学園祭

がくえんさい　が　はじまった　。

そう、今日は学園祭当日。
１－１クラスにて、俺は執事服を着て接客をしていた。
「ご注文をお持ちしました、お嬢様」
そう言いつつ、女子（客）へと注文の品を渡す。

・・・・・メンドくせえ。
いや、別に接客がダルい訳じゃなくて、語尾に？『お嬢様』って付けるのが。
普通に『お待たせいたしました』でいいんじゃないのか？
「はーい、こちら二時間待ちでーす」

「ええ、大丈夫です。　学園祭が終わるまでは開店してますから」
近くから女子の声が聞こえる。
各種クレーム（ほぼ全てが待ち時間苦情）に対応して、忙しそうだ。
何と無く、教室から顔を出すと―

「うっわぁ」
列列列列・・・列が長い。人人人人・・・人が多い。
「あー織斑くんに黒時くんだ！」
「ん？」

近くを見ると、一夏も教室の外を見ていたようだ。
「こらー、出るなって言ったでしょー！」
「混乱度合いがあがるの！」
「お楽しみは最後まで取っておかないとね」

最後のは何だ？　全く理解できんぞ？
「「「いいから戻る！」」」
仕方ない、戻るしかないみたいだ。
「一夏、俺達の休憩って何時からだ？」

「刹那、俺達に休憩は無いみたいだ…」
「…本気（マジ）で？」
「ああ、本気と書いてマジだ。さっき「男子二人にはしっかり働いてもらうんだから」って言ってたぞ」
しかも、休憩無しで働いてもらわないとね。と付け加えられたらしい。

「労働基準法なんて、俺達には無いのか…」
うな垂れている俺を余所に、
「ちょっとそこの執事、テーブルに案内しなさいよ」
振り向いてみると――チャイナドレスを着た――鈴、か。

「一夏、出番だぞ。早く案内して来い」
「お、おう」
そのまま二人を眺めている。
テーブルに案内した後に、鈴が『執事にご褒美セット』を注文。

一夏が頑なにそれを阻止しようとするが失敗。
『執事にご褒美セット』…あれは断固辞退したいものだ。
内容は、客からポッキーを食べさせられる。
『メイドにご褒美セット』と言うのもあるが、それは執事がメイドに変わっただけ。

ポッキーを食べれるのは別に問題無いけども、食べさせられるって

のは…ちょっと。
そんな事を考えていると、一夏と鈴が騒ぎ出す。
うん、やっぱり一夏と鈴は賑やかだ。
だが、少々五月蝿くなってきたので止めようかと――

「はいはい、騒ぎ立てないの。　他のお客さんがビックリするでしょう？」
二人を止めたのは何と楯無さんだっ…た！？
「なんでウチのクラスと同じメイド服を着てるんですか？」
「こんにちは、刹那くん」

「あぁ、はい、こんにちは楯無さん」
普通に挨拶しちゃったじゃないか。
「さて、私もお茶しようかしら」
「接客はしないんですか…？　態々、メイド服まで着てるのに」

「うん」
「さいですか。　じゃあ――ご注文は何になさいますか？　お嬢様」
ずるっ！　楯無さんが椅子からこけそうになった。
「大丈夫ですか？」

「ええ。でも急に『お嬢様』って」
「あ～…ご奉仕喫茶のルールみたいなモノらしいんです」
「そ、そうだったわね」
何故に顔が赤いんですか？楯無さんは。

少々雑談混じりに話していると、騒がしい女子の登場。
「どうもー、新聞部でーす。話題の織斑執事と黒時執事を取材に来ましたー」
新聞部のエースこと黛　薫子さんだ。事ある毎に写真を撮りに来る

ので、顔なじみである。
「あ、薫子ちゃんだ。　やっほー」

「わお！　たっちゃじゃん！　メイド服も似合うねー。　あ、どうせなら黒時くんとツーショット頂戴」
言いながら撮ってるじゃないですか。別にいいですけどね？
楯無さんに至っては「いぇい♪」とかノリノリだし。
かなり楽しんでるなぁ。

そうこうしていると、一夏が執事服の上着を脱いで教室を出ていった。
ゑ…アイツ…まさか、休憩？
ん？　あぁ、一夏の変わりに楯無さんが入るのか。有難い、これで俺も休憩が――
「じゃあ、刹那くん。頑張って接客しましょう」
――…ある訳が無かった。

――――

「刹那くん」
「？」
テーブルを拭いていると、楯無さんに声を掛けられた。
「どうかしましたか？」

楯無さんの口から
「その…」
？

楯無さんにしては歯切れが悪いな。
「生徒会の手伝い…してくれる？」
「はい？」

――――

「どうしてこうなってる？」
場所は第四アリーナ。ここにいるのは
布仏（のほとけ）　本音（ほんね）――のほほん。
それに布仏　虚（うつほ）さん。

次いで俺、楯無さん。
俺以外は生徒会メンバー。
「それにしても意外でした。黒時君が私たちの事を知っていたなんて」
のほほんの姉、虚さんだ。

「前に調べた時に知っただけですよ」
別にアンタ等の事を調べたかったわけじゃない。
「知ってるって言っても名前と家柄位ですから」
「そうですか」

それだけ言って虚さんは黙ってしまった。
何なんだ？一体。
「それで？　楯無さん、俺は何を手伝えばいいんですか？」
今からやる事を聞いておこう。

「えっと、刹那くんには演劇の手伝いをお願いしたいの」
「演劇？」
「そう、観客参加型演劇よ」
「何ですかそれは」

演劇ってだけでも何をすればいいのか解らないし、さらに観客参加型演劇て？
「ま、まぁとにかく。これに着替えてほしいの」
沿おう言って、手渡されたのは……
「何ですか？　この服」

襟が立っていて、スラッとしたマントの様な物が付いた服装。
これは――――
「何故に…王子様？」
何でこの服なんだろうか？　誰かの趣味とか？

「これを着て待っててね」
そう言いながら楯無さんは何処かへ行ってしまった。
……
まぁ着替えとくか。

――――

俺が更衣室で着替え終わり、休憩をしていると――
「あれ、刹那？」
一夏が更衣室に―俺と同じ服を持って―入ってきた。
「んぁ？　何やってんだ一夏」

「いや、楯無さんにこれを着て手伝えとか何とかって」
「お前もか」
「お前もかって事は刹那もなのか…」
ふむ。楯無さんは一体何をやらせたいんだろうか？

そんな事を考えていると、ドアの向こうから楯無さんの声がかかる。
「二人とも、ちゃんと着たー？」
「え、ええ。一応」
返事をすると楯無さんが入ってくる。

「楯無さん、これは一体何なんですか？」
何故にこんな服を着る事が手伝いなのかが解らない。
「そうね。観客参加型演劇――『シンデレラ』よ」
言いながら取り出した扇子に書かれている文字は『追撃』の二文字だった。

――――

「さて一夏」
「なんだ刹那」
「シンデレラってさ」
「ああ」

「王子様二人もいたっけ？」
昔に絵本で呼んだ記憶はあるが、王子様は一人だったと思う。
「一人の筈、だと思う」
「だよな」

どうして二人も王子がいるのか、疑問に思っていると――
「さて4、そろそろはじまるわよ」
スタートの声がかかる。
「あの、楯無さん？　俺達、台本とか見て無いんですけど」
うむ。渡された服を着ただけだ。
「大丈夫、基本的にはこちらからアナウンスするから、その通りに話を進めてくれればいいわ。あ、もちろん台詞はアドリブでお願いね」
大丈夫なんだろうか？　アドリブて・・・。
「さあ、開幕よ！」
ブザーが鳴り響き、照明が落ちる。
「むかしむかしあるところに、シンデレラという少女がいました」
おぉ、普通の出だしだ。俺と一夏は互いに別の場所からセットへ向かう。
「否、それはもはや名前では無い。　幾多の舞踏会を抜け、群がる敵兵を薙ぎ倒し、灰燼を纏う事さえ厭わぬ地上最強の兵士たち。彼女らを呼ぶに相応しい称号・・・それが『灰被り姫（シンデレラ）』！」
「「・・・え？」」
「今宵もまた、血に飢えたシンデレラ達の夜が始まる。王子達の冠に隠された隣国の軍事機密を狙い、舞踏会という名の死地に少女達が舞い踊る！」
「・・・はぁ？」
「は、はぁっ！？」
「もらったぁぁぁ！」
いきなりの叫び声と共に現れた鈴。白地に銀のあしらいが綺麗なシ

ンデレラ・ドレスを纏っていた。

そして叫び声と共に一夏の冠へと手を伸ばしている。

（・・・何やってんだ？）

「のわっ！？」

「よこしなさいよ！」

反射的に一夏が避けたからなのか、直後に中国の手裏剣こと飛刀を投げていた。

「し、死んだらどうすんだよ！？」

「死なない程度に殺すわよ！」

「意味が解らん！」

・・・うむ、俺も今の状況…意味が解らない。

一夏がテーブルの上にあったティーセットのトレーで飛刀を凌いだ。

そのトレーを蹴り上げて吹き飛ばす鈴。

――あ。　そのまま踵落としに入りやがった。しかも靴は硝子（ガラス）の靴。

「って、おい！　ガラスの靴履いてんのかよ！？」

「大丈夫。強化ガラスらしいから！」

「アホか！　あぶねえ！！」

コントみたいな戦闘を繰り広げている一夏と鈴。…眺めていようか。

鈴の猛攻を凌いでいる一夏の首辺りに赤い光線――…レーザーポインター？

狙撃手でもいるのかと思った瞬間、一夏の顔の真横がパァンッと吹き飛んだ。

スナイパーライフル…セシリアだろうか？

サイレンサーを使用しているのだろう、発射音とマズルフラッシュ

が掴めない。

連射性に優れているのか、一夏の王冠を狙って撃ち込んでいる。

「・・・なんだ？　これ」

あまりの急展開に思わず呟いてしまった。

なんで一夏の王冠が狙われるのかは解らないが、俺の持つ王冠は狙われない。

まぁ狙われたくないんだけども。

暇すぎて欠伸をしていると一夏が冠を頭から外そうとしていた。すると――

「ぎゃあああああっ！？」

バリバリバリ！と電流の流れる音が聞こえたかと思うと、放送（アナウンス）が入って来た。

「王子様にとって国とは全て。その重要機構が隠された王冠を失うと、自責の念によって電流が流れます」

「はい？」

王冠を外そうとすると電流が流れる？　まさか俺も？

試そうにも試したくないので王冠には触れないようにしよう。

「ああ！　何という事でしょう。　王子様の国を思う心はそうまでも重いのか。

しかし、私たちには見守る事しかできません。何という事でしょう」

大事な事だから二回も言ったのだろうか。

そんなこんなで一夏は逃走。何時の間にやら増えていたシンデレラ×5

大変だなぁ一夏のヤツとか思っていると――

「――…地震？」

足元が揺れて地響きがするんだが。

「さあ！　ただいまからフリーエントリー組の参加です！　みなさん、王子様の王冠目指して頑張ってください！」

「はぁっ！？」

見ると数十人以上のシンデレラ。　見れば現在進行形でまだまだ増えていっている。

一つの塊として前進してきたシンデレラ達は二手に分かれる。

「えー…っと」

二手に分かれた内の片方…それでも十何人以上のシンデレラ達が俺に向かって来る。

「黒時くん、おとなしくなりなさい！」

「私に王冠を渡して！」

「そいつを…よこせぇえええ！」

「恐っ！」

瞳に修羅を灯したシンデレラ達は恐い。

一夏は反対方向へ逃げている様だ。

「って、人の事を心配してる場合じゃねえ！」

俺は一目散に逃走を開始したのだった。

学園祭（後書き）

ｄｇｄｇ

あー…ストーリーの構成は大体考えてるんだけれど…
もうちょっと各話の内容を深くしたいなぁ。

感想、その他、待ってます（・ω・）ゞ

投稿するのに時間がかかった理由は、
ニコ○コ動画とか見てたら書けませんでした。いや、スンマセン。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7087v/

IS～強制の適合者～

2011年11月16日22時36分発行